異界の魔女

humie

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異界の魔女

【Ｎコード】
Ｎ９８４７Ｒ

【作者名】
ｈｕｍｉｅ

【あらすじ】
―吸血族の餌として、呼び落とされた双子の姉妹の物語―　ひとりは冷酷と名高い皇帝のもとへ。ひとりは六人もいる個性豊かな王子達のもとへ。再び出会えると信じ誓い合った彼女達は、血に飢えた吸血族から身を守ることができるのか。それとも・・・？
しばらくはゼフィーニア編とゴルディア編の二つを交互に更新していく予定です。

プロローグ

真っ暗な世界に蒼白い炎が浮かび上がり、布を深々とかぶった陰惨な雰囲気の老人達の顔を照らし出している。悲壮感さえ漂うそこでは、何やら輪になって呪文らしきものがブツブツと唱えられ、白い魔方陣がうっすらと浮かび上がっている。

怜は片手でベッドの縁を、もう片方の手で傍にいる愛の腕を強く握り締めた。目を開けたいが身体が鉛のように重く、目蓋一つ思い通りに動かすことは叶わない。こういうことか、と彼女は苦々しく思う。家主の言葉が今更になって頭の中を逡巡し彼女は酷く後悔した。

「本当にこの部屋でいいの？そりゃぁこの部屋は安いよ・・・なんてったってこれまでの住人が皆失踪しているんだからさ、縁起が悪くてねぇ。」

人の良さそうな家主だった。隠すことなく教えてくれたが、気にならない、と言ってこの部屋を選んだのは怜だ。もう少し、慎重に選ぶべきだったのかもしれないが、怜は兎に角焦っていた。恋人を家に連れこんで嬉々としている母親と同じ家に住み続けたくなかったし、既に新しい妻を迎えた父親の元に行く事も出来なかった。怜は必死になって良さそうな物件を探し、そんな時に安くて広い部屋が見つかり、熟考することなく飛びついてしまった。

「お母さん、私と愛、二人で住むから保証人になって。家賃も自分達でなんとかするから。」

母親は悩む事無く了承した。まだ高校生の愛と怜でも住める部屋。敷金も礼金もなく、家賃も破格の部屋。そうでさえあれば、前住人が自殺した部屋だって構わなかったが、怜が探し出した部屋は、例外なく、全ての住人が途中で失踪しているという曰く付きの部屋だ

った。失踪の理由が今、はっきりとわかる。暗闇の向こうで白い魔方陣が光るたびに、そこへ向かって身体が強く引っ張られる気配がするのだ。
「・・・怜・・・ちゃん・・・。」
一緒に眠っていた愛の、心細げな声が怜の耳に届く。
「気を、しっかりもって・・・！」
かすれた声でそう返す。けれども引っ張る力はさらに強く、ふと、既にベッドの感触がしないことに気付く。何もない真っ暗な闇へ引きずり込まれ、落とされそうになる。けれどもまだベッドの縁の感触がある。怜はさらに力を入れるが、その途端、ぐいっ、と愛が引っ張られた。
「怜・・・・ちゃん・・・！」
「・・・愛っ！」
まるでベッドなどなかったかのように愛が引っ張られる。必死で彼女の腕を掴んで引き上げようとするがままならない。さらに引力が強くなり、とうとう持ちこたえられず怜の指がベッドの縁から引き剥がされる。
（このまま、まっすぐ落ちてたまるものか！）
怜は自分の中に膨らむ怒気のようなもの、何かよくわからない熱い塊を感じ、怒りに任せてそれを放った。そうして力任せに愛を引き寄せ、一気に軌道をずらす。わずかに白い魔方陣がかすんだその瞬間に、彼女達の目の前に真っ赤な爪が煌いた。避ける間もなく、その手は怜と愛の服を鷲掴みにし、彼女達を強引に引いた。途端、視界が眩いばかりに開ける。ダンッという大きな音を立てて硬い石畳に落ちる。膝を打った痛みに顔を歪めながら、そこでようやく怜と愛は目を開けることが出来た。
「ほほほほ、掠め取ってやったわ。」
女の高笑いにぎょっとして見上げると、真っ赤な爪と、その爪よりさらに深い赤色の髪を持つ女と、その女を囲むメイドのような服を着た女達が数人立っていた。

「お見事ですわ、陛下。」
「ほほほ、造作も無き事。ふむ。さて、まずは言葉を与えねば話にならぬの。」
聞いたこともない言語で話しているその女は、大きく胸ぐりの開いた真っ黒なワンピースを身につけており、それは床についても尚広がるほど裾が長く、その出で立ちはまさに魔女だった。彼女のボルドー色の唇は妖しく弧を描き、彼女の灰色の目は満足げに怜と愛を交互に見ている。そうして二人の額に手をかざすと、文字を語彙を、言葉という言葉を乱暴にねじこんだ。
「なっ・・・・・！」
頭の中に直接入ってくる違和感、脳の中を虫が這いずり回っているかのような気持ち悪さに眩暈が起こる。
「さて、こんなものか。どうじゃ、妾の言葉がわかるかや。」
怜は口を開きかけ、閉じる。話しかけられた。そうしてその意味も理解できた。しかし、無理やりねじこまれた言葉を話そうとしても上手く発音出来る気がしない。
「ナ・・・ナニ・・・コレハ、ココハ・・・ドコ？」
試しに発してみたものの、自分でもおかしいと気付く。日本語にはない音の響きを、練習することもなく出すことはやはり出来なかった。
「ふむ、言葉の意味はわかっても発音は難しいかの。まぁよい、意思疎通はできるじゃろ。」
「ココハドコ・・・？！オトシタノ、ハ、アナタ？」
「いいや、主らを呼んだのは妾ではない。」
怜がその鋭い目で睨みつけても、女は全く気にする様子がない。侍女がいそいそと持ち運んできたベルベットの椅子に深く腰掛けると、床にへたりこんだままの怜と愛を見つめながらゆっくりとその口を開く。
「良かろう、大雑把に妾が説明してみしょう。まず、ここはフィオール王国で、妾は国主、ルディベッラ。母と呼んでたもれ。」

「・・・ハハ・・・？」
「ふふふ。主らを呼び落としたのは、恐らくガルドの術者達よの。ガルドは我が国と並ぶ程の弱小国家であったはずが、ここ数年で急に力をつけてきよってからに。怪しきと思いて見張っていたのだがの、魔の掟を無視して時間を、空間を裂きつるに、しばらくは妾も手が出せなんだ。主らの場合は妾の近くまで弾き飛ばされてきたが故、無理やり引っ張ってくることが出来たがの。運が良かったのう。ガルドにそのまま落ちていたら、餌として喰われるだけの生であったろうに。」
「・・・喰ワレル・・・？」
「ふむ。異界の魔女達よ、そちらの世界も複数の種族に分かたれているのかえ？」
「魔女・・・？種族・・・？」
「この世界はの、三つの種族に分かれつるに。一つは我ら、魔力を生み出す魔族。もう一つが覇力を統べる吸血族。そして力無き人族。」
「吸・・・？！」
「ガルドは吸血族が統べる国。やつらにとって強き魔力を宿す魔族は究極の馳走よ。凡そ主らのことも血を啜るがために禁忌を犯して呼び寄せたのじゃろ。例外なく術者はその身を血に染めたはずじゃ。時空を裂く対価よの。」
「魔力・・・？ソンナノ・・・ナイ・・・。」
「何を言う。妾よりはるかに強く揺ぎ無い力を秘めつるに。なるほど、主らの世界ではその力を認識せなんだか？・・・ふむ、ガルドが幾人もの術者を犠牲にして呼び出すだけのことはあるのう。これほどの魔を内に秘めながら使い方を知らなんだとは。抵抗も出来ぬ良い餌よの。」
「・・・餌？」
怜は僅かに眉根を寄せる。これは、一体何の冗談だろう。夢だと思いたい。けれども冷たい石畳の感触が、不安げに身を寄せる愛の温

もりが、あまりにも生々しく、全てが現実だと認めざるを得ない。
「ふむ。良い餌じゃ。」
女王はすっくりと立ち上がると怜と愛の顎を掴み、上向かせる。
「かんばせも悪くない。片方はゴルディアに、もう片方はゼフィーニアへの貢物としよう。」
「貢ギ・・・？！」
「そう怒るでない。仕方あるまいに。我が国は小国。主らを掠め取ったとガルドに知られでもしてみよ、ひとたまりもないわ。我が弱小国が未だ独立していられるのはゴルディア、ゼフィーニアという大国二国に挟まれ守られているが故。両国とも吸血族が統べる国ではあるが、魔族の扱いは悪くない。ガルドの王族共のように餌としてしか扱わぬようなことは決してない故、案ずるが良い。」
「ワタシ、タチ、ヲ、バラバラニスル、ツモリ・・・？！」
「なるほど、主らは良く似つる。双子かえ？離れがたき気持ちはわかるが、許容してもらわねばならんな。ゴルディアだけに主らのような強き魔力を持つ娘を渡せばゼフィーニアが良く思うまい。逆もまたしかり。どちらかの国の反感を買って、国を失うような愚行を犯すわけにはいくまいて。我が国は微妙な均衡の上にある。許してたもう。」
女王は口では許しを請いながら、その実良い貢物が手に入った喜びを隠そうともせず、くすくすと笑いながら怜と愛の頬を撫でる。怯えたように肩を竦める愛を、怜はしっかりと抱きしめて女王を睨み続ける。
「それとも・・・このままガルドに返そうかえ？若しくは城下に放りだそうか？妾はそれでも良いぞえ。主らは自由を得るかわり、生きる術を失う。妾に従うと約束するなら、衣食住も、この世界の理も教えよう。どうじゃ。」
怜は唇を噛み締めた。従うしかない。今このまま放り出されても、通貨の価値も知らない、服装もこの世界に馴染んでいないだろう、吸血族に襲われるかもしれない、身の守り方一つわからない、何も

わからないのだ。
「従ウ・・・。」
「良い子じゃ。おお、そうじゃまだ名を聞いておらなんだ。」
「・・・ワタシ、ハ、レイ。コッチの子ハ、アイ。」
「レイにアイか。ふーむ。異国の名じゃな。少し変えるか。何か案はないかや。」
女王が周囲の侍女を振り返ると、ひとりがコツリと靴を鳴らして一歩前に出た。
「レイラディア様とアイリフィア様ではいかがでしょう。良く使われる名ですわ。愛称は・・・普通はレイラ様、アイリ様でしょうけれど、レイ様、アイ様とお呼びしても差し障りはないかと。元のお名前がなくなってはお可哀相でございましょう。」
「良いの。ではレイ、アイ、主らは今より妾の娘じゃ。妾のことは母様と呼ぶとよい。」
怜は瞑目し、深く息を吸い込み、そうしてゆっくりと吐きだした。
（焦っては駄目よ。今はどうしようもない。）
自分に言い聞かせるように、呪文のように、心の中でそう繰り返す。
（けれど、決して思い通りになったりしない。私は、愛と二人で、必ず元の世界に戻るのよ。そのために、今は耐えなければ。）
怜は静かに目を開け、しっかりと女王を見据えた。
「ハイ、母様。」
――その瞬間から、怜と愛の抗いの日々が幕開けたのだった。

1. 始動

与えられた部屋は十分な広さのある、簡素な部屋だった。ベッドとソファ、それから小さな机が、広い空間にポツン、ポツンと寂しそうに置かれている。大きな窓は換気のためか開け放たれており、そこから優しく穏やかな風が怜と愛の髪を弄ぶ。

怜はゆっくりと窓に近づき恐々と外を見渡した。―一面に広がる緑、緑、緑。怜の住んでいた場所の面影など何処にもない。ここが異界なんだと思い知らされる。

「綺麗な景色でございましょう？」

侍女だろうか、怜達を部屋へ導いた女がそう問いかける。

「ここフィオールは深き森の国とも言われます。国民の数もそう多くはありません。本当に小さな国ですわ。・・・とても穏やかで、心地良く、住み着く者も多い程、良い国です。」

怜は女の方を一瞥したが、すぐに視線を窓の外に戻した。この緑の牢獄で、一体あと何日、あと何か月過ごすことになるのだろう。そうして、いつ、さらなる牢獄へと送り出されるのだろう。侍女は冷たい怜の視線に一瞬身を固め、気付かれないように静かにため息をつき、部屋を後にした。

最初の1か月は言葉の発音の練習をしたり、この世界の成り立ち、歴史などを頭に叩き込まれながらあっという間に過ぎた。

次の1か月は礼儀や作法等を叩き込まれた。そうして2か月が過ぎた頃、ルディベッラ女王はようやく魔術について教えるよう、侍女達に指示した。

「レイ様、アイ様、本日から魔力のコントロールについて学んで頂きますわね。」

「魔力・・・。」
「レイ様もアイ様もこの世界では魔族です。そうしてお二人とも大変に豊かな魔力をお持ちですわ。」
「魔力の量というのは見えるものなの？」
この世界に来てから、愛と二人きりの時以外はほとんど笑顔を見せることのなくなった怜は、感情のこもらない冷たい声で侍女に問う。
「いえ、見えるというよりは、感じると言いましょうか。レイ様もアイ様も意識すれば感じられるようになりますわ。魔力は魂から溢れ、血肉に溶け、足先から髪の先に至るまで、我ら魔族の身体中を満たし、この世の理と我らを結びつける大いなる力です。吸血族も魔術を操れますが、彼等は自ら魔力を生み出すことは出来ません。それ故我々の血を求める種なのですわ。覇力でもって我らを支配し、我々の血から魔力を取り込み、そうして、さらにそれを糧として覇力を生み出す・・・。覇力の強い吸血族ほど、良質の血を求めます、強く濃い魔力の溶け込んだ血を。レイ様とアイ様はまさにその血をお持ちなのす。」
「・・・あの、覇力ってどんなものなのですか・・・？」
怜の腕を両腕で縋り付く様に囲い込んだ愛が不安げにそう尋ねると、侍女は安心させるために優しく微笑む。
「あれは・・・経験するのが一番なのですが、この王宮内は吸血族は出入り禁止ですし・・・。そうですね、なんというか圧倒的な存在感とでもいいましょうか。」
「存在感・・・？」
「従わざるを得ないと、本能で悟らせるような恐怖を、いえ、畏怖、そう畏怖を与える力ですわ。それこそ本当に強い覇力を前にしては、立ってもいられないと聞きます。呼吸も瞬きも許さない、絶対的な存在でもって場を支配する力。それが覇力ですわ。吸血族の争いは一瞬で決します。相手の覇力の前に膝を屈した者が敗者です。そうして覇力の最も強い者が統治者となる。とてもシンプルな種族です。」

愛の顔から血の気が引いていくのを見て、侍女は慌てて付け足す。
「けれどもゴルディアやゼフィーニアでは魔族は手厚く保護されておりますから恐れを抱かずとも大丈夫です。昔、吸血族による魔族の乱獲がありました。力の強い吸血族が幾人もの魔族をはべらしては血を啜り殺してしまうような恐ろしい時代ですわ。当然、魔族はあっという間にその数を減らしてしまい、その結果として餌を失った吸血族も弱体化しました。このままではいけないという事で始まったのがゼフィーニア王国です。大抵の吸血族は、気に入った魔族のことを”餌”などと呼び隷属させるようなことも間々ありますが、ゼフィーニアではそうした扱いは禁止されておりまして、恋人や配偶者として対等の扱いを受けることが可能です。実際、ゼフィーニアの婚姻の大半は吸血族と魔族による異種族間婚姻だとか。王族も同じで今の国王のお妃様は魔族ですわ。六人の王子様を御産みになられていて、特に第二王子様や第三王子様は、女子供や人族などのか弱き者に対して紳士的だとかで、種族を問わず国民からの人気が高いようです。」
「ゼフィーニアには純粋な吸血族は少ないということ？」
怜の質問に対して侍女は不思議そうに首をかしげる。
「混血がすすんでしまうでしょう？」
「混血・・・ですか？」
「半分吸血族で、半分魔族の子供が産まれるのではないの？」
「まぁ、まさか。自ら魔力を生み出すことが出きる吸血族など産まれようものでしたら、我々魔族は滅ぼされてしまいます。産まれる子供は魔族か吸血族かのどちらかにしか属しません。受胎の際に母親の意思で選ぶのです。ゼフィーニアの王子は皆、吸血族です。かの国の王位継承権は吸血族にしかありませんからね。」
「そうなの・・・。兎に角、ゼフィーニアでは身の安全は保障されるのね？」
怜の問いに侍女ははっきりと頷く。
「えぇ、そのため多くの魔族がゼフィーニアに移り住みます。そう

すると他国では魔族の数が減ってしまうので、吸血族が統治する国々では、魔族の流出を止めるための改革が進み始めています。ゴルディアでも餌制度の廃止を検討されているようですが、ただあの国は吸血族としてのプライドが非常に高い国ですので、すぐには難しいかもしれませんね。吸血族が絶対的な優位に立っていなければ我慢ならぬという古い考えが未だに蔓延っているようですわ。貴族院の重鎮が年寄りばかりだからでしょうけれど、最近は若手が台頭してきて、風向きが良い方向に変わりつつありますから、期待はできます。」

「それで、私達はいつ行くことになるの。」

愛は怜のその問いにはっとして、彼女を見上げた。それは敢えて聞かないようにしていた恐ろしい質問だった。

「実は今般、ゼフィーニアから魔族の来期留学生受け入れの告知が大々的に行われました。それも今回は対象が王族・貴族のみにしぼられているようですから、実質は六人いる王子様方の餌・・・、いえ、婚約者選びと見て間違いないでしょう。強い吸血族程、魔力の強さのみならず、血の濃さや味の嗜好に固執する傾向がありまして、かの国の王子様方もなかなか好みの血に出会えず婚姻が遅れていると国王が嘆いているようです。さらに、誕生当初はゼフィーニア王国始まって以来の覇力の持ち主と謳われた第五王子様の覇力が尽きかけているそうで、それが国王の焦燥に拍車をかけているようです。どの血も口に合わず全て吐き出してしまわれるそうですわ。15年以上も喉の渇きに耐えてきたというのは、俄には信じがたい話ですが・・・。」

「来期の留学生ね・・・。それはいつなの。」

「2か月後です。それに合わせてゴルディアにも留学生の受け入れを打診することになりましたので、お二人には同日にゼフィーニアとゴルディアへ発って頂く予定です。仮に餌にも婚約者にもなることなく留学期間が終えられました場合には帰国頂くことになりますが、そうなったとしましても我が国の王女として誠心誠意お仕えさ

せて頂く所存です。」
「・・・わかった。それでは私がゴルディアに、愛はゼフィーニアへ行く。」
「怜ちゃん・・・！」
侍女の話を聞く限りではゴルディアの方が環境は辛そうだ。怜は自らそこに行くという。愛は驚いて怜にしがみついた。
「女王陛下にはその旨、お伝えいたします。」
侍女はしっかりと頷いてそう答える。
「でも怜ちゃん・・・！」
「私はどこでも大丈夫。心配しないで。」
僅かに微笑んで怜は愛を優しく撫でる。
「お二方にはこれから基礎的な魔術の訓練を受けて頂きます。魔力の壁を作れるようになりましたら、お二方の膨大な魔力を持ってすれば大抵の覇力から身を守ることが出来るはずです。ご自分の身はご自身で守れるよう、最低限のコントロールを覚えて頂きます。」
侍女の言葉に怜と愛は真剣に頷いた。愛は少しでも強くなるために、怜に迷惑をかけなくてすむように、と。怜は、自分の身を自分で守ることができれば、この牢獄から逃げ出す方法が見つかるのではないか、愛を守ることが出来るのではないか、と期待して。双子の姉妹の抗いの日々は続く―。

2．ゼフィーニアの王族

金糸の刺繍や宝石の埋め込まれた王族特有のマントを肩にかけた面々が、緊迫した面持ちで大きなテーブルを囲んでいる。入り口から最も遠い最奥の席で手を組み、目を瞑っている国王のすぐ横には、王太子フェルデスが切れ長の怜悧な目を研ぎ澄ませ、テーブルに描かれた魔法陣に手をかざし続けている。

「・・・道が開いた。」
彼の静かな深い声が部屋に反響する。
「二人・・・でしょうか。魔力の気配が微かにします。」
同じく魔方陣に手をかざしていた第六王子のユーリが不安げに言葉を繋ぐ。
「まったくガルドは・・・やることなすこと美しくないね。」
頬にかかった金色の髪を払いながら、少し言葉に怒気をはらませているのは第二王子のメディシスで、彼もやはり同じように魔方陣に手をかざし、魔力を注いで陣の中に見える時空の狭間を監視している。
「・・・あ、落ちてきます！」
ユーリは思わず立ち上がり声を荒げる。その拍子に固定していなかったマントが彼の肩からずれ落ち、華美に装飾されて重さを持ったそれは、宝石のぶつかる音を響かせながら床に広がった。そうして鮮やかな緋色がユーリの足元を飾る。
「軌道がずれた？！・・・あ、消えた・・・？」
まだ十四歳になったばかりの彼は感情をそのまま表情に現してしまう。ユーリは狼狽を隠そうともせず目を見開いたまま固まった。
「時空の狭間に投げ出されたということですか？」
魔術を不得手とし、ただ眺めているしかできなかった第三王子ラウルが同情をにじませながら問いかける。王族の中でも彼だけは軍服

に身を包み帯剣している。
「・・・いいえ、別の道が急に開いて、そこに引き込まれたように感じました・・・。」
ユーリは呆然としながら、脱力するように椅子に腰を落とした。
「どこかの国が横取りしたかな。やるねぇ。どこだろう、タルジアン？バルシオかなー。ゴルディアの可能性もあるねぇ、あそこの皇帝は侮れないからね？」
場の緊迫した空気をまったく気にすることなく第四王子のオルフェは愉快そうにクスクスと笑う。
「どうだフェルデス、異界人の落ちた先は特定できそうか。」
地に響くような重々しい国王の問いかけに、フェルデスは一同を見渡す。王族のみならず宮廷の術者全てがその場に招集されていたが、皆一様に小さく首を振った。
「・・・残念ながら。」
「そのようであるな。」
王は短くため息をつく。
「やれやれ、ハルトも何も感じなかったのか。」
椅子に全体重を預け、だらりと座っていた第五王子が父王の問いかけを受けて大儀そうに顔を上げる。
「わかるわけないでしょ、僕、今は何の力もないんだから。嫌味？」
ぷりぷりと怒りながら不機嫌に悪態をつく彼に国王は大きくため息をつく。
「ハルト、随分顔色が悪いようだが、そのままだと本当に命を落とすぞ。多少のまずさは我慢して血を飲め。お前が力を取り戻してさえいれば、今回も詳細までわかっていたかもしれない。」
父親の説教にハルトはフンと鼻をならしてそっぽを向いてしまう。
「口に合わない血を飲むぐらいなら僕は餓死を選ぶね。」
「まぁまぁハルト、そう意地を張らないで。喉が渇いて仕方がない時は豚の血だって美味に感じるものだって良く言うだろう。君は食わず嫌いなんだ、試しにいろいろ飲んでみたらどう。」

「ナニソレ。つまり今ラウル兄がまずいと思いながらも仕方なく飲んでる血を提供している女達は豚ってこと？」
意地悪にくすりと笑ってハルトがそういうと、ラウルは慌てて首を横に振る。
「揚げ足をとるな！私は別にそういうつもりで言った訳では！」
「ラウル・・・、女性を卑下するようなたとえは関心しないな・・・。」
「メディシス兄さんまで！！誤解です！」
「ふふふ、あぁ、でも、・・・そう一瞬だけ、美味しそうだなって感じた気がする。」
「なに・・・？」
ハルトの発言に一同が驚き、視線が彼一点に集中する。
「それは、異界人に対して食欲が沸いたということか？」
国王の問いにハルトは僅かに首をかしげつつも頷く。
「・・・うん、多分ね。軌道がずれる一瞬前に爆発的な魔力が発せられてた。それが、少し美味しそうな気配だった気がする。」
「異界人自らの力で軌道をずらしたのか。」
「ハルトが美味しそうだというぐらいだから、そうとう魔力の強い異界人なのでしょうね。・・・ガルド皇国が何十人もの術者を生贄に呼び出す価値がある程の・・・。」
「引き続きガルドも注視しなければならないが、同時にどの国がガルドから異界人を掠め取ったのかも調べなければならんな。」
文官や武官を呼び集め、早速この件に関する会議の準備がすすめられる。体調が芳しくないハルトは国王から退席が認められるや、思い切り伸びをして、場を後にする。

―あぁ・・・喉が渇く・・・

もう何年もこの渇きと戦ってきたが、いつまでたっても慣れる事はない。血を吸わず覇力を失えば、吸血族は遅かれ早かれ必ず餓死と

いう名の死に至る。刻一刻と近づいてくる自分の死期をハルトはしっかりと見つめ、その度まるで他人事のように、まぁ仕方ないね、と思う。それが自分の運命だったのだろう、と。まずいから飲まない、という訳ではなく、飲めないのだ。どんな血であっても口に含んだ瞬間、まるで毒のように身体を蝕む。手足が震え、吐き気や眩暈が襲い、呼吸すら困難になり、結局嘔吐してしまう。口に合わないだけではなく、身体が拒絶する。美味しそうだと感じたのは先程が初めてだった。けれども、躍起になってその血を探す程の気力や生への渇望は、今の彼にはない。

自室へ戻るためにゆっくりと廊下を歩いていたところを突然眩暈に襲われ倒れそうになったが、後ろから誰かにそっと支えられる。崩れ落ちながらも何とか振り返るとメディシスがハルトの顔を覗き込んだ。

「本当に顔色が悪いね、ハルト。」

「何の用。」

キッと睨み付けて来る弟にメディシスは肩をすくめる。

「弟を心配してはいけないのかな。」

ハルトは短く息を吐く。

「別にそれはいいんだけど・・・。何と言われようと、飲みたいと思った血しか僕は飲まないからね。」

「・・・無理強いをするつもりはないよ。部屋まで送ろう。」

「・・・うん。」

素直に頷いた弟にほっとしつつ、ぐったりとしているハルトを抱き上げようとすると、メディシスに付き従っていた騎士が、さっと一歩前に出る。メディシスはそれを手で制し、軽々とハルトを肩に担ぎ上げた。

「別ににーさんの部下の人に運んでもらっても僕構わないよ。」

メディシスに担がれて地を失った足を、ハルトは幼い子供のようにぷらぷらとゆらす。

「君をかつげない程、私は非力ではないよ。それにハルトは、他人に触れられるのはあまり好きではないのだろう？」
「・・・うん。・・・悪いね。」
「いつもそれぐらい素直だといいんだけどね。」
「それ最近、皆に言われてる気がする。」
歩み始めたばかりだと言うのにメディシスは一瞬立ち止まりそうになる。確かにここ最近、少しずつハルトは素直さを垣間見せるようになった。けれどもそれは死を前にした者の素直さな気がしてならない。
「素直すぎるハルトはハルトじゃないけれどもね。」
穏やかに微笑み、動揺を誤魔化しながらからかうように言うと、ハルトは彼らしく”ナニソレ！”、とぷりぷりと怒り出し、メディシスを安心させる。

―一滴だけでもいい。ハルトが少しでも口にすることが出来る血を探さなくては。国内はこれまでも散々探しまわったのだから絶望的だろう。他国から集ってみるか・・・。

メディシスは一度道を定めたら脇道にそれることなく真っ直ぐに突き進む。第二王子としての膨大な通常の仕事の合間に国王や王太子である兄の許可をとりつけて、王侯貴族の留学生を受け入れる旨を記した親書を各国に送り、各国が競って力の強い者を送り出すよう、大陸全土に大々的な告知も行った。面白がったオルフェがメディシスの計画を手伝ったこともあり、僅か二ヶ月で準備を整えた。
「オルフェが手伝ってくれるとは思わなかったな。」
失礼なことを言われているにも関わらず、オルフェは全く気にすることなく屈託なく笑う。
「そう？まぁ、俺も出会いは欲しいしねぇ。魔族の統べる国の王女様方はとても気が強いときくから、今から楽しみだなぁ。」
オルフェがくすくすと笑うと、波打つように腰まで伸びている彼の

豊かな髪が、高い位置で括り付けられた宝石を支点にして軽やかに踊る。
「決して失礼な事はしないようにね。まさかいきなり噛み付くような下卑た真似をするつもりじゃないだろうね。」
「まさかぁ。流石の俺もそんなことしないよー。俺はただ恋愛ごっこが好きなだけ。」
「傷つけるようなこともするものではないよ。」
「はぁい。」
オルフェはひらひらと手をふりながら、わかったのかどうかわからないような気の抜けた返事をして、お説教されるなら退散と言わんばかりにメディシスの書斎から出ようとするが、ふと思い出すことがあって、途中でぴたりと足をとめる。
「そうそう、深き森の国からも返事があったよ。」
「何・・・？」
「一応、留学生の招待状出してみておいたんだよねぇ。珍しくあの国が魔女を提供してくれるつもりらしい。」
「あの吸血族嫌いと名高いフィオールが？」
「そうなんだよねぇ。嫌いっていうか、関わりたくない、って感じかなぁ。何度も吸血族の野蛮な男共に蹂躙されて滅びては、しばらくするといつの間にか復活している。それを何度も繰り返してきたトラウマが我々を遠ざけるのはわかるというか、当然な気がするけれどねぇ。」
「実に不思議な国だね・・・。どこの国も女性が生まれ難い状況に悩まされているのに、あの国で産まれる赤子は８割近くが女児らしいね。」
「何か秘密があるんだろう、って誰しもが思うから、いろんな国がフィオールを欲しがる。そうして乗っ取った途端、女の子が産まれなくなる。どんなに探しても女児の出生率を上げる方法は見つからず、結局住みにくい森の中から皆、離れていく。そうして放っておくと、いつの間にかまた魔女の国として再建している。興味深いよ

ねぇ。で、そのフィオールが王女をひとりこちらに寄越してくれるらしい。」
「ほう。」
「謎に包まれている国だから、本当に女王の娘かはわからないけれどね、楽しみだなぁ。フィオールの魔族は驚くほど魔力が強いらしいからねぇ。」
「あの国には吸血族はほとんどいないのではなかったかな。そんな国で生まれ育って、急にこんな吸血族だらけの国に来るのは姫君も大層不安だろうね。」
「まぁ、変わりにガルドが攻めてきたら守ってくれって内々に打診されちゃったけどね。」
「・・・なるほど。」
「ここ最近急に力をつけ始めた隣人に、フィオールも警戒しているんでしょ。打診は受けといたよ。いくら大国ゼフィーニアと言えど、フィオールの魔族達を喰らい尽くしたガルドの皇族を相手に、無傷ではすまないだろうからね。」
「うん、それは構わない。」
「あと、多分フィオールはゴルディアにも同じ打診を送ってると思うよ。」
「うん？」
「送られてくる王女は双子の片割れらしい。もう片方はゴルディアに送ると予め知らされた。それもＯＫしといたよ。あの国は今のところ敵ではないからね。味方でもないけど。」
「あぁ、問題ないと思うよ。今生皇帝は無闇に領土を広げたがるタイプでも好戦的でもないからね。今の世代の間は、あの国と敵対することはないだろう。しかもハルトと同じように血に飢えていると聞く。皇帝の弱体化が進んで、ゴルディアがガルドに吸収される方がはるかに怖い。・・・しかし共に生まれ育った姉妹が別たれるのか。・・・心が痛むね。」
「そう？じゃぁ俺が慰めてあげなくちゃ、かな？」

「くれぐれも紳士的にね。」
オルフェは軽く肩をすくめて見せてから、軽快な足取りでメディシスの書斎から出て行った。扉が締まると同時にメディシスは持っていたペンを置き、椅子から立ち上がると窓の外を見渡す。
「ゴルディアに親書を出してみるか。」
「・・・親書ですか？」
これまでただじっと立っていたメディシスの侍従が訝しげに問う。
「うん、これまで一切の国交がなかったけれど、あの国は我々以上にガルドに隣接しているから、より多くの情報を得ているかもしれない。」
「もし、ガルドとゴルディアが手を組んでいたら、危険なのでは。」
「ゴルディアほどプライドの高い国はないよ。他国と手など組むものか。ただ、そうであるが故に、あの国から情報を引き出せる可能性は低い・・・。もうしばらく様子を見た方がいいか。」
メディシスは目をすっと細めてゴルディアの方向へと伸びる空を仰ぐ。憎らしいほど雲ひとつない晴れ晴れとした青空をにらみつけ力強くカーテンを引く。室内に濃い影が落ちた。

3．ゴルディアの皇帝

「ゼフィーニアの第二王子は存外に勘が鋭いようだ。」
大広間の玉座にゆったりと腰掛け、年老いた術者が用意した魔鏡を眺めていた皇帝カイルは、メディシスが力強くカーテンを引くや否や、そう言って目を細めた。襟足だけ長く伸ばした漆黒の髪が、椅子から零れ落ちている。
「王宮内は結界が強く、流石に覗き見することは叶いません。」
白く長い髭が床に着きそうな程、深く項垂れる老人に、カイルは苦笑する。
「良い。ルディア、何かわかったか。」
それまで玉座の横で立哨していた青年が、名を呼ばれて僅かに向きを変える。
「私は別に読唇術に長けている訳ではないのですが・・・。そうですね、ガルドやフィオールの名が出ていたように見受けられましたが。」
「ふん、やはりフィオールはゼフィーニアにも打診をしているか。」
「どうです、陛下。ゼフィーニアを見習ってもう少し真剣に正妃を探されてみては。そろそろ喉の渇きも限界でございましょう。」
「余計だ。だがフィオールの娘は受け入れても良い。異界人には興味がある。」
ルディアはカイルの言葉に意外そうに眼を見開く。
「やはり、フィオールが送り出そうとしている王女というのは、異界人なのでしょうか。」
それまで項垂れたままだった老人は、ナディルのその言葉にはっとして顔を上げる。
「ガルドから異界人を掠め取ったのは間違いなくフィオールですぞ！この爺がしっかりと見届けておりました故！命をかけてもよろしい！」

「爺、そう興奮するな。寿命が縮むぞ。」
白い眉にほとんど隠れている眼を見開いて唾を飛ばす勢いで力説する老人を落ち着かせようと、大広間を囲っていた武官数名が慌てて老人に近づく。
「で、あればやはり王女の正体は異界の者でしょうかね。フィオールにしてみれば爆弾を抱えているようなものでしょう。」
「多大な犠牲を払い禁をやぶってまで呼び出した異界人を横から掻っ攫われたと知らば、短気な皇国は怒り狂うだろうからな。」
「ガルドに知られる前に、大国に条件付きで渡した方が安心と判断してもおかしくはありませんね。ゴルディアもゼフィーニアも、フィオールに侵略する意思はないと明確に宣言しておりますから。もし異界の者が送られてきたならば、信用して頂けているということでしょうかね。」
「さて、本当に異界人が送られてくるかどうか。女王は実子と言い張っているようであるが。」
「どちらにしろ、陛下のお口に合うと良いのですが。」
「ふん、確かに、美味でさえあれば血筋などどうでも良い。」
酷薄な笑みを浮かべながら、カイルはゆったりと席を立つ。
「陛下、どちらへ。」
「リリーを構いに行く。」
あぁ、と会得したようにルディアは頷いた。

上機嫌で大広間の扉をくぐり、廊下を突き進むカイルの歩幅は心なしかいつもより広く、早い。カイルに付き従うルディアは思わず苦笑する。
「随分とあの子猫がお気に召されたようで。未だに陛下には威嚇をしているようですが。」
「なかなか懐かぬところが良いのではないか。」
首筋には昨日無理やりリリーを抱き上げようとして引っかかれたばかりの爪痕がしっかりと残っている。

「野生に還されては如何です。母猫が今頃躍起になって探しているのではと思うと、胸が痛くなりませんか。」
「ならんな。一時でもリリーをさ迷わせた母猫の落ち度であろう。」
廊下の随所で文官や武官、侍従等が手慣れたように道を開け、腰を低く落とす。そんな彼らには一瞥もくれずにカイルは真っ直ぐと自室の隣室を目指す。本来、正妃が入るはずのその部屋は今や、壁紙は引っ掻き傷だらけになり、金糸で花々が描かれた豪華なカーテンは糸がほつれ、高級な家具の数々も噛み傷だらけ、と見るも無残な状態になっている。
「いつかあの部屋に入る妃のために、と部屋を整えていた侍女達が嘆き悲しんでおりますよ。」
ねちねちと嫌味を繰り返すルディアを無視して、件の部屋の扉を思い切り開け放つ。窓のすぐ側にはふさふさとした尻尾を不機嫌そうに揺らしている猫が背中を向けて座っている。こちらの世界の猫は、耳が翼のような形状をしており、長く真っ白なその耳が、ぱたぱたと空を仰いでいる。
「リリー。」
つい先日もらったばかりの名を呼ばれたリリーは振り向くや否や、短い牙をむき出しにする。
「フーッ!!!!!」
「・・・。」
「嫌われておりますねぇ。」
しっぽを真っ直ぐに立て、翼のような耳を目一杯広げて、これでもかと威嚇する。よくよく室内を見回すと、今朝リリーのためにカイル自ら絨毯の上に敷き詰めたクッションの数々が彼女の鬱憤を晴らす対象とされたのか、破れかぶれの状態で真綿が飛び出している。
「リリー。」
気を取り直したカイルは真っ直ぐにリリーに近づいて彼女に触れようとするが、いきり立ったリリーは窓の桟の上にさっと飛びのいて、再びカイルを威嚇する。

「愚かだな、リリー。そこに逃げては後がないだけではないか。」
大真面目な顔で小動物に話しかけるカイルに半ば呆れつつ、ルディアは怯えて威嚇することしか出来ないリリーに同情を寄せる。カイルは無理やりリリーを押さえ込むと、嬉しそうに抱上げて目線を彼女と合わせた。
「フーーーッ！シャアァーーーッ！！！」
「陛下から漏れ出ている覇力に怯えているんですよ。野生の動物は敏感ですからね。」
「よしよし、そう怖からずとも、余はそなたを悪いようにはせぬ。」
穏やかな表情でそう言ってみせて、リリーをそっと抱え直し喉を撫でようとしたが、敵対心をむき出しにしているリリーによりその指をかぷりと噛まれる。
「陛下！？」
「お前が声を荒げるとリリーが怖がる。黙っていろ。」
指を噛まれても気にすることなく、もう片方の手で頭を撫でてやると、リリーは諦めたかのように指から牙を抜き、耳を伏せてただただ耐えるかのように、カイルの膝の上でうずくまる。
「大人しくなったか。」
「陛下、何だか私には哀れに見えるのですが。」
「・・・余はこれよりリリーと共に一眠りする故、一刻程したら迎えに来い。」
ルディアの言葉を無視してそう告げると、カイルは爪跡だらけのフリルたっぷりの天蓋を分け、ベッドへいそいそと潜り込む。リリーはじたじたと最期の悪あがきで、カイルの手に爪を立ててみたりもするが、まだ子猫ということもあり、結局疲れ果てて大人しくなる。
「・・・畏まりました。ガルドはいかがなされますか。」
「しばらくは放っておけ。ゼフィーニアが先に何らかの手を打つだろう。」
「よろしいのですか。」
「構わん。ただやつ等がフィオールに手出しするようであれば余も

動かねばなるまい。」
「承知いたしました。術者に見張らせておきます故。」
ルディアは胸に手を当てて腰を折ると、音をたてないようにそっと部屋の外へ出る。

術者が集まっている司書館に行くべく、皇宮の中を練り歩いていると、皇帝の親衛隊のみが持つことを許される皇剣とも呼ばれる魔剣が鈍く振るえた。気配がする方を顧みると、遠くから帝国ゴルディアに根付く十一貴族の筆頭、レーバルド公の若き当主が悠然と歩いて来ている。ルディアは胸に手を当てると今度は浅く礼をとる。
「やぁ、ルディア・ラード。少佐に昇進したとか。おめでとう。その若さでさすがだね。」
「有難う存じます。陛下はお休みになられております故、私でよろしければ代わりを務めますが。」
「ああ、では陛下に伝言をお願いしたい。」
「畏まりました。それで、どのような。」
「老獅子が、ガルドの餌に興味を示しております、と。」
ルディアは頭に手を当てて短くため息をつく。
「追われて後のない猛獣なんて、そんなものだよ、少佐。」
「追った者の責任も大きいのでは。」
「おや、もちろん、善処すべくそこら中に罠を張り巡らせてはあるよ。ただ長く生きた分、余計な知恵をもった獅子でね。それに、彼らを追い詰めるように僕に命じたのは他でもない君の主のはずなんだけどね。」
「それは承知しております。・・・そうそう、その換わりとして公が提示された条件についても、動きがありそうですよ。」
「僕は魔族との婚姻を陛下にすすめただけで、交換条件にしたつもりではなかったんだけどね。それでどこの姫君かな。まさか猫と婚姻関係を結ぶつもりではあるまいね。」
つい先日飼い始めたばかりの猫の情報まで既に知られている事実に

ルディアは内心舌を巻く。まったくこの公爵は侮れない、と。
「リリー様のことまでご存知でしたか。いえ、フィオールの姫君です。」
「ほう、あのフィオールの魔女がこの吸血族の国に娘を差し出すのか。」
「いろいろ事情があるのでしょうね。・・・残念ですか？公の妹君ではなくて。」
「おや、君はいろいろ僕のことを勘ぐっているみたいだね？僕としては妃が魔族の女性であれば誰でも構わないよ。魔族の流出を防がなければこの国に未来はない。緩やかに滅びの道を歩むだけだ。そのためにまずは、吸血族と魔族は対等にならねばなるまい。差別を無くすための法律を作り、禁じ、罰しても、庶民に根付いた差別意識を取り払うのは君が考えている以上の膨大なエネルギーと時間がかかる。ところが王侯貴族がすすんで魔族を寵愛すれば、それは自然と庶民の間にも広がっていく。法律で罰するよりもずっと早くね・・・。」
「公のそのお考えには私も賛同しておりますよ。さて、老獅子の件は陛下にしかとお伝えいたしましょう。ただ、しばらくは静観なされるおつもりかと。」
「ゼフィーニアが先に動くだろうからね。やれやれ、相変わらず陛下は面倒がお嫌いなようだ。」
「不服でございますか。」
「ガルドに捕らわれている魔族達の、ゼフィーニア崇拝が今から目に浮かぶようだよ。僕としてはゼフィーニアより先に動きたいところだ。」
「一応、それも陛下にお伝えいたします。」
「頼んだよ。」
片手をあげて去っていくレーバルド公の背をしばらく眺めていたが、当初の予定を思い出して再びルディアは司書館へと歩み始める。
「老獅子か・・・。」

皇帝陛下に直接意見することが出来、尚且つ庶民にもそれなりの影響力を持つ貴族院に、ガルドとひそかに手を組むものがいるとすれば。

「獅子身中の虫か。」

自己の利益のために、国を蔑ろにする輩がいる。自分1人ぐらいが利益を優先させたとて、この国が揺らごうはずもない、とでも思っているのだろうか。あらゆる選択は全ての結果に帰着しているのだ。ひとつでも間違えばそこから全て瓦解していくことだって十二分にあり得る。それとも。自分さえ良ければ国家などどうなっても良いとでも言うのだろうか。ルディアは剣の柄を強く握り締めた。

―この剣に誓って守ってみせる。国を、陛下を、臣民を、家族を、友を。

フィオールの姫君がこの国を訪れるのは、それから2か月後のことだった。野生の猫よりも尚激しい気性を持ち、微塵も心を開かない姫君に振り回されようとは、この時のルディアは予想だにしていなかった。

4．別れの時

いつものベッドで目を覚ました怜は、窓辺に寄り添っている愛の方へ近づくと、そっと後ろから抱きしめた。
「眠れなかった？」
「・・・怜ちゃん・・・。」
「泣かないで愛。泣いては駄目よ。吸血族が食欲を感じるのは血だけじゃないって、魔族の体液全てに情欲を抱くって、習ったでしょう？」
「うん、うん、でも、もう会えないかもしれないから。」
「ゼフィーニアから迎えが来たら、もう泣いちゃ駄目よ。」
「うん・・・。」
「大丈夫よ、愛。留学の期間は1年だけ。そこを無事乗り切ることが出切れば、また一緒に暮らせる。もし愛がゼフィーニアに囚われたままでいたら、必ず私が迎えに行く。心配しないで、愛。」
「うん、怜ちゃん、気をつけてね。」
「ええ、大丈夫。私は、大丈夫よ。愛も、しばらくは自分の身は自分で守るのよ。」
「・・・うん。」
力強くお互いを抱きしめる。森の木々のこすれあう音と、鳥の鳴き声だけが室内を満たす。そこに、無機質な扉を叩く音が響く。
「失礼いたします。アイ様、レイ様、そろそろご準備を。」
「わかった。私はドレスは着ない。乗馬用の服を持ってきて。アイは乗馬は苦手だから、普通に馬車に乗って行くといいわ。」
「うん。」

数ヶ月の間にいろいろなことを身に着けた。乗馬もしかり、怜に至っては剣術の手ほどきまでうけた。もともと運動部であったこともあり、体力もあり勘も良い。一方愛は昔から運動が嫌いであった

ため、怜が武術などを学んでいる間は、魔術についてより深く学んだ。この世界での魔術は基本的に魔方陣を必要とする。この世の理をぎっしり詰め込んだ魔方陣を媒介にして、魔力を発動させる。魔方陣なしで行える事と言えば、愛と怜が必死になって身に着けた魔力の防御壁や、軽く風を起こす程度だ。魔術があると知った怜は当然移動も魔方陣の上に乗って瞬時に移動するのだろうと思っていたのだが、侍女はやんわりとそれを否定した。

「お手紙や小物でしたら転移可能ですわ。けれども、人程の高さがあると途中で切れてしまうのが現状です。転移の魔方陣はまだ未完成な状態なのです。レイ様やアイ様がいらしたように、界を渡るのと、転移とは全く別の物ですわ。」

かくして移動は馬や馬車が主流という。予想以上にローテクノロジーな世界に怜は思わずため息をついた程だった。

「でも確か女王は・・・。」

魔方陣もなしに怜と愛をこの国に呼び寄せ、言葉を与えたのではなかったか。

「母様と。陛下は、あのお方は特別なのです。ああいったことは普通の魔族に出来ることではありません。」

どう特別なのかとさらに聞き出そうとしたが、侍女がのらりくらりと怜の質問をかわしたので、結局わからず仕舞いだった。

「アイリフィア様、ゼフィーニアからの使者がご到着なされました。」

「は、はい！」

緊張のあまり、愛の声はどこか上ずっている。

「謁見室にいらしてください。女王陛下と使者の方が既にお話をなされておいでです。」

「はい・・・。」

何度も深呼吸をし、元いた世界では着たこともないような、裾の長いドレスを踏みつけないようにゆっくりと歩く。後ろから怜が付い

て来てくれているのが心強い。
「し、失礼致し・・・ます・・・。」
最後は蚊の消え入りそうな声になったが、それでも愛にしては頑張ったほうだった。顔をあげることは叶わず俯いたまま前にすすむ。
「おお、アイリフィア、来たか。」
それまで女王と面会していた使者十数名が一斉に立ち上がり、愛に向き直って片膝をつく。
「彼等がゼフィーニアの使者故、挨拶をすると良かろう。ゼフィーニアも気を使って、魔族のみの編成にしたようじゃ。これならアイも怖くなかろう？」
「は・・・はい。あの・・・えっと、アイリフィアと申します。どうぞ、お手数をおかけいたしますが、・・・その、よろしくお願いいたします。」
ゼフィーニアの使者団のリーダーと思しき男がさっと顔を上げる。
―王女自らが望んでの、留学ではなさそうだ。

それが愛を見た最初の印象だった。ついで、愛の大きく真っ黒な目に涙が浮かぶのを見て面食らう。吸血族にとって食欲と性欲は表裏一体だ。それ故、魔族の女性であれば、血を流すな、涙を見せるな、と幼少の頃より叩き込まれるものだ。吸血族の食欲と性欲を誘うそれは実に卑猥なもので、人目に見せるのは恥ずかしいことなのだと教えられる。魔族の女性が涙を見せるのは、男を誘う時のみだ、と。愛の涙からは芳醇な魔力の香りが漂う。使者団は表にこそ現さないが内心ではかなり動揺を見せていた。魔族同士であってもやはり強い魔力には惹かれてしまうものなのだ。
「愛、涙！」
怜に後ろから声をかけられ、弾かれたように慌てて愛は涙を服の袖で拭く。けれども恐怖から涙は止まらないようで、堪らず後ろを振り返ると怜に駆け寄った。怜は愛を優しく抱きとめると頭を撫でる。

「それで、そちらの自己紹介は？」
怜の鋭い睨みを受けて、男は慌てて持っていた剣を床に置くと、しっかりと怜の顔を見据える。
―彼女が双子の姉ですか。なるほど、良く似ているが、こちらは気が強そうだ。

「ゼフィーニア第二近衛隊隊長、ルーイガント・ヴィルヒアイスと申します。第二王子メディシス・フォル・ラ・ゼフィーニア殿下の命を受け、アイリフィア様をお迎えに参りました。」
「そう、アイはこの通り泣き虫なのですが、どうぞ、しっかりとお守りくださいね。」
怜から発せられる禍々しいばかりの魔力に圧倒されながら、ルーイガントはしっかりと頷く。
「お任せを。」
その言葉を聴いて脅すように使者団を覆っていた自分の魔力を怜は収束させる。
「愛、大丈夫？さあ、泣き止んで、悪くなさそうな人達だし、きっと大丈夫よ。」
「うん、最後までゴメンね、怜ちゃん。」
「最後じゃないわ。近いうちにまた会いましょう。遅くとも、1年後には。」
「・・・うん。」
王宮の外に出るまで怜の手をしっかりと握り、まるでドナドナの子牛のように、何度も怜の方を振り返りながら、ゼフィーニアの使者団が用意した馬車に愛は乗り込んだ。
「・・・怜ちゃん・・・。」
「愛、しっかり気をもって！」
「・・・うん。」
「それでは、1年間、王女をお預かりいたします。」

「私の妹に何かあったら、その命、無いものと思いなさい。」
低く発せられた怜の言葉に苦笑するどころか、ルーイガントは真っ直ぐに受け止めて深く腰を折る。
「承知いたしました。この身に変えましても、必ずやお守りいたします。」
「行って良い。」
「はっ。」
怜の許可を受けてルーイガントは軽やかに馬に飛び乗り、部下に出発の合図を出す。動き出した馬車の窓から心細そうに顔を除かせている愛に、怜は手を振り続けた。そうして馬車が見えなくなってもしばらくその場から動けなかった。

「レイ様、風が冷とうございますから、どうぞ中へ。」
侍女に声をかけられ、仕方なく怜は一度王宮内に戻る。
「ゴルディアの使者はいつ頃来るの？」
「午後には。」
「そう。」
侍女はちらりと怜の顔を盗み見る。その表情からは何も読み取れない。怜はこの数ヶ月で驚くほどの強さを見せた。魔力の防御壁はそう何日もしない間に、どの侍女でも打ち破れないほど強固になったし、その膨大な魔力を怜は自由に操って見せた。まったく魔力がないように、気配を消すことも出来るようになった時には、驚きで目を見張ったものだ。その強さが仇にならなければいいのだが、と侍女は不安を覚えずにはいられなかった。

日が高くなり昼食も一通り取り終わった頃、ようやくゴルディアの使者団が到着したとの連絡が入った。謁見室へ向かえば使者は六名、ゼフィーニアよりもずっと少数の部隊だった。ゼフィーニアの使者団が貴族のごとく紳士的で穏やかそうであったのに対し、こちらはあらゆる戦場で揉まれてきたような、精悍な顔つきの男達ばかりだ。

ただ1人、女性が混じっており、彼女だけは吸血族のようだった。
怜を見るや否や、彼女はさっと前に出て両膝を付き剣を床に置く。
「レイラディア様とお見受けいたしました。私は帝国ゴルディアが十三部隊隊長、フローディア・ドルツィエと申します。以後どうぞ、お見知りおきを。」
「・・・よろしく。」
二人の視線が絡み合う。警戒心を露にしている怜に対し、フローディアは相好を崩す。
「吸血族は初めてでございましょうが、ご覧の通り同性でございますれば、どうぞお気を楽になさって下さい。ところでそのお格好をなされているということは、馬車ではなく馬で移動なされるご予定でしょうか。」
「そう、馬車には荷をのせる。壊れ物はないから粗雑に扱ってもらって構わない。ゴルディアへ抜ける道は治安が悪いときくから出来るだけ早く抜けたい。」
「畏まりました。仰せの通りに。」
フローディアは内心ほっとしていた。怜の言うとおり、フィオールからゴルディアへ抜けるには、森を突っ切らねばならないが、この森が実にやっかいで、ガルドの領地でもフィオールの領地でも、ましてゴルディアの領地でもない、無法地帯が存在する。山賊が多く出るし、何より今はガルドが怖い。行きは猛スピードで駆け抜けてきたが、帰りは深奥の姫君を連れており、多少の困難は覚悟していたが、その姫君は実に肝が据わっている様子で、しかも帯剣までしている。フローディアはこれまでも様々な国の王女を見てきたが、皆フリルたっぷりの衣服に身を包み扇子を片手に微笑んでいるようなタイプであったため、まさか姫君が乗馬用のパンツ姿で現れるとは予想だにしていなかった。
「では行こう。日が暮れるまでに安全圏まで突っ切る。」
「はっ。」
そのまま出て行こうとする怜にフローディアは慌てて声をかける。

「女王陛下にご挨拶はよろしいのですか？」
言われてようやく怜は振り返り、壇上に座すルディベッラと目を合わせる。
「行って参ります。」
「達者で。」
それは本当に母と子の会話かと思われるほど短い別れの挨拶だった。ルディベッラはまだ穏やかな笑顔を向けて送り出しているが、怜に至っては無表情だ。カイルから何も聞かされていないフローディアは、まさか赤の他人だとは露ほども思わず、何て淡白な母子だと、逆に関心した程だった。

5．ゴルディアへの旅路

　怜の言う荷物とは少量と衣服と、大量の本だった。それらを馬車に乗せる。馬車の中にはお手洗いもついていて、怜は少し覗いてみたが王宮内と同様に、洋式のトイレとほぼ似たような形で底に魔方陣が描かれており、排泄物が瞬時に分解され土になり、同時に指定した場所へ転移する術式になっている。数ヶ月で魔方陣の中に描かれた理を大分理解できるようになってきていた。ただし、そういった方面に関しては愛の方が得意ではあったが。

「レイラディア様、荷は詰め終わりました。」

「そう、有難う。」

怜は馬にひらりと飛び乗ると軽く手綱を引く。この世界の馬は怜が知っているものよりずっと毛深く、鬣がないかわりに一本の角がその額から出ていて、どちらかというとユニコーンに近い。ただ顔は馬そのものであったし、この生き物を馬と認識するのに、抵抗はなかった。

侍女達に送り出されながら、最初は感触を確かめつつゆっくりと進みだす。そうして少しずつ早め、馬車が着いてこれる程度のスピードにまで徐々に上げていく。

「レイラ様、私より前に出ないようになさって下さい。」

「わかった。」

軽く頷いて、少しだけ後ろに下がる。帝国ゴルディアで万が一何かあった場合、１人でここを抜けて逃げ戻らなければならないかもしれない。そのために目印になりそうなものを、しっかりと記憶しながら進む。最初は順調であった旅路もしばらくすると不穏な気配が漂い始める。まず真っ先にそれに気付いたのは、他でもない怜だった。

「スピードを落として。」

囁くような声でフローディアに指示する。

「レイラ様・・・？」
「何か嫌な気配がする・・・。」
怜がそうつぶやいた瞬間、突如地面に描かれた魔法陣が煌いた。怜はとっさに馬を引くがフローディアの馬が僅かに魔方陣に足を踏み入れている。思わず怜はフローディアの詰襟を引っ張った。フローディアは馬から転げ落ちるが、刹那、魔方陣から大きな網が出現し、フローディアの馬が捕らわれる。
「乗って！」
怜はフローディアを力強く引いて、自分の馬に引き上げると、思い切り手綱を引き鞭打った。
「荷は捨てて！」
後ろで馬車を運んでいた男は、素早く荷車から馬を外すと、その馬に飛び移り、怜らと共に疾走する。怜は自身の魔力を目一杯広げ、他に魔方陣が隠されてないか、全力で走りながらも必死で感覚を研ぎ澄ませた。道行く道に罠が張り巡らされていると知るや、さっとわき道に逸れる。魔力の気配を辿られては元も子もないので、打って変わって今度は魔力の気配を完全に消し去り、フローディアを支えながら直走る。
「レイラ様！」
「私は方向はわからない！前に出て！」
「承知！」
後から怜を追っていた数名が何とか怜に追いつき前に出る。
「残りは？」
「数名、剣を交えております。」
怜は舌打ちする。スピードを僅かに落として後ろを振り返るが追っ手が来る気配はない。馬から落ちたフローディアも怪我などないか気にかかる。
「戻る？」
「いえ、手練の者を残してきました。こういった時の合流場は定めております。すぐに追いつきましょう。」

「わかった。ドルツィエさん、大丈夫？」
ようやく心に落ち着きを取り戻し、後ろを確認する。耳から項に沿うように綺麗に切りそろえられたフローディアの栗色の髪には泥や枯葉がついており、怜はそれを軽く取り払った。
「どうぞ、フローディアとお呼び下さい。えぇ、大丈夫です。ご迷惑をおかけしました。ここからあと少しでゴルディア領に入ります。国境を守る結界が張っております故、そこまで辿り着けば大丈夫です。」
「では、急ごう。先導を頼む。」
「はっ。」
怜の額や項から汗が滴る。黒く真っ直ぐ伸びる長い髪を、邪魔にならないように怜は高い位置で結んでいた。白く滑らかな項を認め、フローディアは思わずごくりと喉を鳴らした。同性であっても、ここまで惹かれるのだ。異性であればどうなっていただろう。すぐにでも噛み付きたくなるような芳醇で、どこか背徳的で、淫靡な香りが漂っている。フローディアは意図的に視線をそらした。—毒だった。彼女の体液は、まさに。

息を切らしている怜の様子を考慮しつつ、一団は歩を早める。二時間程休むことなく馬を酷使した結果、ようやく関所に辿り着く。関所と言っても完全に無人で扉や要塞がある訳ではなく、どこまでも透明な結界が続いているだけのものだった。決して模造できない複雑な魔方陣が描かれた通行証に反応して、それを持つ者だけを通すようになっている。国境で待ち伏せされていることを危惧していた怜だったが、これならば何処から国境を越えるのか相手にはわからないだろう、とようやく一息つく。
「レイラ様、これをお持ち下さい。」
「うん。」
渡されたのは、黒曜石のように輝く直方体の石で、美しい模様が刻まれている。シャボン玉のように時々虹色を見せる結界を、何とな

く息を止めて踏み越えてみる。蜘蛛の巣にひっかかるような感触を想像していたが、特に触感などはなく、すっと通り抜けた。
「やれやれ、これでひと段落ですな。」
背の高く顔に傷跡のある大男はそう言って、ひらりと馬から飛び降りると、怜に手を伸ばす。彼女はその手をとって、恐れることなく馬から飛び降りた。
「大切な衣装やご本をお守りすることができず・・・。」
「別に大切じゃないから良い。ここから帝都までどれぐらいかかる？」
「森を抜けるのにあと半日はかかります。既に日が暮れかかっております故、途中に小屋がございますから、一日目はそこで休むつもりでございます。そこから帝都まではさらに3日ほどかかりますが、その間、大小様々な街がございますから、森さえ抜ければ不自由はないかと。」
「はぐれた者達とも、小屋で落ち合うことになっております。少し休んでから、小屋へ向かいましょう。」
「わかった・・・。無事かな。」
「大丈夫でございます。私の部下を信じてください。」
怜はフローディアの目を見て、ゆっくりと頷いた。フローディアを含めて3人が怜を守ってくれている。残り3人の安否が気になったが今の怜に出来ることはないため、フローディア達に従った。馬が限界のようであったので手綱を引いて枯れ草を踏みながら進む。追っ手を振り切るべく道無き道をめちゃくちゃに走ったため、ゴルディアからフィオールへ戻る道を覚えられなかったことが多少悔やまれた。
「レイラ様、ここでございます。」
如何にも小屋、といった風情の小屋に辿り着く。結界を通った時に使った通行証が鍵となっているようで、長方形の穴にそれを差し込むとコトリと音を立てて扉が開いた。

「行きに掃除をして参りましたから、綺麗ですよ。」
フローディアは笑いながらそう告げる。
「有難う。私は埃だらけでも気にしない性質なんだけどね。」
「そのような姫君は珍しいのですよ。」
”姫君”と言われ、あぁそういう設定だったな、と怜はようやく思い出す。
「・・・私は森で育ったから大雑把なんだ。」
「姫様が逞しくてよろしゅうございました。馬車での移動であれば、どうなっていたことか。」
「ぞっとするね。」
僅かに怜が口角を上げた。常に固い表情だった怜が、ほんの僅かでも笑ってくれたことにフローディアはほっとした。暖かい飲み物を沸かし、しばらく歓談しているうちに、扉が開く音が聞こえる。怜は思わず剣に手をかけるが、残りの3人が戻ったのだと気付き、緊張を解いた。
「押し付けてしまって悪かった。」
フローディアの謝罪に、男達はなんの、と笑って答える。何箇所か怪我をしているようだが、それ以上に返り血が凄まじかった。現実離れしたその様子に、自分が普通でない状況にいると怜は改めて認識させられる。
「手当てを。」
怜が思わず立ち上がりそう言うと、男達は笑いながら首を横に振る。
「姫さんにそんなこと、させられませんや。取り敢えず血を落としてきます。」
そう言うや3人共にお風呂に突撃していく。狭い小屋の狭い風呂に3人も入るわけがなく、水をひっかけたり押し退け合ったりと喧嘩をしながら、随分長い時間をかけて身奇麗に整えようとしている部下達の声を、フローディアは呆れた様子で遠くに聞いていた。
「さて、おまたせしましたね。」
濡れた体をタオルで拭い、怪我をした場所に包帯を巻きつけた男達

がようやく席に着く。
「それで、どこの手のものだった。」
フローディアの問いを予想していたのだろう、男達は顔を見合わせて頷きあった。
「普通の山賊ではない、とは言い切れる。」
「ガルド・・・か？」
「だとは思うがね、確証はない。普通の山賊にあんな込み入った魔方陣は組めん、となると一番可能性が高いのはあの国だろう。術者の首をいくつか飛ばしたが、見知った顔はなかった。・・・おっと、姫さんの前でこんな話は駄目か。」
男が慌てて口を塞ごうとしたのを、怜は手で遮る。
「構わない。続けて。目的は私か？」
平然としている怜に安堵して男達は口々に報告する。
「恐らくそうでしょうな。フィオールの魔族はとにかく魔力が強いことで有名ですからなぁ。ガルドはいろんな国から魔族をかっさらっておりましてね、それも国家ぐるみですから性質が悪い。今回もフィオールの結界から魔族が出てくると何処からか聞きつけて攫いにきたのでしょうな。」
「フィオールの結界はそんなに強いの？」
「もちろんですとも！結界の強さはゴルディアも及ばない程強固ですよ。まぁこう言っちゃなんですが小国ですからなぁ、範囲が狭いので強度をつけやすいというのもありますが、何より住み着いている魔族の力が強いですからな、フィオールほど強固な結界はありゃしませんよ。と、いってもゴルディアのように通行証があれば入れる、という種の結界ではなく、魔族であれば入れる、というものらしいですがね。今回隊長は事前に申請しておりましたから、入れてもらえましたが、普段あの国には吸血族はおりませんでしょう。」
「・・・ええ。」
愛は大丈夫だろうか。ゼフィーニアへの道はガルドから離れているから、怜達に比べれば比較的安全と言える。しかし、どうにも嫌な

予感がした。
「レイラ様、大丈夫でございますか？お顔の色が優れないようですが・・・。」
「・・・大丈夫。」
しっかりと頷く怜を見て、フローディアは胸を撫で下ろす。悩んでも仕方がない。今はルーイガント達を信じるしかない。
「ではもう、お休みしましょう。レイラ様も疲れましたでしょう。」
「うん、・・・そうさせてもらおうかな。」
怜だけ一室をもらって、そこに備え付けられた簡素なベッドに潜り込む。体の節々が痛かった。今更になって恐怖が駆け巡った。けれども怜は泣くこともなく、無理やり目を閉じた。興奮状態になっていて、なかなか寝付けなかったが、一度落ちてしまえば、深く深く、泥のような眠りへと引きずり込まれていった。

夜半近く、怜はいきなり覚醒した。大きく心臓が脈打っている。慌てて身体を起こし、神経を研ぎ澄ませる。
―囲まれているな。
殺気に近い、悪意の塊のようなもの。独特の覇力の気配、それが小屋の周りをぐるりと囲っている。相手は押し隠そうとしているのだろうが、敏感な怜には自分でも不思議なぐらい敵の位置まではっきりとわかる。剣をしっかりと握りしめ、音をたてないように部屋から抜け出す。まずはフローディア達を起こさなければならない。
「レイラ様・・・！」
囁くような声で呼ばれ振り返る。流石と言おうか、全員が既に起きていた。腰を低くして臨戦態勢に入っていた。2名が扉の両側に背を預けて、侵入と共に敵を切りつけられるよう、準備している。
「国境の中だからと言って安全とは限らないようだね。」
「お恥ずかしながら・・・。通行証を売り捌いている者もおりまして。取り締まってはいるのですが。」
パスポートの偽造はありえる話だ。しかし今の話から察するに真正

のパスポートの売買が成り立っているようである。発行の手順か、官吏に問題があるのだろう。
「全部で１８人いる。」
「・・・！そこまでわかるのですか。」
「こちらは私を入れても7か。申し訳ないけど剣術には自信がない。2ヶ月程前に少し手ほどを受けた程度だ。」
「しばらく持てば、援軍が到着するはずです。本日襲撃されたことを、恐らく陛下は把握しておりますでしょうから。」
「どうやって？」
「魔鏡でございます。フィオール内は結界が強く不可能ですが、それ意外なら大方覗き見は可能です。ここから一番近くの町の駐屯兵に、派遣を命じて下さっていれば、夜明け前までには到着するはずです。」
「後４時間程、持ち堪えられればいいんだね。」
「はい。」
じりじりと、覇力が近くに迫ってきている。怜は慌ててチョークを探し出し、床に魔方陣を描く。そうしてそっと手を添えると一気に魔力を流し込んだ。瞬間、耳鳴りのようなキンとした音をたてて小屋全体に強力な結界が広がる。同時に、覇力に圧倒されないように魔力を開放し、防御壁を張る。
「姫さん・・・こりゃすげぇ。」
「４時間程度なら・・・大丈夫・・・だと思う・・・。私に話しかけないで。」
怜は目を閉じて魔方陣に注ぎ込む魔力と、防御壁用の魔力を一定に保つよう、全神経を集中させる。フローディア達は剣を力強く握り締め、いざと言う時のために身構え、ただじっと時が過ぎるのを待った。
一体、何時間が経過したのだろうか。もしかしたら、１０分も経っ

ていないのではないだろうか。怜のこめかみから一滴の汗が伝い落ち、唇に辿り着く。塩分を多く含むその味に、僅かに集中が途切れる。

―これ以上は・・・。

怜がそう思った刹那、小屋の外から悲鳴が上がった。

「来たか！」

フローディアはすっと立ち上がる。

「ドルツィエ少尉！」

フローディアの名を呼ぶ声が、遠くに聞こえる。そこで怜の集中は完全に途切れた。ゆっくりと倒れる身体をフローディアが抱きとめる。

「レイラ様！」

「・・・眠い・・・。」

「どうぞ、お眠りくださいませ。後は私達にお任せを。ザッツ！ダルディ！！」

「おう！」

怜の張った結界が壊れた瞬間に男達は小屋から飛び出していく。フローディアは怜を抱えたまま、自分の覇力を爆発的に開放させる。

―何人たりとも、レイラ様に近付けさせはしない！

大きく窓の割れる音が響き、目深にフードを被った男が小屋に転がり込んだ。両手に短剣を構えている。フローディアは怜をゆっくりと床に降ろすや、一気に踏み込み剣を抜き放ちながら相手に切りかかった。相手も吸血族なのだろう、覇力同士がぶつかり火花のような閃光が散る。

「死ねぇえ！！」

幾度も短剣で受け止められながら、逃げ場がないところまで押し込

み、レイラは半歩位置をずらすや、真っ直ぐに相手の喉元に長剣を差し込む。しかしこれも払われた。男は壁を蹴ってくるりと宙を舞いフローディアの後ろを取ろうとする。が、フローディアの反応の方が早かった。相手が着地するよりも早く、身体をぐっと回転させ、両手で構えた剣を思い切り斜めに振り下ろす。

「ぐぁっ！」

血飛沫が舞い、フローディアの顔半分を赤く染め上げる。相手が崩れ落ちる間も無く、留めの一撃を心の臓にざっくりと突き刺し、躊躇いなくそれを引いた。ごとりと、ただの肉塊となったモノが床に転がる。フローディアは剣をさっと振り払い血を飛ばすと、扉に向き直る。

「お見事。」

「外は。」

「片付いた。」

「よし。」

顔に付着した血を袖で乱暴に拭うと、規則正しく呼吸を繰り返す怜を見て、ふと頬を緩める。怜に近づいてそっと抱き上げた。

「あ、その方がフィオールの姫様ですか？」

扉からちょこんと覗いた若い男は、駐屯兵のひとりなのだろうか、見知った顔ではない。

「近づくな！」

フローディアの怒号にびくりと肩を震わせ、目をきょとん、とさせるがそれも一瞬で彼は突如青い目を金色に光らせ、瞳孔は猫のように狭まり、牙からは唾液が滴り落ちた。

「ぐ・・・あ・・・。」

男は食欲に我を失いかけているようで、何とか踏みとどまろうと深い呼吸を繰り返し、肩を大きく揺らして耐えている。

「落とせ！」

フローディアの声に、呆けていた周りの男達が慌てて彼の顎を思い切り殴り上げ気絶させる。

「吸血族の男共はこの方に近づくな！」
フローディア達を守るために何時間も結界を張り続けた怜は、全身が汗だくだった。それがさらに蒸発して、辺り一帯に散っている。
「どうする？」
「取り敢えず、汗は私が拭おう。着替えがないが・・・致し方がないな。」
「馬車、持ってきてくれてるぜ。服も。」
「それで遅かったのか・・・。だが、助かる。」
もともと駐屯兵は、援軍というより無くしたらしい服や馬車を運ぶために派遣されたのだと聞き、フローディアは納得した。怜の身を綺麗に拭った後、渡された衣服を彼女に着せた。その間も怜は穏やかに寝息を立てていて、起きる気配が全くない。出発の準備が一通り整うと、吸血族を遠ざけた状態で馬車に乗り込み、怜の頭を自分の膝の上に乗せて、フローディアは穏やかに微笑んだ。じっと怜を見つめていると、胸の中心が暖かくなるようだった。
―このお方なら、陛下の伴侶になり得るかもしれない。

それから丸一日程してようやく目を覚ました怜は、町の景色が見たいと主張するや、さっさと馬車から降りて馬に跨がろうとする。用意された衣服がドレスだけであったため、フローディア達は必死に止めたのだが、頑として聞かずスカートのまま馬に乗ろうとするので、フローディアは慌てて乗馬用の服を買いに走った。途中で庶民の食べ物にも興味を示し、これは何だ、と訝しがりながらも、躊躇いなく何でも口にする。気さくに誰にでも話しかける変わり者の姫君を、街の人々は喜んで迎え入れた。途中幾度も寄り道をするので帝都に着いたのはフィオールを経ってから7日目の昼のことだった。
「さぁ姫さん、ようやく着きましたぜ。」
「うん、活気が違うね。」
門をくぐったそこに広がる街は、これまでとは比べ物にならない程賑やかで、物量も多ければ、人口も桁違いだった。

「中央に皇宮がございます。少しだけここからでも見えますよ。あの大きく突出た建物です。」
「あぁ、あれか。フィオールの王宮が１００個ぐらい入りそうだね。」
「陛下もきっと首を長くしてお待ちですわ。」
上機嫌にしていた怜であったが、フローディアのその一言を聞いて急に真顔になる。
「念のために言っておくと、私は学びに来たのであって、伽をしに来た訳ではないからね。」
怜の側に付き従っていた男のひとりは思わず口に含んでいたものを噴出しそうになり、また別のある者は呆然と口を開けたまま固まった。怜のあけすけな発言に言葉を無くしたようであったが、フローディアは動揺することもなく、にっこりと微笑んだ。
「もちろん！それは存じております。ただフィオールの方が我が国にいらっしゃるのは大変に珍しいことでございますれば、我が主もフィオールの話を是非に聞いてみたいと楽しみにしておりました故。」
「あ、そう。それならいいの。変なこと言ったわね。ごめん。」
怜は再び辺りをキョロキョロと見回し興味深そうに目を細めた。フローディアは、”学びに来ただけだ”、という怜の言葉が嬉しかった。これまでの王女達のように、あからさまな色目を皇帝陛下に使ったり、血をちらつかせる様なことはしないだろう。フローディアにとって、そうした行為は敬愛してやまない皇帝陛下への侮辱のように感じるのだ。

少しずつ皇宮が近づいてきて、その大きさに圧倒されそうになりながらも、怜は真っ直ぐに巨大な石造りの建物を見据え、内心で自嘲気味に笑った。

―本当に牢獄のようだ。

怜はこの後待っている皇帝との対面が思うと若干憂鬱になった。留学とは名ばかりで餌として送り出されたことは明白だった。

―絶対に負けない。

決心を新たに、迫り来る皇宮への第一歩を怜は踏み出すのだった。

6．ゼフィーニアへの道程

馬車の窓から、怜がどんどんと小さくなっていくのを眺めて、思わず愛は目に涙を浮かべた。王宮が見えなくなる頃には、堪え切れず溢れた涙がぽろぽろと零れ落ちる。そうして緑の木々以外に何も見えなくなるとようやく、ため息をつきながら顔を前に向けた。その時突如、何処かからガタガタッと小さな物音がして、愛は悲鳴をあげそうになったが何とか飲み込んだ。

「ふぅ。」

馬車の奥に備え付けられていた扉が思い切り開け放たれる。

「きゃっ。」

今度は我慢できずに小さな声をあげてしまう。

「あらっ？あららら？もしかして姫様？やだ、私ったら、もしかして、もう馬車動き始めてます？あちゃー。」

扉から出てきたのは銀色の髪をざくっと編み込んでお団子にしている、愛らしい少女だった。ふりふりのエプロンを身に着けており、どうやら侍女のようだ。彼女はあわあわと窓の外と愛の顔を何度も見比べて挙動不審になっている。

「あの・・・？」

「ひゃーごめんなさい、私、ルルといいます。姫様の身の回りのお世話をさせて頂きますのでよろしくお願いいたします。同じ魔族なので怖がらないで下さいましー。」

ルルはそう言って深々と頭を下げる。

「あ、あとその扉の向こうはお手洗いでございますー。どうぞどうぞ。」

気を取り直したのかニコニコと笑いながらそう告げるルルに、愛は思わずくすくすと笑う。先ほどまでの悲しみが少し薄れた気がした。

「有難うございます、ルルさん。私は・・・えっと、アイリフィアと申します。」

「まぁ！ルルとお呼び下さい、アイリ様！！！」
これまではアイ、と呼ばれていたのでアイリと呼ばれるとどこか変な感じだった。”アイリフィア”と自己紹介することにも、”様”をつけられて呼ばれることにも、未だに慣れることはない。本当は王女なんかじゃない、と叫びたいぐらいだった。ルディベッラ女王とは一滴の血も繋がっていない上、異界人なのだと。でももしそう言ったなら、この可愛らしい少女を悲しませるのだろうか、それとも不気味がられてしまうだろうか。そう考えて、また気持ちが沈みそうになる。
―怜ちゃんがいてくれたら・・・。
ついそんなことを思ってしまい慌てて首を横にふる。自立しなければ。いつまでも甘えていてはいけないのだから。
「アイリ様・・・？」
「あ、ごめんなさい、何でもないの。有難う、ルル。」
ルルと呼ばれて、少女は満面の笑みを浮かべた。その笑みを見て愛もつられて微笑む。
「わっ！アイリ様は笑った顔がかわゆいですねー。ルルそのお顔大好きですー。」
「そ、そう？ルルが側にいてくれたら、ずっと笑っていられる気がするわ。」
再びお互い微笑み合う。心地よい馬車の揺れも相まって、愛の心は少し穏やかさを取り戻した。
「ゼフィーニアへはそんなに遠くないです。半日もすれば国境までつきますよー。そこから2～3時間ほどで森を抜けることが出来ます。出来れば明るい内に一番近くの街まで辿りつきたいところですー。城下町まではそこからさらに4日ぐらいですかねぇ。」
「え・・・、それでは、昨晩は夜通し森の中を走り続けていらしたのでしょうか？」
朝早くに迎えにきた騎士達を思い出し、愛は思わず窓の外を眺めた。
「ルルは馬車の中でぐっすりでしたけど、ルーイ様達は走りっぱで

したねぇ。大丈夫ですよー何日間も不眠不休で働く事だってザラですー。メディシス様は厳しいお方みたいですからねぇー。」
どこまでも続く木々と緑。出発した時から景色はずっと変わらない。視線を再び戻し、ルルの仕事についてや、ゼフィーニアについて、あれやこれやと聞き出し、情報収集を図る。新しい国で生き抜くために、本来であれば出発前に調べておくべきことだったのだが、他に覚えなければならないことが山程あり、時間が足りなかった。

数時間程、馬車に揺られながらルルと歓談をしていたが、突如悪寒が走ると同時に全身が総毛立った。驚いて愛は一拍呼吸を止める。
「何・・・これは・・・何・・・？」
身体を抱えて蹲る。
「アイリ様・・・？」
ルルは一瞬呆けたが、何かに気付いたかのように顔をあげた。そうして慌てて積荷のひとつを乱暴に開ける。
「ルル・・・？」
ルルは箱の中を引っ掻き回してドレスを掴むと侍女服の上からそれを乱暴に着る。そうしてローブを頭から被って髪と顔を隠した。
「・・・ルル？何を・・・？」
「アイリ様はここでお待ちを。」
ルルはそういうや走っている馬車の扉をそっと開ける。
「ルル・・・？何処に行くの。」
愛の問いには答えず、ルルは扉を閉めてしまう。愛は今ひとりにして欲しくなかった。嫌な感じがする。しかし、それが何かまではわからない。不安が愛を支配した。
ルルは馬車から出ると、一番近くにいた騎士の馬に飛び乗った。
「ア、アイリフィア様？！」

「馬鹿。そんなわけあるか。」
「その声、・・・まさかザークロスト殿ですか。何をされているのです？」
「ちょっと酔狂な主様から命を受けたんだね。で、前に出て。」
「は？」
「ルーイのとこ。」
「わ、わかりました。」
言われるがままに先頭を走るルーイガントの横につける。
「隊長、あの、ザークロスト殿が。」
近づいてくる部下とルルを、ルーイガントは表情を固くしたまま、
瞥見する。
「シャルル・・・いたのか。」
「ちょっと、本名で呼ばないでよ。僕が男だってばれるじゃん。」
ドレス姿の彼を見て、ルーイガントは少し表情を緩めた。
「素敵なドレスだね。よし、二手にわかれよう。私は君達と共に行く。でなければ怪しまれる。」
「何だ、気付いてたんだ。」
「あぁ・・・君は馬車に隠れていたのか？姫君の様子は。」
「怯えているよ。何が起こっているのか分からない様だったけれど。・・・追われているね。」
「うん、まだ何処の手のものかはわからないが・・・。レイン！」
「はっ。」
「隊を二つに分ける。馬車を頼む。」
「畏まりました。」
レインと呼ばれた青年は後ろに下がりつつ、隊員に詳細を指示する。
そうして馬車に近づくと馬を捨てて馬車に飛びうつった。それが合図となって隊がまっ二つに分かれる。それぞれが道から外れ、左右に分かれて走る。
「きゃぁっ！」
悲鳴を聞いてレインは慌てて馬車の中に滑り込む。

「アイリフィア様。」
小声で名を呼び愛に近づく。呆然としながら顔を上げた彼女の目から、大粒の涙が止め処なく零れ落ちる。舗装されていない道に突っ込んだ馬車は大きく揺れる。レインは後方へ倒れそうになった愛の腕を掴むと自分のほうへ引き寄せた。愛の頬に手を添えて、優しく涙を拭う。
「どうぞ、泣かないで下さい。魔力の気配を悟られてしまう。」
言われて慌てて愛は涙を拭う。そうして口元を指先で抑えて、こみ上げてくる嗚咽を必死で耐える。
「歯を食いしばって下さい。舌を噛んでしまう。」
何度もこくこくと頷く。廻された力強い腕に寄り添い、周りの様子を必死で探る。けれども恐怖で、集中できない。大きな石に車輪が何度も乗り上げ、その度馬車が大きく揺れる。倒れていないのが不思議な程だ。愛は揺れる度にレインの服を掴んで体勢を保ちながら、ちりめんのような布で自分で作った手提げを開くと中からハンカチを取り出す。何週間もかけて、結界の魔法陣を縫い込んだものだ。
怜に、と思って作っていたが、”それは愛に持っていて欲しい”と受け取ってもらえなかった。この世界に書く物はチョークしかない。それでは布に書いてもすぐ薄れてしまう。固い石などに彫っても、少し傷がついただけで、魔方陣としての役割は果たさなくなる。それで結局、愛は布に刺繍をすることにしたのだ。愛はハンカチを握り締めた。自分の身は自分で守ると、怜と約束したのだ。
馬車はさらにスピードを上げる。屋根にぞっとするような気配が降り立った。
「くっ！」
レインは片手でしっかりと愛を抱き込みながら、剣を抜き構える。馬車の外で剣と剣のぶつかり合う音が響く。騎士達が、馬車を守るために戦ってくれているようだった。突如、馬車後方の扉が大きく開かれ、茶色のフードを被った男が踊りかかった。レインは咄嗟に

愛を背に庇い、何とか男の短剣を防ぐ。狭い馬車の中では、レインの長剣は不利だった。おまけに愛を庇いながら戦わなければならない。愛はレインと自分のまわりに結界を張ろうと震える手でハンカチに魔力を注ごうとする。けれども手は振るえ、意識は混濁し、うまく魔力を扱えない。防戦一方のレインは、両の手のナイフで休む間もなく繰り出される相手方の攻撃をかわしきれず、既に顔や肩にいくつかの傷を負っている。追い詰められたレインは長剣を投げ捨てると、相手の左手を乱暴に掴み、そのままねじ上げる。しかし逆にその動きに合わせて敵は一旦受身を取ると、体勢を変えて、抑えられていないもう片方に握られたナイフを使い、下から伸び上がるように一気にレインの懐に詰めると、彼の左肩をざっくりと突き刺した。

「きゃぁっ！」

ナイフが抜かれると同時に、血が馬車内に飛散する。さらに敵が大きく振りかぶりとどめを刺そうとしているのを見て、愛は思わず倒れこむレインを後ろから守るように抱きすくめた。

「アイリフィア様！」

レインの顔が青褪めたその瞬間、愛が握り締めていたハンカチの魔方陣が白く閃き、小さな結界が生まれたかと思うと、それが瞬間的に大きく広がり、敵を馬車の外に弾き飛ばしながら馬車全体を覆った。レインは大きく目を見開きながら、自分をしっかりと抱き締めながらも、小刻みに震えている愛を仰ぎ見る。俯いたままのその表情は、長く滑らかな黒髪の影になって見えなかった。レインの頭を守る柔らかい乳房の感触は実に暖かい。馬車は緩やかに速度を落とし、やがて静止した。森のざわめきだけがこだまする。どうやら外もひと段落ついたようだ。

「アイリフィア様、私は大丈夫です。お助け頂きまして、有難うございました。」

優しく話しかけてみるが、聴こえていないのか、震えたまま動こうとしない。レインはそっと彼女の腕を外すと、愛と同じように膝立

ちになって、彼女の頬を撫でながら上向かせる。愛はレインの優しい目を見て、嵐は去ったのだと知り、再び大粒の涙をぽたり、と一滴こぼす。レインはそれを指先でそっと拭う。
「もう、大丈夫ですよ。どうぞ、泣かないで下さい。」
ささやくようにそう言う。愛はぽってりとした愛らしい唇を震わせながら何かを喋ろうとするが、上手く声にならない。
「け、怪我、を・・・。」
「これぐらいかすり傷ですよ。」
笑ってそういう彼の顔色は決して良くはない。レインの服は赤くその血に染まっている。

「レイン、大丈夫か?!」
外で戦っていた騎士が、馬車の中を覗き込む。
「少し切られたが、問題ない。それよりも急ごう。追っ手がこれだけとは限らない。」
「あぁ・・・。ほとんどが隊長の方を追ったようだけれど、途中で引き返してきてもおかしくない。・・・しかし手当てを。」
「自分で出来る。」
「わかった。」
扉がパタリと閉まり、程なくして馬車が再び動きだす。
「て、手当て、を・・・。」
愛は手提げ袋を探し出すと、もう一枚のハンカチを取り出した。血で汚れると魔方陣としては機能しなくなってしまうので、彼の肩に触れないように近付けて、何とか魔力を注ぎ込む。熱を持って激しく痛んでいた傷口が、じんわりと温もりを帯びて、やがて痛みそのものがなくなった。レインはその様子を呆然と見ている。
「驚きました、治癒をこんな完璧に行えるなんて。」
レインの言葉に愛は不思議そうに首を傾ける。
「基礎として、教わったのですけれど・・・。」
「基礎?!」

レインは”そうですか”と呟くように答えると、何かを考えた風に固まって動かなくなる。愛はその間にレインの傷をひとつひとつ確認しては、治していく。そうしている間に再び馬車が停車した。
「レイン、国境を越えた。このまま町へ急ぐ。」
扉を開くやそう宣言する騎士の声を聞いて、愛は大きく目を見開いた。
「待って下さい、ルルが・・・・！」
「ルル・・・？」
一瞬疑問に思ったものの、すぐにシャルルのことだと気付き、その騎士は”大丈夫ですよ”と微笑みながら答える。
「彼女はとても強いのです。どうぞ、ご心配なく。」
「でも、でも・・・・！」
「大丈夫です。隊長も付いておられますから。」
力強くそう言われてしまっては何も言い返すことが出来ず、愛は思わず俯いてしまう。
「あ、あの、お怪我をなさっている方はいらっしゃいますでしょうか？」
「いえ、皆、応急処置は出来ております故、どうぞご安心を。」
「あの、でも。」
しどろもどろと、言葉を捜し、結局見つからず俯いてしまう愛の気持ちを察して、レインは頬を緩めた。
「アイリフィア様は治癒魔術がお得意であらせられる。私の傷も完全にふさがった。深手を追っている者がいるならば、お言葉甘えて診て頂こう。」
”治癒魔術”と聞いて、その騎士は驚いた様子だったが、すぐに表情を消して静かに頷いた。
「シリウスという者が後ろを取られて背を切り裂かれております。お願いできますでしょうか。」
愛はこっくりと頷いた。
「では私はシリウスと変わって、外を護衛致します。姫君を独り占

めしていると、皆に妬まれてしまいますからね。」
軽口を叩きながら出て行くレインと入れ替わって、シリウスと言う名の少年が馬車に乗り込んだ。愛より少し年上なぐらいだろうか、”自分のせいで危険な目に合わせてしまった”、と愛は申し訳なさでいっぱいになる。彼はどこかうろたえた様子で愛の近くに跪くと、彼女の手をとり甲に口づけする。
「シリウス・ルートと申します。あの、そんなに対した傷ではありませんし、お見苦しいかと思いますので。」
どうやら断ろうとしているようだと気付き、愛は必死で頭をふった。
「私は、これぐらいしか、して差し上げることが出来ないのです。お守りしてくださっている方々に、返せるものが何もなくて・・・。あの、後ろを向いて頂けますか。」
愛の言葉に途惑いながらも、シリウスは背を向ける。愛は息を飲んだ。右肩から左わき腹にかけてざっくりと切られている。
「・・・ごめんなさい。」
震える声で謝った。そうして繰り返し何度も何度も謝りながら、愛はハンカチの魔方陣で魔力を通していく。涙が零れ落ちそうになる度に唇をかみ締めて耐えた。全ての痛みが消えても、尚、後ろから魔力の暖かい気配が消えない。
「アイリフィア様、もう大丈夫でございますので。」
振り返ると、目一杯に涙をためた愛が自信なさそうな様子でシリウスを見上げ、そうしてもう一度”ごめんなさい”と呟いた。
「何故謝られるのです。こうして傷を癒してくださったことに、感謝しております。」
「わ、私が、弱いから、お怪我を・・・。」
「いいえ、私が油断していただけです。敵の人数も少数でしたし、何よりどうやら実践慣れしていない者達でした。自分が不甲斐ないだけですので、どうぞ、お心を痛めないで下さい。」
それでも愛は本当に申し訳なさそうに俯いたままだ。シリウスの戸惑いはいっそう深まる。シリウスにしてみれば、王女が戦えないの

は当然で、それを申し訳なく思う気持ちがよくわからなかった。
―メディシス様や隊長なら、上手くお慰め出来るのだろうが・・・。
シリウスはまだそんなに女性慣れしていない。どうしようかと視線をさ迷わせて、ふと窓の外を見る。
「ああ、アイリフィア様、街が見えてきました。ラビリアの街、と呼ばれる程、ラビリアが咲き乱れる美しい街です。」
愛はつられて外を見る。大きな門をくぐった途端、藤のように枝垂れた紫の花が、風に気持ちよさそうに揺られている。
「綺麗・・・。」
ぽつりと呟かれた言葉にシリウスは胸を撫で下ろした。
「花言葉は”深い美しさ”。それから、”強さ”だそうです。あとで一房、頂いて参りましょう。ラビリアは枝を手折っても、何ヶ月と花が咲いたままでいるほど強い樹木です。」
愛は窓にへばりついて、外を見つめる。家々から人々が出てきて手を振っている。石畳の道に、赤い屋根の家。まるで御伽噺の街のようだった。尾が身体よりもずっと長い白い鳥が、ラビリアの花を啄ばんでいる。
「・・・綺麗・・・。」
「お気に召されてよろしゅうございました。宿に向かっておりますので、そこでお休みになってください。魔力を随分消費されておりますので、眠ったほうがよろしいかと。」
睡眠によって魔力は再生しやすいからか、魔力を消費すると確かに眠たくなる。意識すると急に眠たくなってきた。
「でも、ルルが・・・。」
「大丈夫でございますよ、アイリフィア様がお目覚めになる頃には、きっと我々に追いつきます。」
愛の目はとろりととろけ、気を抜くと眠ってしまいそうだった。
「本・・・当・・・？」
「えぇ・・・ですから、お眠り下さい。」
シリウスの柔らかい声を最後に、馬車の揺れに身を委ねながら、ア

イリフィアは夢の世界へと静かに落ちていった。

遠くで、ルルの声が聞こえる。
「うーーん、かわぅいー。」
「シャルル、それ以上姫君に近づくな。」
「その名前で呼ばないでってば！僕一緒に寝ちゃお。」
「シャルル！」
「同性だからいいんだもん。」
「何を言っているんだ、君は・・・」
「う・・・ん・・・？」
誰かに抱きしめられるような感触に、愛の意識は少しずつ浮上する。
「あら、アイリ様起きちゃいそうですー。せっかくルル一緒に眠ろうかとー！」
「何だ、そのキャラクターは・・・。」
「ル・・・ル・・・？」
「はぁい。」
ルルの声に愛は完全に覚醒した。がばりと起き上がり、ルルの顔を見るなり、ぼろぼろと涙を溢しながら抱きついた。
「ルル！！！」
しっかりと愛を受け止めながらシャルルはルーイガントをちらりと見、ニタッと笑う。ルーイガントは口元を引きつらせた。
「アイリ様、ルルは大丈夫ですよー。あんな弱弱なやつら、ルルにしてみればミジンコ同然ですっ。」
「本当？どこも怪我してない？あぁ、ごめんなさい、ルル、私のせいで危険な目に・・・！」
身体を起こしてシャルルを覗き込む愛は、どうやらシャルルを未だ女の子だと認識している様だった。シャルルの目がキラリと光る。
「・・ルルは、ルルは・・・、――アイリ様と離れている間、めちゃんこ寂しかったですぅー！」

シャルルはそう言いながら、愛の胸にわっと泣きついた。
「なっ？！」
側で見守っていたルーイガントは流石に止めに入ろうとするが、胸元からシャルルに鋭く睨みつけられ、僅かに怯む。
「私も、ルルがいなくて、とても寂しかったわ。」
ルルの元気そうな様子に愛はほっとした様子で、胸元で嘘泣きをしているシャルルの頭を優しく撫でる。シャルルはごろにゃんと猫のようにしばらく撫でてもらいつつ、ふわふわとしている胸の感触をしっかりと楽しむ。そうしてこれ見よがしに呆然としているシリウスやレインにも勝ち誇ってみせる。ルーイガントは今後の旅路を憂い、少しでも早く王宮に着くように、予定を切り替えざるを得なかった。王宮につく前に、シャルルが王女に何かしないとも限らない。シャルルはそれだけ何を考えているのかわからないタイプだった。

本来であれば4日はかかる道程を、かなりの無理をして1日縮めた。王宮についた頃には深夜で、愛は、馬車の中でシャルルと寄り添いながら眠っていた。ルーイガントが馬車の扉を開けると、シャルルはふふふ、と意味深に笑って愛の頬に口付けを落とす。
「っ・・・！」
なんて不敬なことを、と怒りたい気持ちをルーイガントは飲み込んだ。休むことなく馬車に揺られ続け疲れ果てた愛を起こすのは忍びない。シャルルは愛を軽々と抱き上げると馬車から悠然と降り、起きて待っていた侍女に案内されるがままに愛を事前に用意されていた部屋へ運び入れた。そうして翌朝の朝議で襲撃の件を含めて報告するため、各々、王宮内の宿舎に泊まったのだった。

1．対面

穏やかに微笑みあう合う男女や、空から舞い降りる天使達が彫られている扉を、シャルルは呆れた様子で見つめた。王宮内に数ある扉の中でも、この扉だけが異質だ。彼はうんざりしながらその扉を叩いた。

「どうぞ～。」

間延びした声を聞いて扉をくぐると、爪をせっせと研いでいる男が長椅子の上で優雅に寝そべっている。

「や～シャルル、今日も女装が良く似合うねぇ。」

そう言う彼も、高い位置で括られた淡い金色の髪を今日は細かく波打たせて、さらに全体に真珠を通している。彼が少し動くたびに髪の至る所に付けられた真珠がきらきらと輝いた。

「そう？オルフェ殿下は今日も奇抜ですねー。」

「そこいらの女より美しかろう？」

妖艶に微笑みながらオルフェは身体を起こす。

「それで、どうだった？」

「やはり襲撃を受けましたね。何処の者かまではわかりませんでしたけど。数はいましたが、そんなに強くはなかった印象ですかね。」

「吸血族だった？」

「えぇ、見事に全員、そうでしたよ。」

「ふむ。」

―となると、やはりガルドの手のものかな。

オルフェはつい楽しくなってくすくすと笑ってしまう。

「何か楽しそうですねぇ。何で襲撃されるとわかったんです？」

「・・・勘さ。フィオールの姫君は、ガルドの探し物なんじゃないかなーって。」

「・・・探し物？」
「まぁハルトに会わせればわかるだろう。確か今夜は夜会が開かれるのだったかな。で、姫君はどうだった？」
「胸の感触ならふかふかでしたよ。」
オルフェは思わず噴出して、再び長椅子に寝そべりながら、けたけたと笑い転げる。
「やるねぇ！君のそういうとこ好きだよ！」
「そりゃぁよーございました。もう少し侍女でいてもいいですかね？」
「おや、気に入ったみたいだね。いいよ、好きにおし。」
シャルルはスカートを掴むと両足の膝を曲げて侍女の礼を取る。そうして優雅に踵を返し、そのまま愛の部屋へと向かった。
「さて、俺は久しぶりに評議会へ参加するとしようかな？」
オルフェはゆっくりと起き上がると、大きく伸びをする。いつも昼過ぎまで寝ている彼が、こんなにも朝早くから起きている事は実に珍しい。

―いいねぇガルド。楽しませてくれそうだ・・・。

オルフェは上機嫌で立ち上がり、金色の髪を靡かせながら会議室へと向かった。

評議会に呼ばれたルーイガント達は、国王に直接、襲撃の件について報告した。参加している王族や術者達は魔鏡を通して大体のことを既に把握している様子であったため、簡略して説明する。王は彼らの話を聞き終えると、ただゆっくりと頷いた。
「ご苦労であった。卿らがわざと逃した者達については、術者に魔鏡で追わせたが、途中で強力な結界に阻まれ見失った。・・・敵の内部には、それなりの術者がいるようだ。」

王は深いため息を付く。
「フィオールのもう1人の王女も同じく襲撃されたようです。」
若い術者がそう告げると、メディシスは僅かに眉を寄せる。
「無事なのか。」
「はい、王女自らが結界を張り、ゴルディアの護衛をお守りしている様子でした。」
「王女が？」
「はい、ゴルディアは護衛の数を絞っておりまして、一方、敵は相当な数をそろえている用でした。数の暴力の前に成す術もない護衛団を、援軍が来るまでの間、王女がお守りしておりました。」
「騎士が姫君に守られるとは・・・何と情けない。」
メディシスは呆れたようにそう呟く。彼にしてみれば、騎士が姫君に守ってもらうなど言語道断だった。同じく愛に守られたレインはその言葉に思わず視線を落とす。叱責を覚悟したが、メディシスの視線は術者に向けられたままだった。どうやら知らないらしい。バレたら後が怖いが、わざわざ自分から告げる必要もあるまい、とレインは硬く口を閉ざす。
「件の姉君にもお会いいたしましたが、帯剣しておられまして、恐らく最初から戦う覚悟がおありだったのではないかと。」
ルーイガントは気の強そうな怜に、命をかけて愛を守ると約束したことを思い出し、笑みを零す。
「ほう？変わった姫君だな。それで妹の方はどういった娘だ。」
強い魔族が産まれると有名なフィオールの王女に、王は強い関心を寄せる。
「は、それが姉君とは真逆で大人しく、どちらかというと気弱なお方です。・・・それから、どうやら涙もろいようでして・・・。」
ルーイガントの言葉に、その場にいた数名が眉根を寄せる。
「フィオールには吸血族はおりませんし、王宮に至っては、通常は男子禁制だそうです。そのため、泣いてはいけないという教育を受けていないのではないかと・・・。」

「なるほど・・・。」
王は感心したように何度か頷いた。
「国が違えば文化も異なる。特にフィオールは異色であるが故、常識の違いは多々あろう。皆々、己の常識を諸外国の留学生に押し付けることがないよう、心せよ。・・・だがしかし、この国において泣くという行為は非常に危険であることは知っておいてもらわねばならんな。」
王の言葉に、眉根を寄せていた者達は慌ててその表情を取り繕う。ルーイガントは理解ある王を敬しつつ、しっかりと頷いた。
「それについては、既にご説明申し上げました。」
「うむ。・・・此度のことについては、調査に時間がかかろう。・・・ふむ・・・フェルデスは余の補佐で手一杯であろうし、メディシスには留学生らのことを一任している故、やはり時間が取れずにおろうな・・・。よし、ラウル。」
「は。」
「一任する。」
「承りました。」
「うむ。では、今日はここまでとする。」
閉会の宣言を受け、一同重苦しい雰囲気を纏いながら退室する。その様子をオルフェだけはどこか楽しそうに眺めていた。

目を覚ますと、そこは知らない部屋だった。愛は辺りを見回してその事に気付くと、慌てて窓辺に寄り、外の景色を確認する。広大な庭の先には、どこまでも続く街が見渡せた。どうやら既に王宮に到着しているらしい。ふと服をみると、昨日着ていた服のままだった。お風呂に入り着替えたい、そう思った矢先、扉が軽快に叩かれる。
「アイリ様〜。ルルですー。起きてますか？入っても良いですかぁ〜？」

「ど、どうぞ！」
愛は慌てて目をこすり、髪を手で梳かしながら答える。シャルルは愛の返事を受けて遠慮なく扉を開くと、連れてきた侍女達に手際よく指示を出す。
「お早うございます～。ささ、アイリ様お風呂に入りましょう！その間にルル達は朝ごはんの準備をしますデス！」
ルルの言葉に愛はにっこりと微笑み頷く。そうして侍女達を一度見回した後、膝を折って丁寧に礼をする。
「朝早くから、有難うございます。」
侍女達は一瞬挙動を止め、各々顔を見合わせた後、途惑いながらも礼を返した。

本当のところシャルルはお風呂にも付いて行きたくて仕方がなかったのだが、周りの侍女達はシャルルが男であることを知っている。どこかから噂が洩れてフェミニストと名高いメディシスの耳にでも入ろうものなら首を跳ね飛ばされかねないので断念した。愛をお風呂まで案内した後は侍女達に朝食を並べさせ、ちゃっかり自分の分も用意させる。
「あの、シャルル様・・・・。」
「ルル！」
「ル、ルル様・・・。ルル様も一緒にお食事なさるのですか。」
「うん、そうだよ。君達も一緒する？」
「い、いえ、私達は単なる侍女ですので・・・・。」
「僕もだよ。」
シャルルはぺろりと前菜を摘み食いしながらしれっとそう言う。足をぶらぶらと揺らしながら愛を待ちぼうけること約４０分、ようやく愛が部屋へ戻ってきた。ゼフィーニア王族が良く身に着ける、古代ギリシャで着られていたキトンのような服を身に着けている。真っ赤な生地に愛の白い肌や黒い髪がよく映えている。
「わぁー！ゼフィーニアの王族の服が良く似合いますねぇ！」

シャルルの言葉に、愛は目をぱちくりとさせる。
「お、王族の服なの？侍女の方が持ってきてくださって・・・。」
後ろに控えていた侍女を不安げに見ると、彼女はこくりと頷く。
「はい、メディシス様よりの贈り物でございます。他国の全ての王女様方に、色や刺繍の違うものをお贈りされているようでございます。」
大きな一枚の布を真ん中で半分に折り、山折された部分を上にして左脇下から布を回し、右肩の上部で結ぶなりブローチで止めるなりして固定する。同様にもう一枚の布を今度は右脇下から通して左肩上部で固定し、最後に固く編み込まれた帯を締める。愛が締めている帯は金糸で蔦模様が描かれていた。よくよく見てみると赤い布の裾も帯と同じ固めの生地で縁取られている。王族の服と聞いて気後れしたが、他国の留学生達も同じようにこの衣装を身に着けているのだと聞いて安心する。侍女に進められるがままに愛は着席し、食事をはじめる。侍女達はシャルルが同席していることに、どうやら何の疑問も感じていないらしいフィオールの王女を不思議そうな目で見つめながら、お茶やパンを給仕する。
「そうだったのですか。えぇっと、メディシス様という方は第二王子様でいらっしゃいましたでしょうか。どのようなお方なのでしょう。後でお礼を言わなければ。」
愛の言葉にシャルルは思わず身を乗り出した。
「あらら？！アイリ様は我が王国の華たる王子達の詳細をご存知ないのですね？！ではでは、ここでルルがさらっと解説しちゃいます！」
シャルルは愛がパンを口にするのを見てから自分もサラダへと手を伸ばす。そうして頬張りながら、くぐもった声で説明する。
「まず第一王子がフェルデス様とおっしゃって、今のところ覇力が一番強いということで王太子様でございます。うーん、そうですねぇー。特徴としては何かちょっと冷たそうで寡黙な感じですかねー。ルルはフェルデス様が笑っているとことか見たことがないですー。」

「・・・そう。気難しいお方なの・・・？」
愛が不安そうに聞くと、シャルルはぷるぷると首を横に振る。
「いえいえ、気難しいというか、淡々としている感じ？全部をありのままに受け止めていて、何事にも動じない的な。」
「そう・・・きっと大人で強いお方なのね。」
愛はほっと胸を撫で下ろす。侍女から今日は夜会があることと、そこで王子達と顔合わせをするという話を聞いていたので、少々怖かったのだ。
「そうですねー。で、第二王子様はメディシス様です。とーにーかーくー見目麗しいお方です！！女性の人気第一位！！！」
「えっと・・・お迎えにいらしてくださったヴィル・・ヴィルヒ・・・？」
「ヴィルヒアイス隊長様でございますよ、アイリ様！でもルーイとかでいいかと。」
笑いながら隊長の愛称をさらりと口にするルルに愛は思わず目を瞬いたが、気を取り直して情報の収集を再開する。
「ヴィルヒアイス様はメディシス様の近衛隊だったかしら？」
「そうでございますー。もともと各国から留学生を集う、という案を思いつかれたのがメディシス様でしたので、メディシス様の部下の方々が総出で各国にお迎えに行ったようですねぇ。」
「そうなの。・・・大変そうね。」
行く先々で、自分の時のように襲撃を受けたのだろうか、と愛はまだ会ったこともない他国の留学生達の身を案じる。
「メディシス様はどこまでもフェミニストで紳士で、部下にもそれを求められるタイプなんですよ。悪く言えば美意識の押し付け、ですかねぇ。規律が一番厳しい隊でもあるそうですよぅ。女性に優しい反面、男性にはめちゃんこ厳しいそうです～。女性を口説いちゃダメとかもあるみたいなんですよぅ。がっつくのは美しくないとかっ。そりゃぁメディシス様は口説かなくても女性がワサワサ集まってきますよ？でも世の中そんな男ばっかじゃないじゃないですかぁ。

もてない男はつらいですぅー。・・・という訳だからか何だかはわからないですが、メディシス様の部下の半数以上が異動を願い出て、他の隊に移っていってしまうようです。結果、見目麗しく貴族的な男だけがあの隊に残るのですよ。・・・そうすると・・・。」
拳を握り締めて言葉を溜めるシャルルを、愛は食事の手を休めて凝視する。
「・・・そうすると？」
「メディシス様だけでなくメディシス様の近衛隊まで大人気に！！！」
「あぁ、なるほど・・・。」
愛は堪えきれず声をたてて笑う。シャルルの話し方が面白かった。
「そういえばヴィルヒアイス様もお優しそうな方でした。」
「そうですかぁ？？あれは腹黒いと思いますよー。紳士なんてのは大抵腹黒いものです！」
拳を高く突き上げて、シャルルはそう断言した。
「そ、そう？」
「そうです！お気をつけて下さいまし！さて、続いて第三王子様はラウル様です。」
「ラウル様・・・。あぁ、私、覚えきれるかしら・・・。」
愛は自信なさそうにため息をつく。
「忘れちゃっても大丈夫ですよ～。ルルがいつだってお側におります！」
シャルルの言葉に幾分、元気を取り戻して、愛は微笑みながらこくりと頷いた。
「さて、ラウル様はですねー。うぅーん。キリッとした男前な方ですね。王族って大抵、僕は戦いませんよーって主張せんばかりに髪の長い方が多いのですが、ラウル様はきっちりと襟元に沿うように切りそろえられています。魔術が苦手なようですが、その分剣術はそんじょそこらの騎士にも負けないぐらいお強いです！いつも軍服を着ていらしてますねー。王族の服は無駄にビラビラしてて動きに

くそうですからね！うーん、あと身分を問わず誰にでもお優しい方ですねぇ。臣民からは親しみやすいと広く愛されていますよ～。・・・まぁでもいい人で終わりそうなタイプですねぇ。」
「きっととても、穏やかで暖かい方なのね。」
「お、ものは言いようで随分変わりますね！さすがアイリ様！さてさて続きましてはー。第四王子のオルフェ様です～。・・・うーん、・・・何て表現しよう・・・。変わった方ですかねぇ。」
自分の主を思い出し、思わずシャルルは顔を顰める。
「どんな風に？気難しいの？」
「いえ・・・、どちらかというと気さくな方ですよ。うーん、常に面白いことを探し回っているような、楽しければそれでいいような・・・、刹那的な快楽を求めるタイプの方ですね・・・。退屈でつまらない事柄があれば、ご自分が楽しめるように躊躇なく変えてしまわれます・・・。建国際みたいな大事なお祭りでも、あのお方は嬉々として掻き回し、はちゃめちゃにしてしまうのです・・・。」
その手伝いを毎回させられている自分を不憫に思い、シャルルはどこか遠くを見つめた。
「まぁ・・・、悪戯っ子なのね。」
「そんな可愛らしいものじゃないですよぅ！しかももう御歳二十一におなりなんですよ！！そろそろ落ち着いて下さったっていいのに！！！・・・そうそう、あと多分、一目見たらこの人がオルフェ様、ってわかりますよ！」
「そうなの？」
「服装とか髪型が奇抜な方なのでー。髪とかめちゃくちゃ複雑に編み込んで高い位置でくくって、女の人みたいに宝石でじゃらじゃら付けて飾ってみたり、いろいろと凄いです。服装もド派手ですねぇ。でも不思議なことに品位は損なわれていないんですよねぇ・・・。一歩間違えれば成金趣味のギラギラした感じになりそうなものですのに、まだその一歩を間違ったところを見たことがないです。」
「趣味の良い方なのね。」

「いや、決して良くはないですよ！奇抜です！！」
愛の言葉をシャルルは全力で否定する。
「そ、そうなの・・・。」
「さてさてお次は第五王子様、ハルト様ですねぇ。・・・お子ちゃまです。」
何か嫌なことでも思い出したのだろうか、シャルルは眉間にぎゅっと皺をよせる。
「え？」
「お子ちゃまです。」
シャルルは大真面目な顔でもう一度しっかりと繰り返す。
「お子ちゃまなんです！とにもかくにもお子ちゃまなんです！何度ルルは弄ばれたことか！！」
「・・・ルル？」
「やりたくないことは絶対にやらない、好きなモノは独り占め、この世のものは僕のもの、って感じのお子ちゃまです！可愛いルルでからかって遊んでは”つまんないの。”とかいいやがります！！！あんにゃろぅ！」
ぷりぷりと怒り出したシャルルをなだめすかしながら愛は続きを促す。
「何かあったの？」
「何かどころか、もう多々あり過ぎて何からお話すれば良いのかすらわからぬ程ですよぅ！・・・まぁお可哀想ではございますよ？もうすぐ御歳十六におなりだというのに、未だ一滴の血も飲むことが出来ず、命が尽きかけているそうです。それも喰わず嫌いだからだとは思いますけど。美味しくない血は口にしない、とか変な矜持を持ってやがるんですよ、きっと。他の殿下方はマズいと感じてもお食事なさっているというのに！」
「そんなに、血を飲むことは大切なの？」
「もちろんですよー！吸血族は普通の食事もしますけれど、それだけでは生命の維持は困難なんです。覇力のために、魔力のために、

そうして何より生きていくために、魔族の血が必要なのですよー。」
「そうなの・・・。」
「さて最後は第六王子様ですね！お名前はユーリ様です。」
「ユーリ様ね。」
愛は王子達の名前を何とか頭に叩き込もうと、反復する。
「ユーリ様はかわゆいです。」
シャルルは両の手で頬を挟みうっとりと夢見るようにそう言った。
今までとは打って変わった態度だ。
「ルルはユーリ様派ですー。もう十四歳になられるているのですけれど、あのお兄様方に囲まれて育ったというのに、奇跡的に歪んでいなくて純粋で真っ直ぐでかわゆいのですぅ。背もまだ小さくて、短パンから覗く生足ときたら、たまりませぬ。」
「え・・・？」
「あわわわ、いえ、何でもございません。おっとりとしていて大人しい方です。アイリ様とは気が合うかもしれません！あまりにも穢れなさ過ぎて、将来が心配なのですが・・・。きっと大人の醜い争いには耐えられません・・・。繊細な方なのです。」
「まぁ、ルルは優しいのね。」
「いえいえ、ユーリ様派なだけです！あぁ、アイリ様が誰派になるか今から楽しみですー。決まったらルルに真っ先に教えてくださいましね！」
「え？え、えぇ、わかったわ。」
「約束ですよ！！」
愛はもう一度ニッコリと微笑みながら頷いた。不安で仕方がなかったがシャルルの話を聞いて、何とかやっていけそうだ、と思い始めた。夜会で顔合わせをするのは未だ不安だが、そこまで怖い方々ではなさそうだ、と愛は安堵する。食事も終わり、愛はフォークとナイフをテーブルに置く。夜会までは自由にしていいと言われたが、まだ旅の疲れが残っていたため、愛はシャルルや侍女数名と共に時間までのんびりと室内で過ごした。

日がすっかり落ちた頃、何十人もの侍女が愛の部屋に訪れた。
「そろそろ、ご用意なさいませんと。」
「あ、は、はい。・・・他の国の方々は・・・？」
「既に王宮に到着しておいでです。大抵は侍女も連れていらしておりますので、既に準備なされているかと。」
「そう、・・・ですか。申し訳ございません、お手数ばかりおかけしてしまって。」
どうやら侍女もつけずに訪れたのは愛だけのようで、愛は居心地悪そうに俯いてしまう。
「どうぞ、お気になさらないで下さい。ではまず御髪をまとめましょう。」
侍女の言葉に愛は慌てて首を横に振る。前髪を眉毛が完全に隠れてしまう長さでぱっつりと切りそろえているのも、横髪を長く伸ばして顔に沿わせているのも、全て表情を隠すためのものだ。少し俯くと髪の影が愛の顔を暗く隠してくれる。そこに守られているような安堵感を愛は覚えるのだ。
「あの、・・・おろしていてはいけないでしょうか・・・。」
心痛な面持ちでそう願いでる愛に、侍女達は当惑した様子でお互い顔を見合わせた。夜会では大抵髪は複雑に纏め上げられるものなのだ。
「いいんじゃないでしょうかぁ～～。せめてクルクル可愛らしく巻きましょう。それなら良いですか？」
シャルルの助け舟に愛はほっとしてこくりと頷いた。それを見届けてシャルルは手を払い侍女に用意を促す。腰まである長い髪を胸の辺りまでくるくると縦巻きにして、横髪にも軽く癖をつけて弧を持たせる。丸顔の愛の顔をさらに小さく見せた上出来な仕上がりにシャルルは満足する。さらに口紅を付けたりと簡単に化粧を施す。
「おぉー綺麗ですぅ。あとは外衣ですかねぇ。夜会なのでなくても

良いですけれど、どうなされますか。」
「外衣ってどういうの？」
「正方形の布ですー。いわゆるマントですね。片方の肩にかけて反対側の手の指輪に引っ掛けたり・・・。ほら、こんな風に布の縁のところどころに穴が開いているんです～。模様に紛れて分かりにくいですけど。肩からかけているだけの方も多いですよ。女性だと両肩を覆って片側をブローチで止めたりされている方もいますし、いろいろですねー。」
何枚か用意された外衣を手に、シャルルの説明を聞きながら愛は真剣に悩む。フィオールは春のように暖かかったが、ゼフィーニアは少しまだ肌寒い。けれど侍女達が複雑に結んでくれた帯を隠すのは忍びない。着物の帯の半分ぐらいの幅の帯が、まるで大輪の花が腰に咲いているかのように美しく結ばれている。
「もし使われるなら色は白が良いですー！赤い今日のご衣裳とあいますもの！」
シャルルは白地の布に銀色の糸で花の模様を描いている布を広げた。
「描かれているのはラビリア・・・？」
「あ、そうみたいですねぇ。」
愛は窓辺に飾られたラビリアの花を見つめた。強さを花言葉に持つこの花が愛は好きだった。すすめられるがままに白い外衣を受け取り、三角に折る。そうして帯が隠れないように帯びの下にたゆませるようにして、両端を腕にゆったりとかけた。寒く感じたら肩にかけ直したらいい。
「お、いいですねー。じゃぁ行きましょう。ルルはお側にはいられないですけど、広間で給仕とかしているので、何かあったらお声をかけて下さい。」
愛はしっかりと頷く。側にいてもらえないのは心細いが、いつまでも頼っていては迷惑になる。シャルルに連れられて大広間へと向かうが、緊張でだんだんと足取りは重くなる。それでも有限の廊下を歩み続ければ、いつかは必ず目的地についてしまう。

「さぁ、ここです。どうぞどうぞー。」
いつも通りのシャルルの声と表情に勇気を貰う。扉の前で立哨していた騎士が愛を見るなり、深く一礼し、扉をゆっくりと開く。
「フィオール王国、第二王女アイリフィア様がご到着なされました。」
騎士の良く通る大きな声が広間に響きわたる。視線を一点に受け止めた愛は思わず怯んでしまう。
「ささ、アイリ様、前へ。お席はこちらですよー。」
シャルルに案内された席に愛はゆっくりと腰を落とした。ゼフィーニアと古くから国交のある国の王侯貴族が王族に近い位置に座っている。フィオールはどこの国とも国交をもたない上、小国であるため、愛に用意された席は扉に一番近い下座だった。だが愛は逆にそのことに安堵する。襲撃された時に感じた覇力の独特な気配があちこちに漂っている。あの時のような悪意は一切感じないが、それでも愛にとっては未知で恐ろしいものだった。特にゼフィーニアの王族と思しき高い位置に設けられた席からは、威圧感とも何とも言い表しがたい気配が放たれていて、それが愛を息苦しくさせる。

―あれがフィオールの。
―確かに魔力の質は良さそうですけれど、・・・よくわからないわ。本当に強いのかしら。
―隠しているだけでは。強い魔族程、魔力を隠すのは上手でしょう？
―まぁ、髪をおろしているわ。非常識ね。
―地味な娘。

興味や蔑みの目が愛に突き刺さる。愛は顔を伏せて机の下で握り締めている結界の魔方陣を縫い付けたハンカチをじっと見つめた。これを今ここで発動させて、声という声を防ぎ、自分だけの世界に閉じこもりたかった。けれども愛は耐える。何も見えないふり、聴こえないふりは昔から得意だった。

「さて、全員が揃ったようだ。」
王の低い声が広間に響き渡り、ざわついていた広間が静寂に包まれる。王は広間を見渡した。留学生を募っただけで性別の制限はかけなかったが、見事に全員が女性だった。どうやら各国、ゼフィーニア王族の意図を敏感に感じ取ったらしい。
「長旅、ご苦労であった。これより一年、多くの事を学び、吸収し、自国の発展に役立てて欲しい。今宵の晩餐は顔見世のようなもの、気を楽に楽しんでもらいたい。」
王が高らかに杯を持ち上げると、同じように席についている全員が杯をかざす。それを見て愛もあわてて杯を手にとった。乾杯の声が響き渡り、食事が運ばれ始める。その時信じられない言葉が王の近くに立っていた文官より発せられた。
「それでは手前の方から簡単に自己紹介を頂きましょう。」
愛は呆然と前方を見る。一番前に座っているチョコレートのような色の髪を高く結い上げた女性は、満面の笑みで立ち上がると前に出て、一段高いところにいる王達の前に跪いた。愛と同じようにメディシスから送られたのであろう衣装は若葉色で、華やかに着こなしている。外衣には大量の宝石をぬい付け、右肩の内衣から大きなリボンのように結びつけて垂らしている。彼女は手馴れた様子で名前や国のこと、得意な分野などについて簡単に説明していた。愛は真っ青になった。昔から人前で話すのは苦手だった。クラスが変わる度に行われる自己紹介が苦手で、いつも初日は休んでしまっていた。授業で当てられると、どんなに簡単な問題で答えがわかっていても、喉から声が出なかった。
―食事をするだけかと・・・。どうしよう・・・。
愛は緊張で指先が冷たく凍えていく。口の中は既にカラカラだ。少しずつ順番が近づいてくるのが、恐怖で仕方がない。出てくる食事

に、何一つ手をつけることが出来ない。

―怜ちゃん・・・どうしよう、怜ちゃん・・・。

怜であれば、軽くこなせているであろう事柄も、愛にとっては苦行でしかない。

―泣いては駄目・・・。泣いては駄目よ・・・。

込み上げてくる物を必死で飲み込む。身体は震え、もはや話す内容を考える余裕すらない。愛の異常な様子に真っ先に気付いたのはシャルルだった。

「アイリ様・・・？いかがなさいました？」

そっと近づいて話しかけると、愛はぱっとシャルルの方を振り返った。安堵の為か、耐えていた涙が一滴、ぽろりと零れ落ちる。

「・・・！！！！いけませんアイリ様！ここで泣いては・・・！」

シャルルは思わず声を荒げる、が、既に遅かった。広間を取り囲んでいた騎士の内、吸血族であろう者達が苦しげに喉を押さえながら床に膝を付く。

「・・・くっ。」

フェルデスやメディシスも反射的に自分の目を掌で覆う。吸血欲と性欲は表裏一体だ。従い、吸血欲を人に見せるのは、魔族が涙を見せるのと同じに、品位を貶める行為だった。ラウルも一拍遅れて、慌てて金色に輝き、瞳孔が狭まっているであろう自分の目を隠す。

「わお～、美味しそうな気配～。」

オルフェだけは隠しもせず堂々と、異常に輝く瞳とぎらついた牙をさらけ出す。落ち着きを取り戻したメディシスは手を下ろすとオルフェを嗜めた。

「オルフェ！」

「お、さすが～。もう瞳の色、元にもどっているねぇ。強靭な理性だなぁ。」
オルフェは反省することなくニコニコと笑ってそう言う。
「でも、俺を怒るより、ハルトやユーリの心配した方がいいんでない？」
そう言われて慌てて弟達を確認する。ユーリは耳まで顔を真っ赤に染めて、両手で顔全体を覆い隠して俯いている。相当に恥らっているようだ。一方ハルトは肘置きに肘をのせた方の手で目を覆い体重を支えながら、牙で自分の唇を強くかみ締めて、荒い呼吸を何とか鎮めようとしている。ハルトの方が危険な状態のようだった。吸血欲に支配されて我を失いかけている。メディシスはハルトが吸血欲を感じていることに一瞬安堵するが、今はそれどころではない。
「ハルト、」
「・・・今僕に話しかけないで！！！！」
搾り出すような掠れた声で、ハルトはメディシスの言葉を遮る。思わず手を伸ばしかけたその時、女性の悲鳴が響き渡った。
「しまった・・・！」
広間を護衛していた騎士の一部が愛に襲いかかる。愛自身は恐怖で声も出ない様子で呆然と向かってくる吸血族を見つめていた。踊りかかってくる吸血族を、シャルルは全力で殴り飛ばす。ただ人数が多い。シャルルひとりで守りきることは出来ない。他の魔族の騎士達が慌ててシャルルの手助けをするが、覇力を全開にしている吸血族と、加減をしながら戦うのは容易ではない。

「・・・触らないで。」
「ハルト？」
自我を保っている騎士達に指示を飛ばすフェルデスや、逃げ惑う王女達を落ち着かせようと努めていたメディシスは、呟くように発せられたハルトの声に思わず振り返る。
「・・・僕のに、触らないで・・・！！！！！」

怒りのままにハルトから膨大な覇力が爆発的に広がる。重力が急に何十倍にでもなったかのように、思わずメディシスはその場に膝をついた。騎士達も床に這い蹲り、王女達に至ってはバタバタと気を失っていく。

―まだこんなにも、覇力が残っていたのか。

感心すると同時に焦りがこみ上げる。

「いけない、ハルト！本当に死んでしまう！！」

最後の覇力を振り絞っているのではないか、そんな不安がメディシスを襲う。ハルトは朦朧とした様子で、メディシスを横切り段を降りる。愛は信じられない程の圧迫感に瞬きも忘れてハルトを見つめた。ゆっくりと近づいてくるハルトが恐ろしく、愛は少しずつ後ずさる。何かが当たり振り向くと、シャルルも苦しそうに床に臥せっている。

「ルル・・・！」

シャルルは何とか顔を上げると声を搾り出す。

「殿下、目を覚まして！！！！」

その声は決してハルトの耳には届かなかった。美味しそうな気配がする、ただその思いに突き動かされるようにハルトは前に進み、床にへたりと力なく座る愛の前に屈みこむ。そうして次から次へと零れ落ちる彼女の涙に舌を這わした。

「・・・いやっ。」

床に愛の手を縫い付けて、静止の声も聞かず、ハルトは何度も涙の跡を辿る。血程ではないにしても、涙にも魔力が多分に含まれている。

―甘い。

僅かに残った自我が、心の中でそう呟くのを、まるで他人の声のよ

うに認識しながら、ハルトは今度はゆっくりと愛に口付ける。
「・・・！」
愛は衝撃で一切の抵抗が出来なかった。手はハルトに押さえ込まれ、身体は覇力に支配されている。結界の魔方陣が描かれたハンカチは遠くに力なく落ちている。
「・・・だ・・・め・・・。」
口内を舌で犯され、呼吸の合間にただ嫌だと訴えることしかできない。ハルトは夢中で彼女の唾液を吸い上げて、魔力を取り込み覇力を高めて行く。そうしている間に徐々に落ち着きを取り戻し、ゆっくりと覇力を収束させると、ハルトは愛の下唇を軽く吸い上げてから顔を離し、愛の膝へとずり落ちていく。
「・・・僕・・・疲れた・・・みたい・・・・・・・・。」
その言葉を最後に、ハルトは意識を手放した。

ようやく覇力から解放されたシャルルは、むくりと起き上がった。
「酷い目にあった・・・。」
シャルルは起き上がるやすぐにハルトを愛から引き剥がそうと引っ張る。しかし、どうやらハルトは両手をしっかりと愛の腰に廻しているようで、なかなか剥がれない。
「むっ！」
シャルルはさらに力を入れて無理やり引っ張ってみるが、やはり駄目だった。
「ハルト！」
メディシスが慌てて駆け寄ってくるのを見て、シャルルは諦めてハルトから身体を離す。メディシスはハルトに近づくと、まず息をしていることに安堵する。よくよく見てみると、顔色も随分良くなっている様に見えた。愛から無理やり魔力を奪うような行為は王族としてはあってはならない恥で、後で厳しく叱らなければならない。だが十五年もの間、喉が渇き続けていたことを思えば、彼女の首筋

に牙を立てて血を啜らなかったのは奇跡のようでもあった。僅かに理性が残っていたのだろう。メディシスは涙の跡が痛々しい愛の目を見つめ、そっとその手をとると、甲に口付ける。
「姫君には恐ろしい思いをさせてしまい、大変に申し訳ない。」
考えてみれば、深い森の奥で生まれ育ち、吸血族にも男性にも慣れていないはずの姫君をいきなり吸血族だらけの大広間に放り込むような夜会を開いた自分の失態に思えた。メディシスは心から謝罪する。
「あ、いえ、あの・・・。」
愛はしばらく視線をさ迷わせた。そういえば、この人は王の二つ隣の席に座っていた。歳の順に並んでいると聞いていたから、ということはこの人が第二王子なのだろう、と当たりをつけ、彼の顔をじっと見つめてみる。シャルルの情報の通りに美しい顔立ちだった。この人が第二王子なのであれば、服を贈ってくれたのはこの人なのだろう。
「あの、お、お洋服、有難うございました・・・。」
どこか自信がなさそうに胸元に手を合わせながら、そうお礼を言う。多くの女性が気を失って倒れており、机の上は我を忘れた吸血族に荒らしされてぐちゃぐちゃ、料理は床に散乱し、止めに入った魔族が数人傷の手当をしている。そういう異常な状況下で、さらに王子であるハルトを膝の上で寝かせながら、贈り物のお礼を述べる愛は、際立って異常だった。
「あの、あと・・・これは、私が、泣いたせい・・・なのでしょうか・・・？」
俯いて萎れた花のように身体を縮める愛が痛ましい。
「いいえ、貴方のせいではない。我々の落ち度です。さぁ、どうぞ顔を上げて。」
メディシスは愛をきつく抱き締めて眠っているハルトの腕を無理やり剥がすと、彼を抱え上げた。そうして女装をしているシャルルを見る。何故そんな格好をしているのかと問いただしたかったが、恐

らくオルフェの差し金だろうとため息をつく。
「・・・ルル。」
頼りなげにシャルルに愛が身を寄せたのを見て、メディシスはさらに眉間の皺を寄せてシャルルを睨みつける。シャルルは悪びれる様子もなく、しれっと視線をそらした。このあたりが主人であるオルフェと良く似ている。
「君はあとで、私の執務室に来るように。」
シャルルに冷たくそう告げると、メディシスは近場の侍女を呼んで愛を部屋へ下がらせる。
「メディシス、ここは私が片しておく。ハルトを。」
フェルデスに声をかけられ、メディシスは深々と礼をとると、混沌とした大広間を抜けていく。フェルデスは短いため息を付きながら惨状を直視する。

―王女達が目覚めた後が面倒だな。

何人かが機嫌をそこねて帰国すると騒ぐ王女もいるだろう。国交に影響が出るかもしれない。ガルドから目が離せない今、さらに敵を増やすわけにはいかない。フェルデスは冷静に指示を出しながら事態の収拾にあたるのだった。

2．吸血（前書き）

R15につき、苦手な方は回避してください。

2. 吸血

ハルトには大切なものが3つある。ひとつ、ふわふわでまんまるな塊に二つの目がちょこんと縫い付けられたヌイグルミ。ひとつ、ハルトがまだ幼い頃に嫁いでしまった姉が最後にくれた水晶のペンダント。ひとつ、大人でも難解とされている魔術書「近代術式構成論における限界および古典術式相補型への応用可能性に係る考察」のカバーがかけられた分厚い絵本。寝起きには必ず部屋をひっくり返してこれらを探し、胸元に抱いてまた眠る。それを何度か繰り返して3回目ぐらいでようやく完全に覚醒するのだ。今もまたハルトは巨大なベッドに山ほど敷き詰められた枕やクッションの間からヌイグルミを救出し、机のキャビネットの中身を混ぜ返して絵本を見つけ出す。ペンダントはと寝惚け眼で自分の胸元を確認すると、いつも通りそこにあった。”これで安心してもう一度眠ることが出来る”とベッドに潜り込み目を閉じるが、何かが気にかかり再びむくりと起き上がる。

―そうだ、もうひとつ・・・。

左手にぬいぐるみ、右手に絵本を持ったままベッドからするりと抜け出し、素足のままペタペタと扉へ向かう。

「あの子、どこ・・・。」

「あの子ってアイリ？」

呟いた言葉を拾われて、声がした方向を気だるげに確認する。定まらない視界にシャルルのぼやけた顔が微かに映る。

「シャルル・・・？」

「今はルル！アイリの侍女なんだよぅ。羨ましいでしょう。あ、アイリにバラさないでよ。殿下のあることないことアイリに喋るよ。小さい頃の話とかね。」

シャルルはハルトの乳母子で幼馴染とも言える。寝惚けているハルトに自分の言葉など聞こえないと百も承知ではあるが、文句を言わずにはいられない。
「殿下が舐めまくるからアイリ熱出して倒れちゃったんだよ、全く。お薬飲ませて寝かせてるんだから、殿下は行っちゃ駄目だよ。アイリ怖がってたでしょ。」
「・・・向こう？」
重い瞼が光を通すことはなく、あっちこっちに身体をぶつけながら室外へと赴く。
「ちょっと！聞きなよ！！」
憤りながらハルトの肩を掴めば、無言のまま開放された覇力に捻じ伏せられる。
「ちょっ・・・ぐっ・・・。誰か・・・！止めて・・・！」
夜会の時程ではないとはいえ、立っているのがやっとという状態ではハルトを止めることは出来ない。普通であれば部屋の前に立哨している近衛騎士がいるものだが、ハルトは身近に見知らぬ人がいる状態を極度に嫌がる為、現在も不在だった。変わりにシャルルが見張りとして置かれていたのだが、その役目は果たせそうにない。
「ちょっとーーーー待ってってばぁ！！！」
叫ぶ声は無駄に広いハルトの部屋で空しく反響するだけだった。

シャルルを振り切ったハルトはほとんど意識のないままに廊下をさ迷い歩く。

―こっちだ・・・。

甘い香りがハルトの鼻腔をくすぐる。途中ですれ違う者達が何やら口をぱくぱくと開閉している。だが声は聴こえない。

「ハルト殿下、どちらへ？！」
「待て、お持ちの物を見てみろ、寝惚けていらっしゃる。」
「この状態の時は相当ご機嫌悪しくいらっしゃると聞く・・・。我々では・・・。」
「今朝お召しになられたという、例の王女様を探しておられるのでは？」
「確かフィオールの王女だったか。とにかく、どなたかにお知らせしなければ。」

―あとひとつ。僕のモノ・・・。

今にも完全に閉じそうな目を時々こすりながら、ぺたりぺたりと突き進む。

―ここ・・・？

扉の向こうから蜜のような甘く優しい気配が洩れ出ている。扉に近づくと何かが行く手を遮った。それをハルトは再び覇力で押さえ込む。何かがぐちゃりとハルトの足元に倒れ伏し、喚いているようだった。
「僕の・・・。」
今朝までほとんどなかったはずの覇力が、僅かに回復している。それを魔力に変換して力任せに放出し、塞がった両手に変わって扉を乱暴に開く。

―ここだ。

長いローブを纏った重たい身体をずるずると引きずり、透き通る天蓋の向こうに真っ黒な髪の少女の上下する背中を見止める。天蓋をくぐりサイドテーブルに絵本を置く。

「この子・・・？」
ベッドに登り、少女の顔を覗き込む。身体が汗ばんで息苦しそうに荒い呼吸を繰り返している。軽く腕を引っ張れば簡単に仰向いた少女の額に口付ける。彼の乾いた唇に少女の汗が染み込んだ。ハルトはそれをペロリと舐め取り、ようやく満足する。睡眠欲に支配されている今、吸血欲は息を潜めているようだった。

―全部そろった。

少女の横に潜り込むと、彼女とぬいぐるみを一緒に自分の腕の中にしっかりと閉じ込めた。そうしてようやく訪れた安寧に身を委ね、再び眠りについたのだった。

愛はそろりと目を開いて絡まる腕から抜け出すように上体を起こした。身体中を這いまわる熱は静まることを知らず、身体の奥底で今も燻り続けている。最初から目は覚めていたため、ハルトが部屋に入ってきた事にも気付いていたが、何度も口付けされた記憶が彼女の身体を強張らせ、動くことができなかった。起き上がろうとするも、腰にしっかりと腕を廻されて上体を起こすのが精一杯だった。愛に抱きついている少年は彼女が身体を起こしたことが不服なのか、唸りながらさらにきつく抱きつき、その頭を柔らかな太ももに擦り付ける。起こしてしまったかとひやりとしたが、すぐに規則正しい寝息が聞こえてきて愛を安堵させた。そっと顔を覗き込むと、少年らしいあどけなさが際立ち、夜会の折の、吸血族独特の色気や男性らしさは感じられない。愛と同じ真っ黒な髪は横髪だけ顎のラインで切りそろえられ、後ろ髪は他の王族と同じように長く伸ばされている。前髪をそっと掻き分けると、つんとすました表情は少女とも見紛うほどの愛らしさを秘めていたが、ただ眉だけは力強く男性的な直線を描いている。こうして寝顔を見ていても、恐怖は感じなかった。恐る恐る頭を撫でてみると気持ち良さそうに表情を緩め、ハ

ルトの腕から力が抜けていくようだった。愛の寝巻きを無意識に食みつつ、甘えてくる。

―大型のわんちゃんみたい。

何度となく頭や額を撫でて過ごしていると、部屋の扉が叩かれた。返事に迷っている内にメディシスが遠慮がちに姿を現した。薄く透けた天蓋ごしに目がひたりと合う。

「お身体はもう大丈夫なのですか。」

身体を起こしている愛に声をかけながら少しだけ近づくが、女性の寝室に深く入り込むことが躊躇われたのか距離を保ったまま立ち止まった。

「・・・あの、えぇ・・・。はい・・・、大分、良くなりました。」

「それは良かった。着いて早々の無礼、愚弟に代わりお詫び申し上げる。・・・ところで、その弟がこちらに来ていると思うのですが。」

愛はすやすやと熟睡するハルトを見下ろす。

「・・・はい、先ほどいらして、眠っていらっしゃいます。」

メディシスは愛に聴こえるほど大きく息を吐き出した。

「そちらに行っても良いでしょうか。」

愛は慌てて少しはだけてしまっている寝巻きを掻き合わせて準備を整えるが、ふと随分と汗ばんでいることに気付く。

「・・・あの、でも、私・・・汗を・・・。」

魔族の体液は吸血族を狂わせるのではなかったか。狼狽する愛をよそに、メディシスはゆっくりと足を運ぶ。汗の事など今更だった。部屋に入る前から漂う甘い香りが誘うかのようにメディシスに絡みつき、彼の身体中を撫でて、理性を試してくるのだ。

「貴女が怖がるようなことは、決してしません。」

天蓋をくぐれば不安そうに潤んだ瞳と視線が絡む。吸血族の唾液に含まれる媚薬成分が身体中に流れ込み、抑えることの出来ない熱で

上気した頬と、ぽてりと腫れた唇が怯えで微かに震えているようだった。意識的に視線をそらし愛の膝枕で気持ち良さそうに眠っているハルトを軽く揺する。
「ハルト、起きなさい。」
無意識の内に兄の手を乱暴に叩いて布団を深く被るハルトを呆れるように見やりながら、メディシスはベッドに腰掛けた。そうして胸元で不安げに寝巻きを握りしめている愛に視線を走らせ、どうしようもない庇護欲に駆られて思わず頬に手を伸ばし、熟した唇を親指でなぞる。緩やかに波打つ黒髪が汗ばんだ白い肌に張り付き、伏目がちな大きな眼を縁取る艶やかな睫は僅かに濡れ、きらきらと輝いている。怯懦な性格を隠しもしない震える細い肩先と柔らかな肢体。愛の頬は熱く、メディシスの掌を焦がした。守らなければ、という焦燥感が波のように押し寄せ、けれども自分の存在が彼女を不安にさせているのだという事実の壁にぶつかり飛沫を上げながら粉々に砕けて大海へと戻っていく。それでも溢れる庇護欲はとどまることを知らず、寄せては返し寄せては返しメディシスを急き立てる。頬をすべり、項を撫で、伝うように肩を腕を滑り下り、やがてベッドのシーツを握り締める細い指先にたどり着き、己の指を絡ませた。愛の身体が強張り逃げるように後ずさるのを許さず、指先に力を入れ、ただ気まずげに視線を逸らした。
「ハルトが、飢えていることは？」
「・・・侍女の方からお伺いしております・・・。」
「貴女には恐ろしく感じられるかもしれないが、我々は魔族から血を貰わないことには生きてはいけぬ種族です。ハルトの命は尽きかけていて、けれどもハルトに合う血がこれまで見つからなかった。」すっと視線を上げ、ひたと見つめると、まだ幼さを残した少女は戸惑い身じろいだ。
「でも貴女のことは気に入ったようだ。意地の悪いところもありますが、心根は優しい子だ。どうか、弟を受け入れる努力をしてみて貰えないだろうか。」

真摯に頼み込まれて否やと言える愛ではない。しかも愛が血を差し出さなければ、愛の太ももに顔を押し付けて眠りこけている少年は死ぬと言わんばかりで、拒否など出来ようもない。
「・・・血だけで、よろしいのでしたら・・・。」
「血だけ？」
首を傾げられてしまい、頬を染める。言葉で説明するのは憚られる内容を合えて伏せたのだが、言葉にせずに伝えるのは難しい。何も言わなくても理解してくれるのは姉の怜だけなのだ。
「・・・あの、血を飲むと、・・・その、吸血族の方は、したくなるって聞いたので・・・。でも、私・・・。」

―したくなる？

しばらく悩んだ後に、顔を真っ赤に染めながらしどろもどろと説明する愛の言葉の意味に気付く。同時に、メディシスは戸惑いを覚えた。彼らにとって血と身体は同等のもので、かつ一体のものだ。血を差し出すのは構わないが、身体は嫌だ、という彼女の思考が理解できない。そもそも、吸血欲と肉欲を切り離して考えたことなど一度もない。
「何故ですか？」
素直に疑問を口にすれば、今度は愛が酷く驚いた様子だった。
「・・・何故って・・・だって・・・。」
「身体を求めれば血も欲しくなる。血を求めれば身体も欲しくなる。相手の全てを支配せずには居られない。吸血族とはそういう性だ。いくら吸血族のいない国で生まれ育ったとは言え、それは貴女も承知のはずだ。」
単純に価値観の、文化の違いなのだと説明しても納得してもらえそうにない雰囲気だ。元いた世界では献血もあったし、検査のために血を抜かれることもあった。噛み付かれることは想像すると少し恐ろしいが、血を差し出すこと自体には抵抗がない。けれども身体は

そうやすやすと開くものではない。それを、こちらの世界で産まれた人にどう説明すればいいのだろうか。
「魔族も、欲を満たすことで魔力の質を高めていく種族だ。何故それを嫌がるのです。」
そんな話は聞いたこともない。愛は目を見開き愕然とした。”私は人族だ”と主張したかった。今でも気持ちの上では何の力もないただの人間なのだ。魔力など知らない、と叫びたかった。

「そーゆー教育を受けたんじゃないのー。」

だるそうなくぐもった声が膝元から聞こえて視線を降ろすと、ハルトがころりと仰向けになり愛にぴたりと視線を定める。次に愛とメディシスの指が絡まっているのを見とめるや、急速に不機嫌になり、愛の手を取ると無理やり引き剥がし、代わって自分の指を絡ませる。
「起きたのか。」
「耳元で何だか煩いんだもん。目も覚めるよ。」
「いきなり姫君の部屋に押しかけるなど、」
「はいはい、僕が悪かったよ、だって寝惚けてたんだもん。仕方がないでしょ！」
ぷんと頬を膨らませてお説教を始めようとするメディシスを睨む。
「あの・・・。」
途惑う愛に視線を戻し仰向けに転がったまま腕を伸ばす。
「ねー君、名前なに？」
「あ、えっと、アイリフィアと申します。」

「・・・それ本当の名前？」

真顔で聞かれ、愛は狼狽を隠せなかった。
「どういうことだ？」
ハルトの言葉にメディシスが訝しげに眉を潜める。

「君でしょ、異世界から無理やり引き落とされてきた内の一人。もう一人はゴルディアに行った君のおねーさん？」
「な？！」
メディシスは愛とハルトを交互に見ながら目を見張る。愛は視線をさ迷わせ、今にも泣き出しそうな表情になる。
「ハルト、それは間違いないのか。」
「うん。あの時、時空の狭間で放たれた膨大の魔力と全く同じ気配だもん。ねぇ、本当の名前教えてよ。」
「わた、わたし・・・。」
溢れ出す涙に、”おっと”と身体を起こしてハルトは唇を寄せる。
「ハルト！」
「だって、勿体無いでしょ。魔力の味がする。」
唇に落ちた涙をぺろりと舐める。
「ねぇ何で泣くの。泣かないでよ。名前言いたくないなら別にもういいから。」
困ったように愛の顔を覗き込み、服の裾を引っ張ってみるが、愛の表情は曇ったまま変わらない。ハルトは泣き止まそうとあたふたと辺りを見回す。

―こんなに早くばれちゃうなんて。どうしよう。私、本当は王女でもなんでもないし、牢の中に入れられる？殺される？

不安で胸が締め付けられている愛を余所に、ハルトはいつの間にかベッドから転げ落ちていたまん丸でフワフワのヌイグルミを拾い上げると愛にぎゅっと押し付ける。
「もう！僕のムームー貸してあげるか泣かないでよ。」
「・・・むーむー？」
「うん、この子の名前。かわいいでしょ。妖精でね、僕の好きな絵本に出てくるんだよ。絵本も貸してあげる。」
ベッドサイドの絵本を手に取って愛の太ももへと戻っていく。仰向

けになり、愛にも見えるように挿絵の部分を広げる。
「ほら、ここにムームーいるでしょ。」
広げられた絵本を覗き込むと、確かにヌイグルミと同じまん丸な形をして、くりくりのつぶらな目がふたつ、ちょこんと付いただけの生き物が三匹並んで愛らしくこちらを見つめている絵が描かれている。愛の目から涙が引っ込んだのを確認してハルトは安堵する。何か言い出しそうなメディシスを目で制して、扉に向かって声を上げる。
「ルルいるんでしょ、来てよ。」
扉から訝しげに顔を出したシャルルにやりと笑うとハルトは手招きする。
「なんでしょう、殿下。」
「僕が倒れた時、メディ兄さんにお呼び出し喰らってなかったっけ？」
にこにこと嬉しそうに微笑みながら、シャルル自身すっかりと忘れていたことを口走るハルトにシャルルは青褪めた。
「げっ。」
「僕まだあの時辛うじて意識あったんだよねぇ。ちゃんと行った？」
「なっ・・・！うっ・・・。」
「うん、まだだよね、僕が目を覚ますまで僕を見張ってたもんね。じゃぁにーさん、ルルをよろしく。僕もあとで行くから。」
しっしっと手を払うハルトと視線を絡ませ、”後で説明に来るんだな”、”必ず行くから”、とアイコンタクトで会話をし、静かに頷いてメディシスは立ち上がる。
「さぁ、ルルとやら、行くぞ。」
嫌がるシャルルの首根っこを掴んでずるずると部屋の外に引きずり出す。閉まった扉の向こう側から”覚えてろよ！”という乱暴なシャルルの声が響き渡り、愛は目を丸くする。
「ルル・・・？あの、ルルは大丈夫なのですか？」
「うん、ちょっと粗相があったから怒られるだけ。いつものことだ

よ。」
心配そうに扉を見つめる愛に、にじり寄りその胸に頬を寄せる。
「きゃっ。」
「うーん、柔らかい。」
何度か頬擦りをして堪能し、悪戯っ子のように目を細めて顔を近付ける。
「ねぇ、僕、喉渇いたよ？」
「え・・・？！あの・・・でも・・・。」
「ダメ？このために邪魔者二匹を追いやったんだけど。」
「え、あ、ルル・・・？」
「うん、あいつ邪魔しに来るだろうから、遠く離しておかないと。ねぇねぇ、僕が死んでも平気？」
「それは・・・でも・・・。」
「平気じゃないよね？君が血をくれないと僕生きられないんだよ。ねぇ、一生涯大切にするって約束するから、血をちょーだい。ガルドからも、他の吸血族からも守ってあげる。僕はとても強いから、君を守ってあげられるよ。」
愛の足を引っぱり、ベッドに沈めこむ。上から迫ってくるハルトからは先ほどまでの少年らしさが消え失せ、妖艶な吸血族へと変貌を見せる。
「ねぇ、ダメ？」
寝巻きの間から差し入れられた手に足をなで上げられ、愛は思わず身を縮める。その姿を狂おしそうに眺めてから、項に顔を埋めてたっぷりと唾液で濡らす。
「吸血族の唾液は痛みさえ快楽へ変える。痛くないよ、約束する。”だから、ねぇ”と耳元で囁く。
「許可をちょーだい？」
弱々しく首を振って抵抗を見せる愛に、ハルトは何度も何度も重ねて許可を求めてくる。ようやく引き始めていた熱が再び燃え上がったかのように愛の身体中で暴れ狂う。

「だめ・・・だめ・・・。」
「いいって言ってよ。」
「でも、だって・・・。」
「このままじゃ僕、飢えて死んじゃうよ？いいの？僕を殺すの？」
命を楯にとられて拒否出来るタイプではないと分かった上での問いだった。愛は自分の指を噛み締め、ハルトの金色の目から逃げるように顔を逸らす。

「ねぇ、いい？」

頷くしかなかった。見殺しになど出来ない。

首に牙が刺さる感触に息を呑む。ただし、全く痛くはなかった。むしろしびれる様な快感が電流のように流れる。
「・・・！」
両腕で抱き上げられて弓のようにしなった背中と、突き出した豊かな胸が触れて欲しいと震え出す。

少しだけ血を啜り牙を抜いたハルトは情欲に濡れた目で優しく愛を見下ろした。赤い血が白い牙を伝い落ち、それをハルトはゆっくりと舌で舐め取る。

「身体も心もくれるよね？僕、我慢できない。」

朦朧と霞んだ頭では何を言われているのかも理解できず、ただ呆然とハルトを見上げることしか出来ない。それを許可ととったのかハルトは手際よく愛の寝巻きを剥ぎ取ると、自分も脱ぎ捨てて愛に覆いかぶさった。

後のことを、愛は何も覚えていられなかった。痛みは皆無であったこと、恐怖も途中から何処かへ消え失せたこと、そうしてただ押し寄せる快楽に溺れ続けたこと、それらが思い出されたのは愛が新しい生活に慣れ心に余裕ができてからの事で、しばらくはただ恥ずかしかったという感情だけが何度も思い出され愛を赤面させたのだった。

3．兄弟愛

寝巻きを気だるげに羽織ったハルトは酔った様なふわふわした気分のままメディシスの部屋を目指す。すれ違う者達はハルトから溢れ出る覇力に目を丸くして崩れるように跪く。

「来たよー。」

扉の両脇を固めていた騎士に許可を得ることもなく、無遠慮に扉を開け放つ。慌てた騎士達を目で制して意気揚々と中へ進めば正座のままゲッソリとした表情のシャルルが恨めしそうにハルトの方を振り返った。

「あれ、何その覇力?!もしかしてアイリ様食べちゃったの?!??!??!」

「うん。僕のだもん。何かいけない?」

「ひどいひどいひどい!!!!!」

「何が。」

「あんな幼気な女の子を!!」

「優しくしたよー。」

「メディシス様怒らないの?!」

きっとメディシスを見上げれば狼狽したような表情が彼に浮かんでいる。あれ?と不思議にシャルルが彼を尚も見つめると後方からクスクスと笑う声が聞こえた。

「珍しいね、メディシスが途惑うなんて。あの子の魔力に当てられたね?」

「なんでオルフェにーさんがいるのさ。」

不服そうに口を尖らせながらハルトはゆったりとソファに座る。今来たばかりなのだろうか、オルフェは入り口の扉に頭を預けて興味深そうに室内を観察し、妖艶に微笑んだ。

「俺の部下がメディシスにお説教されているみたいだし、感じたこともない莫大な覇力の気配も感じるし、面白そうだったからつい、

ね。除け者にしないで欲しいなぁ。」
「オルフェが関わるとめちゃくちゃになるじゃん。掻き回すだけ掻き回して自分は高みの見物でしょ。」
ついと顔を逸らしてぷりぷりと怒る。
「やだなぁ。今回は高みの見物じゃなくて、ちゃんと参戦するよ。面白そうだからね。」
長い髪をくるくると指先で弄びながら、一歩室内に踏み入れ、片手を軽く上げて外側の騎士に扉を締めさせる。
「で、メディシスもあの子の魔力に惹かれているみたいだよ、ハルト。」
「だからナニ？！嫌だよ、あの子は僕の！」
「いつものメディシスなら独占欲で女性を縛り付けるなんて美しくない、とか言い出しそうだけど、今日は大人しいね？今ならハルトの気持ちがわかるのかな？」
「私は・・・。」
ようやく口を開いたものの、言い淀んで再び閉ざしてしまう。
「ふふふ。いい機会だと思うよ。日増しに女性の魔族が減っているから共有は止むを得ないのが現状であるのに、もともと吸血族は独占欲の強い種族だから、女性を奪い合っての死傷沙汰なんて今じゃ珍しくもない。それを緩和するために多夫多妻制を認める新しい法案は通ったばかりだ。王家が例を示す素材が出来て喜ばしい限り。」
「ヤダ！ダメ！！」
「まぁまぁハルト。あんなに美味しそうな血はめったにない。王族同士の血で血を洗うような争いに発展しないとも限らないよ？そうなると一気に国は瓦解する。君がその溢れんばかりの覇力を使えばもちろん、全員をねじ伏せることが出来るだろう。でも血の玉座に座る君を、あの純粋可憐なお姫様が受け入れてくれるかな・・・？」
「なっ！！うっ・・・。うぅっ。」
「基本は君のもので構わないよ、喉が乾いた時にちょっとかじらせて、ってお願いしているだけさ。」

「ダメ！あの子が嫌がるよきっと！」
ハルトは兄弟と争うつもりは一切なかった。特にメディシスには身体の弱かったハルトを常に心配し、過保護なほどに守ってもらっていた恩義がある。だからといって自分のモノと認識した娘を兄弟と共有するのはやはり嫌で抵抗を試みるが、オルフェがそれを否定する。
「もちろん、選択肢はあの子にあるよ。でも・・・あの子は受け入れると思うな。求められれば拒否できないタイプだ。良く言えば優しいのだろうし、悪く言えば”自分の意思”がない。何もかも相手に同調して流されてしまう。相手の押しが強ければ尚ね。」
ハルトはぐっと黙り込む。
「う～。」
ソファに座ったままじたじたと足をバタつかせ、側にあったクッションを乱暴に掴むとガブりとかぶり付きしばらく悶えていたが、ようやく諦めたように”わかった”と呟いた。
「・・・でも、僕のだからね・・・。貸してあげるだけだからね！！！」
「ありがと。」
「ハルト・・・。」
満足げに微笑むオルフェとは対照的にメディシスは申し訳なさそうな様子でハルトに歩み寄り、足元に跪くと優しく抱きしめる。
「僕のだもん・・・。」
「あぁ、わかっているよ。お前から取ったりはしない。」
悲痛な面持ちでハルトを覗き込みば、彼はおずおずと仕方なさそうな様子でクッションから顔を上げ、ため息を吐いた。
「吸血族があの子に惹かれてしまうのは仕方がないよ。あの子が許せば好きにしていいけど、優先権は僕にあるんだからね。」
「あぁ・・・わかっている。優しいね。有難う、ハルト。」
魔族の所有権は覇力の強い者にある。愛の気持ちに対する考慮がなく、まるで物のような扱いで当然のように話されているのが気に食

わず、シャルルは頬を膨らませた。魔族の優遇されている国であっても、吸血族の支配者としての意識は大木の根のように奥深くまで張り巡らされ、たとえ本体を切り倒したとしても思いもよらないところから再び芽吹いたりする。そうした危うさがこの国にはあって、吸血族が見れば麗しの兄弟愛のシーンにも見える一連のやり取りを、シャルルは冷めた目で見ていた。ちらりと自分の上司を盗み見れば、それに気付いたオルフェが悠然と微笑んで見せる。シャルルの意図を明確に読み取り、肩眉を上げて面白そうにメディシス達に視線を戻した。常日頃から”魔族と吸血族の間に隔たりがあってはならない”、”弱者は守らなければならない”、等と独自の騎士道精神を説くメディシスの根底に植え付けられている吸血族優位な言動に、本人は気付いていない。大抵の吸血族はそうで、そういう意味でオルフェは特殊だった。自分や他人を客観的に洞察し、”無意識の言動”というものが全くない。彼から発せられるのは全て計算しつくされた言葉だ。そうしてメディシスの騎士道精神とは相反する無意識の言葉を引き出しては愉しんでいる。

―流石オルフェ様。悪趣味だ。

シャルルは呆れながらオルフェを眺めた。

「さて姫君を巡る骨肉の争いが回避されたところで、本題に入ってもらいたいな。」

オルフェの言葉にメディシスは頷くと、すっと立ち上がりハルトに向かいのソファに座った。

「ハルト、君はあの姫君が異界の者だと言っていたね。」

「うん、間違いないよ。」

長椅子に寝そべったまま楽しそうに話を聞いているオルフェにシャルルは”やはり気付いていらしたのか”という思いを強める。

「オルフェ様は驚かれないのですね。」

「何となくそんな気がしていたからね。」

「気付いていたのか。いつからだ。何故言わなかった。」
不快気に眉を潜めたメディシスにオルフェは肩を竦める。
「確証がなかったからね。フィオールが今回の留学生招致の話に乗ってきたのが不自然だった。必ず何らかの理由があるはずだ。そこにゴルディアにも王女がひとり送られると聞く。フィオールから出される魔族はどうやら二人であるらしい。異界から落ちてきた魔族も二人だ。その二人はガルドに落ちずに、どこか別の場所に落ちたはず。それがフィオールだったのなら、今回送られてくる留学生は異界の者である可能性が高いと見て護衛団にルルを紛れ込ませたんだよ。ガルド皇国の吸血族に襲撃された際、役立つと思って。ルルは幼少の頃ハルトの側で育ったから強力な覇力にも耐性があるからね。ゴルディア側は吸血族の女性を護衛につけていたみたいだけれど、我が国には女性の騎士はいない。男性の吸血族の入国は拒否されちゃったから、他に人選しようがなかった。だからこれ以上ルルを責めないで欲しいなぁ。未婚の女性の側に女装した男がべったり張り付いていたというのが君の美徳に反するのはわかるよ？でも姫君に警戒されずに側にいるためにはやはり同性の方が都合が良いからね。ルル、足を崩していいよ。」
上司からの許可を得て、シャルルはほっと一息ついて足を崩す。痺れてすぐには動き出せそうもない。メディシスは首を傾げて問う。
「フィオールが留学生を送り出すのはそんなに不自然とは思わなかったが。」
「そう？ガルドが力をつけてきているから、もしもの時は守ってくれという条件がそもそも怪しい。ガルドが異界から強い魔族を引きずり落としているのは当然フィオールの女王も知っていただろうし、よほどのことがない限り強力な結界に囲まれているフィオールを襲撃することはありえない。あの結界を破ろうと思えばガルドの皇族が総出で国境付近まで出てこなければならないが、彼らがそんな危険を冒すとは思えない。さらにゴルディアにまで留学生を送るという。ゴルディアは吸血族優位の国だ。そんな国に自分の娘をそうや

すやすと差し出すなんて、いつものフィオールの女王であればまず、ない。」
「では、異界の者をゼフィーニアとゴルディアに差し出した理由は？留めおいても問題なかろう。むしろあれだけの力を持った魔族だ。自国の強化に繋がる。」
「そこなんだよね・・・。フィオールに異界の魔族が落ちたとガルドが知ったとしても、ガルドがフィオールに直接手を下す可能性は低い。それはフィオールの女王もわかっているはず。ならメディシスが言うようにそのまま異界の娘二人を国に置いていてもいいはずだから、他に何か理由があるんだろう。」
「他の理由？」
「今のところ情報が少なすぎてわからないなぁ。まぁでも当面の問題はフィオールよりガルドかな。フィオールが攻め入ってくることはないだろうけど、ガルドはいつ何をし出すかわからないからね。」
「ふむ・・・。兄上と相談しなければならないな。事が事だけに私の一存では決められない。」
「えぇー？フェルデスは保守的だからなぁ。俺としては何かしかけたいんだけどねぇ？」
未だどこかふくれっ面をしたままのハルトに顔を向ければハルトはこくこくと頷いた。
「ガルドのことだから何度もあの子を狙ってくるよ。国内に危険分子が入り込んでいないとも限らないし、早めに手を打った方がいいと思う。」
「分かった。兎に角父王と兄上に相談してくる。アイリフィア王女には城内から出ないで頂かなくてはならないかな。ここが一番安全だからね。」
どこか穏やかな表情で愛の名前を口にしたメディシスが善は急げと言わんばかりに颯爽と立ち去っていくのを見守りながらハルトは大きく息を吐いた。
「なんだかんだ言ってハルトはブラコンだよね。」

「なっ？！違う！！！！！」
シャルルがにやにやと笑いながら揶揄するとハルトは毛を逆立てながら否定する。
「こらこら、二人とも喧嘩しない。さぁて、許可出たことだし俺は味見してこようかな？」
ぎょっとした様子で自分を見上げるシャルルを尻目に、女性よりも女性らしい美貌に笑みを湛えて上機嫌に立ち上がる。
「じゃぁ僕も行く。見とく。」
不機嫌そうなハルトの声にさらに目を剥く。
「二人とも何言ってんの？！アイリ様貧血で死んじゃうからやめてよ！」
「ちょっと噛むだけなんだけどなぁ。」
「ダメです！！！！！」
「えぇー？そう。じゃぁ今日は諦めて昼寝でもしようかなぁ。」
「そうして下さい！ハルト殿下もしばらくアイリ様の部屋いっちゃダメ！」
「何でさ！」
「食べるでしょ！？」
「え。うーん。側にいたらかじっちゃうかなぁ。」
確かにとコクコク頷くハルトと共にメディシスの部屋を出て、強制的に彼の自室へと連れて行く。その前にもう一度だけオルフェに釘をさす。
「オルフェ様もちゃんとご自分のお部屋に戻ってくださいね？」
「もちろんだよ、ルル。」
胡散臭げな笑顔で手を振るオルフェに嫌な感覚を抱きつつもその場を辞したことを、シャルルは後で激しく後悔するのだった。

1．駆け引き

石造りの皇宮は、中も実に簡素だった。廊下には飾り気ひとつなく、所々に帝国ゴルディアのエンブレムが刻まれている程度で、歩く度に石畳が無機質な音を奏でる。

「レイラ様、これよりお部屋にご案内させて頂きます。」

「部屋？」

フローディアの言葉に怜は訝しげに眉を潜める。

「はい。」

「私はここに住むの？」

「然様でございますが・・・。」

「帝都にはギムナジウムがあると聞いた。寮もあるらしいからそちらでいいよ。」

フローディアはぴたりと足をとめ、驚愕に目を見開く。

「ギムナジウムは確かにございますが、王族の方が行かれるような場所ではございません！警備にも不安がございますから、どうぞ、皇宮内で我慢下さい。家庭教師を既に手配しております故。」

怜は僅かに目を伏せて逡巡する。

―確かに今の私では自分の身を守りきるのは難しいかもしれない。いつまた狙われるのか、予想もつかない。しばらくは安全なところで鍛えた方がいいか。

怜にとって何よりも優先すべきは自分の命を守ることだった。そうでなければ愛を迎えに行くことは出来ない。

「そう、わかった。それではしばらくこちらでお世話になる。」

怜の言葉にフローディアは安堵する。

「よろしゅうございました。お部屋で御召替え頂きましてから、謁見の間へご案内いたします。」

「着替えなくちゃ駄目なの？」
ぴっちりとした乗馬服を身に纏ったまま、皇帝に会おうとした者が未だかつていただろうか。小柄な怜には大人用の乗馬服では大きすぎたため、子供用の乗馬服を着ているのだが、そうすると胸元が全く合わず、はち切れんばんかりになっている。キュロットも同じようにお尻が苦しそうだ。しかし、どうやら当の本人はそんなことを全く気にしていないらしかった。
「しかし、あの、ドレスは・・・。」
「あぁ、やっぱりドレスじゃないと駄目なのか。まぁ確かに、皇帝陛下の御前でこれはないか・・・。大人しく着替えよう。」
自分の服装をくるくると見回して、納得したように首肯する。
「別に余はそのままで構わぬが。」
前方の扉がゆっくりと開かれると同時に、低い、直接脳に響くような声が静かに反響する。その声にフローディアは慌てて廊下の端に寄ると両膝を付き、深く頭を垂れた。後に続いていた者達も、同様に道を開き頭を下げていく。その動きで、悠然と近づいてくるこの男が皇帝なのだろうと怜は察し、身構える。

―全く気配に気付かなかった・・・。

その事実に憮然とすると同時に、恐怖が身体中を巡った。自分より遥かに上位の存在に、動物的な本能が警鐘を鳴らしている。
「皆、ご苦労であった。」
カイルの労いの言葉に、フローディア達は床につくほど深く頭を下げる。
「お疲れでなければ庭を案内しよう。」
「・・・有難う存じます。」
怜は皮手袋を脱いでカイルの手に自分の手を重ねる。相手の指先は、本当に生きているのかと思うほど冷たかった。カイルは怜の手をとると、先ほど自分が出てきた扉の方へ怜を誘う。蔦模様で飾られた

扉の向こうには、石造りの壁に囲まれた中庭が広がっていた。真ん中には小さな噴水が置かれ、青い鳥数羽が水を啄ばんでいる。確かに美しい光景ではあったが、庭を見渡した怜の表情が和らぐことはなかった。

「やはり長旅で疲れておられるのかな。」

寄り道に寄り道を重ね、通常の倍程の時間をかけて帝都に着いたことを揶揄されているのだろうか、カイルにそう言われ、怜は静かに首を横に振る。

「いいえ、フローディア達によくして頂きました故、疲れはございません。この度は私の留学を快く受け入れて頂きまして、真に有難うございます。」

礼を取る為にさり気無く重ねていた手を離し、胸元にその手をあてて腰を曲げる。ポニーテールが重力に従い流れ落ちて、隠されていた白く細いうなじが露になる。カイルは無意識に手を伸ばして、ゆっくりとそのうなじを指先で撫でた。怜は触れられたところを手で庇いながら弾かれたように後ずさる。

「これは失礼を。」

カイルは謝罪を口にしながら面白そうに目を細め、開いた分だけ距離を詰める。

「・・・血がお望みなら、私は皇宮に留まることは出来ません。」

怜はさらに一歩後退する。

「・・・余が、恐ろしいか？・・・異界の姫君よ。」

その距離をさらに一歩、カイルが詰めた。

―異界の・・・？

怜は努めて表情を消す。ここで一切の動揺を見せてはならない。この男は一体何を、どこまで知っているのだろうか。鎌をかけられているのか、試されているのか、怜はカイルの目をひたと見つめながらその真意を探す。

「何をおっしゃっていらっしゃるのか、解りかねます。」
言葉を選びながら、また一歩後退する。何かがちくりと背中に当たり、思わず身を庇う様に後ろ手に手を伸ばしてしまう。振り返るとそれはアーチ上のオブジェに絡みつく蔦植物で、棘のあるそれに触れてしまった怜の掌は僅かに傷ついた。
「・・・っ！」
毒でも含まれているのだろうか、痺れる様な痛みに顔を歪ませ、掌を見つめると、うっすらと血が滲み出ていた。その腕を掴まれて、問答無用で引き寄せられてからようやく怜は自分の失態に気付いた。カイルの目は金色に輝き、瞳孔は糸のように細くなっている。吸血欲を感じている吸血族特有のその変貌を目の当たりにして怜は息を飲んだ。

―フィオールで聞き習ってはいたが、ここまではっきりと瞳の色が変わるとは・・・。

感情の伴わない怜悧な眼差しが煌々と輝く様は、美しくも恐ろしかった。カイルは彼女の掌に躊躇なく舌を這わせ、血を舐め取り、掌の甲に唇を押し当てる。そうしてようやく顔を上げた頃には、彼の目はもう元の蘇芳色に戻っていた。
「・・・余に隠し立てをするか。」
全てを見透かしたような目を、真っ直ぐに見つめ返すのは容易ではない。けれども怜は一切視線を避けることなく、はっきりと先ほどと同じ言葉を繰り返した。
「何をおっしゃっていらっしゃるのか、解りかねます。」
カイルの口角が僅かに上がったような気がしたのは気のせいだろうか。それはあまりにも一瞬で、怜は確信を得ることが出来ない。
「・・・良かろう。そなたの血に免じ、此度は許そう。」
怜はカイルの手から自分の手を引き抜いた。
「フローディア達のところに戻ってもよろしいでようか。」

「許可しよう。」
怜は軽く腰を落とし礼を取ると、カイルの横を通り過ぎ、振り返ることなく皇宮へと戻っていく。その後姿を、カイルはうっとりと眺めた。

「お気に召されましたか。」
隠れていたルディアが、木陰から顔を出す。
「美味であった。」
「それはよろしゅうございました。」
カイルが怜の血を執拗に舐め取っている姿を密かに眺めていたため、十分に予想していた答えではあったが、それでもどこか信じられないような心地だった。

―陛下から”美味”という単語が発せられる日が来ようとは。
感無量と言った面持ちで、ルディアは嬉しさを隠そうともしない。
「それで、今後のご予定は。」
「ガルドの様子はどうだ。」
「は、異界の者を呼び出すために、相当数の術者を犠牲にしたと見えて、再び呼び出す余裕は残っていないかと。またこれまで呼び出された異界の者の生死についてはまだ調べがついておりません。もし亡くなっているとすれば・・・。」
「ゼフィーニアに送られた娘や、先ほどのあの娘を血眼で探していることだろうな。」
「それについてですが、待ち伏せされていたことからも、ガルドはフィオールに奪われたことに関しては大方、予想がついていたのではないかと。」
「そうであろうな。・・・鼠がうろちょろと煩わしい。宮内にまで入り込んできている。」
「・・・間者ですか。」

「余に害を成す程の力はなき故、放っておいたが、これを期に片しても良いか・・・。面倒ではあるが・・・。」
そう言って一拍置いてから、狭い範囲にカイルは覇力を開放する。
ぼとり、と木の上から庭師のような格好の男が落ちた。
「始末しておけ。」
カイルはそう言い捨てると、白地に黒の斑が入った毛皮のマントを翻す。
「畏まりました。」
ルディアは先ほどの覇力の余波を受けて少し辛そうに顔をしかめながら、それでもしっかりと立って、カイルの背中を見送る。そうしてカイルが完全に扉の向こう側へ消えてから、カイルの覇力を直接向けられて気絶してしまった男に、躊躇なくざっくりと剣を突き立てた。
「陛下は優しき故、拷問はなされない。楽に死ねたこと、あの世で感謝するといい。」
赤い血が絨毯のように広がり、けれどもそれは瞬く間に土に吸い取られて行く。
「今年もこの庭の花は赤いのだろうか。」
その花々を、あの異界の娘は受け入れてくれるだろうか、そんな懸念だけがルディアの胸を締めた。

部屋に案内された怜は、そのままソファに倒れ込んだ。
「レイラ様?!」
慌ててフローディアは怜に駆け寄る。
「いかがなされました。」
「舐められた。」
「え?」
ソファに転がったまま掌を開いてみせる。もともと血が滲んでいた程度であったため、傷口さえ何処にあるのかわからない程だ。だが、

その掌が熱を放ち、その熱が怜の身体中を駆けずり回り、暴れている。
「吸血族、の、唾液って媚薬・・・、なんだっけ・・・？」
息が苦しく、呂律も上手くまわらない。
「然様でございます。ああ、陛下はなんてことを。レイラ様、申し訳ございません、鎮静剤をお持ちしますのでしばらくお待ちを。」
フローディアが慌てて部屋から出て行く音が耳に残る。身体を支配する熱を追い出そうと、魔力を巡らせてみるが上手くいかず、逆に身体が酷く疼き出す。慌てて戻ってきたフローディアが注射器で薄い紫色の液体を怜の身体に流し込むのを、朦朧とする頭を傾けてぼんやりと眺めていたが、やがて瞼が重たくなり意識を手放した。

「みゃぉ。」
耳元をふさふさとした感触でくすぐられ、怜は目を覚ました。いつの間にかベッドに運ばれており、服もネグリジェのような寝巻きに着替えさせられていた。窓からは沈みかけではあるものの、まだ太陽が見えていて、そこまで長い間眠っていたわけではないらしかった。怜は身をすりよせてくる白い生き物を見る。顔はほぼ猫であるが、真っ白で長い耳は翼のような形でせわしなく動いている。ふさふさの尻尾を上機嫌に布団に打ち付けながら、少し距離をおいた怜に再びぴとりとくっつき欠伸をする。
「みゃぁ。」
愛らしい声で鳴くその生き物を怜はそっと腕に抱き上げて、ベッドから降りると、真っ直ぐに扉に向かい開け放つ。扉の両脇で立哨していたのはフローディアと同じように軍服に身をつつんだ女性だった。彼女達は怜が扉から出てくると怜の方に向き直り無言で礼をとる。
「皇宮内を案内して頂きたいのですが、構いませんか。」
女性軍人達は顔をあげ、頷いた。怜の腕の中に鎮座しているリリーを瞥見して少し目を丸くしたようではあったが、すぐに視線を怜に

戻す。
「はい、ご案内いたします。しかしその前にお着替えを。」
やっぱりこれは寝巻きだったのだな、と怜は自分の着ている服を見下ろしつつ頷く。
「ヴィオラ！」
大声に合わせて、隣の扉からばたばたと足音を響かせながら、質素なドレスに白いエプロンをボタンでとめた女性が出てくる。
「レイラディア様が出歩きたいとのことですので、お着替えのお手伝いを。」
ヴィオラと呼ばれた女性は怜ににっこりと微笑むと、低く腰を折った。
「ヴィオラと申します。お世話をさせて頂きます故、よろしくお願いいたします。」
「有難うございます。」
ヴィオラに連れられて部屋に戻った怜は、開かれたクローゼットから服を引っ張り出すヴィオラと共に、動きやすそうなものを探す。
「裾が長いのはちょっと・・・。」
「しかし、おみ足を出されるのは、この国ではあまり良く思われないのですが・・・。」
フィオールでは女性の人口が圧倒的に多かったためか、その辺りのことについて口煩く言われることはなかったが、ゴルディアではそうもいかないらしい。
「・・・私が着てきた乗馬服は？」
「あれはお洗濯に出させて頂きました。」
「では扉の外にいる女性の方が着ていた、」
「あれは軍服でございます。姫様が召されるようなものではございません。」
怜が言い終わる前に、ぴしゃりと遮られる。さてどうしたものか、と怜は外を見る。広がる帝都に少しずつ明かりが灯り始めている。
「お店ってまだ開いているでしょうか。」

「え？」
怜は一旦リリーを降ろすと、不服そうに睨み上げてくるリリーを踏まないように気をつけながら、最もレースやフリルの少ない衣装にささっと着替える。裾はやはり無駄に長い。フィオールから持ち込む予定だった普通のワンピースのような服は、ゴルディアでは着られないらしい。道中でも、確かに足を出すような服を着ている女性は全く見ることがなく、ズボンか裾が地面に着くほど長いローブかのどちらを身に着けていた。途中で馬車を失ったのが悔やまれたが、足を出してはならない、というのがこの国の文化であるならば従わざるを得ない。
「城下町に服を買いに行きたいのですが。」
着替え終わると同時に飛びついてきたリリーを抱き上げ、何でもないことのように言ってのける怜の言葉に、ヴィオラは慌てて首を横に振った。
「ドルツィエ少尉や陛下の許可を取らないことには・・・！」
「取ってきてもらえますか？それとも私がお願いしにお伺いした方が良いのでしょうか？」
「い、いえ、畏まりました。」
慌てて出て行ったヴィオラを待つこと数分、彼女はフローディアを連れて室内に戻ってくる。
「レイラ様、・・・あら、リリー様。」
怜の腕の中に顔を擦り付けている白い猫を見て、思わずフローディアはその猫の名を呟く。
「リリーという名前なの？」
「あ、はい、然様でございます。こちらにいらしていたのですね。陛下が随分探していらっしゃるご様子だったのですが。」
「お前、皇帝陛下に飼われているの・・・。」
哀れみの目でリリーを見つめると、リリーも悲しそうな声で同意するかのように”みゃっ”と鳴く。
「それより、お外に出られたいとのことですが・・・。」

「うん、この服は嫌だ。動きにくい。」
一週間以上もの旅の間に、怜はすっかりとフローディアに打ち解け、気は使わないで欲しいというフローディアの意向もあり言葉を崩していた。怜の少しぶっきら棒な物言いに、ヴィオラは目を剥いたようだった。
「それでは仕立屋を呼びましょう。」
「今から仕立てていたら時間がかかる。それまでこのビラビラしている服を着ていなくちゃいけないのは嫌だ。」
「しかし、もうほとんど陽も落ちてしまいましたし、危のうございます。既製服でも良いのでしたら衣装屋を呼んで参りますので・・・。」
「夜の帝都も見てみたい。賑やかだと聞いた。」
どこか期待に目を輝かせる怜の様子に、フローディアは諦めて頷いた。
「畏まりました。陛下にお伝えして参ります。」
怜の部屋を一度離れ、カイルの執務室へと急ぐ。ゆっくりと深呼吸を繰り返し”失礼します”と声をかけると、ルディアが中から扉を開けた。
「やぁ、フローディア。陛下がお待ちかねだよ。」
「ラード少佐・・・お待ちかねというのは・・・。」
不思議に思いながら中に入ると、カイルは外出用の服に着替えている様子だった。
「陛下・・・まさか・・・。」
ちらりと部屋の端を見てみると、魔鏡にリリーを抱いた怜の姿が移っている。しかし、魔鏡では声までは聞こえないはずだ。
「ここ一週間ほどで読唇術に随分磨きがかかったような気がするよ。」
得意満面の笑みでフローディアの疑問にルディアが答えた。
「少佐・・・。」
ずっと覗き見をしていたのか、と呆れると同時に、同じ女性として

は怒りも沸くが、フローディアはぐっと耐えた。
「陛下も一緒にお出になられるようだから、私も護衛につく。」
「街に下りるのは久しぶりだな。」
無表情だがどこか楽しげなカイルは、飾り気のないジャボでシャツを締め、詰襟の上着を羽織る。貴族が好んで着るスタイルだったが、カイルを取り囲んでいる侍女達はさらに、豪華な毛皮のマントの端を肩に付けられたループに通し、折り返してブローチで固定する。カイルの持つ独特で強力な存在感が豪華な衣装の影響で増してしまっている。
「さて、行くか。」
「しかし、陛下！」
「まぁまぁフローディア、気配を隠していれば誰もわかりはしないよ。」
「・・・わかりました。」
そんなはずはない、という言葉を呑みこんで同意する。結局カイルやルディアを連れて怜の部屋へ戻ることになった。

―レイラ様の反応が怖い・・・。

それでなくても第一印象は良くなかったはずであるので、フローディアとしては今以上に怜とカイルの溝を広げたくはなかった。足音で気付いたのか、部屋へ近づく途中で扉が開かれ怜が出てくる。カイルを目にしても表情ひとつ変わらないが、やはりどこか固い。カイルは怜の胸に抱かれたリリーを見とめて眉を潜めた。
「リリー、そこにいたか。」
「ふぎゃー！」
怜の腕の中で毛を逆立たせて威嚇するリリーを怜は驚いて見つめた。
「やれやれ、いつまで経っても余に慣れぬな。さて、街へ降りたいとのこと、余も同行しよう。」
「まぁ、陛下のお手を煩わせる訳には参りません。」

心が全くこもっていない怜の棒読みの遠慮に意を介した様子もなく、カイルは怜の腰に腕を廻して歩き出す。怜は仕方なくリリーを抱いたまま付き添うしかなかった。

2. 影

カラカラと揺れる馬車の中の空気は重く乾いていた。
「レイラ様、そう気を張り詰めなくとも。」
気を使って声をかけたルディアをひと睨みし、黙したまま怜は視線を窓に戻す。彼女の腕の中に収まっていたリリーまでもがルディアをぎろりと睨んでからぷいっとそっぽを向いた。
「レイラ様、夜の帝都は如何でございますか。」
苦笑いをしているルディアに代わって今度はフローディアが重い空気を変えようと挑戦する。予想以上に活気溢れる夜の帝都では、至る所で商人が声を張り上げており、或いは酒が酌み交わされ談笑が響き、また一歩路地に入れば賭け事が興じられているようだ。しかし男性の姿しか見えない。
「女性は夜、出歩かないものなの？」
素直に疑問を口にするとフローディアは当然というように頷いた。
「素行の悪い者ほど夜行性でございますから、夜は危険なのです。」
「・・・そうみたいね。」
言下に裾の長いスカートを思い切り縦に引き裂くと、膝の上でそれを結び、ヒールの靴を脱ぎ捨てる。腕から下ろされたリリーは恨めしそうに怜を見上げながらも、大人しく馬車の隅に移動して身体を丸める。
「レイラ様？！」
「ほう。なかなか敏感だな。」
感心したように頷くカイルの言葉にようやくフローディア達は馬車の後をひそかに付けている影の気配に気付く。
「仕掛けてくる様子は無さそうですね。」
殺意や害意は感じない。隙を探っているだけのようだ。
「陛下、いかがなされます。」
「好きにしろ。」

フローディアはならば、と剣に手をかける。
「待って、フローディア。こんなところで争うの？」
「レイラ様、危険分子は見つけた時に始末しておきませんと。」
「人気のいないところに誘い込むことは出来ないの？」
この疑問にはルディアが答える。
「こちらの意図に気付けば立ち所に逃げ散じますよ。とにかく逃げ足だけは俊敏な連中です。不意打ちでなければ仕留めるのは難しい。」
「・・・そう。狙われているのは私？」
「恐らく。」
「わかった。なら私が引き付けよう。無関係な都民が巻き込まれないよう、頼む。」
言うなり怜は走っている馬車から飛び出し、着地する前に思い切り魔力を膨らませ地面に叩き付けた。反動で怜の身体は弧を描きながら大きく飛翔し、飲み屋の硬い煉瓦造りの屋根に身体を打ちつけながら落ちる。
「なっ・・・！？」
「レイラ様！？」
影が怜を追って動く気配に慌ててフローディアやルディアも馬車から飛び降りる。
「おっ？なんだ？！」
地面に座り込んでいた街の者達は驚くよりも先に、非日常を愉しむかのごとく目を輝かせた。膨大な魔力を放出させて飛び上がった怜や、剣を抜いて殺気立つフローディアを観察しようと色めき立つ。
「どけ！邪魔だ！」
彼らを突き飛ばして一目散に怜へと向かっていく影に短剣数本を投げ飛ばせば、どうやら何本かが敵を掠めたらしい。致死性の毒を塗りつけてあったそれを受けたいくつかの影がぼたりと地面に落ちた気配にルディアはほくそ笑む。

「残り六だ。」
悠然と馬車から降りてきたカイルはそう言いながら、驚異的な脚力で魔力を使うことなしに壁を蹴って飛び上がり、身体を打ちつけた怜の横へマントをふわりと広げながら着地する。カイルが意図的に存在感を消しているためか、或いはフローディア達が目立っているためか、都民は彼らの王に全く気付いていないようだ。

「逃がすな！！！」
大声で部下に命じるフローディアの様子や、笑みを浮かべながら次々と首を切り落としていくルディアの様子を、怜は身体を押さえながら呆然と見ていた。
「随分と無茶をする。」
むき出しの白い足を隠すようにマントで怜を包んだカイルは、覗き込んだ彼女の顔面が蒼白になっているのを意外そうに見つめた。
「なんだ、慣れているのではないのか。」
「・・・動けなくする程度かと・・・。」
フローディア達が命をこうも簡単に刈り取って行くとは思ってもいなかった。森で受けた一度目の襲撃の際も、小屋を囲まれた二度目の襲撃の際も、実際に人が殺されたところを怜は見ていない。今始めて命のやり取りを目の当たりにし、怜は浅い呼吸を繰り返した。帝都の夜は幾千もの炎で照らされているが、それでも払いきれない闇が飛び散る血を浅黒く染めている。信じがたい事に、観戦者達は口笛を鳴らして歓声を上げていた。

「おい、皆来て見ろ！！あれ親衛隊の軍服だぜ！兄ちゃん頑張れー！！！逃がすな！！！」
「あいつら何だ？罪人か？何したんだ？誰か知ってるやついないのか？」
「おいあの姉ちゃん、ドルツィエ隊長じゃねぇか？相変わらずおっそろしい女だなぁ。」

怜が巻き込みたくないと思っていた都民達はむしろ大喜びで集まってきている。
「恐ろしいなら見る必要はない。」
カイルに目元を覆われそうになったのを、首を左右に振って拒絶する。

―あれは、私が背負うべき命だ。

実際に首を落としているのはフローディア達でもそれをさせているのは自分なのだ、と気丈に蒼白な顔を上げる。自分を抱いているカイルを押しのけると結んでいたドレスの裾を降ろし、ゆっくりと立ち上がると、逸らすことなく倒れていく命を直視する。
僅かな時間で勝敗が決したようで、程なくしてフローディアが息を切らしながら怜の立つ家屋へと走ってくる。
「レイラ様！！ご無事ですか？！」
「少し打ったけど、大丈夫。」
問題は屋根の上から降りられないことだ。
「フローディア。」
「はい。」
「私はどうやって降りたらいいだろう。」
どこか足を下ろすところはないかと辺りを見回し、結局方法が見つからず困惑しつつ問いかける。
「は？」
呆然とするフローディアを尻目にカイルが声を上げて笑った。
「リリーと同じだ。」
「リリーと？」
「余があれを見つけた時は、樹の上で震えながら鳴いていた。登ったものの降りられなくなったのだろうな。成獣になれば飛べもするが。」
「猫が飛ぶのですか？」

「何を言っている。飛ぶにきまっているだろう、猫なのだから。・・・あぁ、そうか、そなたの世界に猫はいなかったのか。」
「・・・フィオールには猫がおりませんでしたので。無知で申し訳なく。」
しれと答える怜にカイルは”然様か”と鼻を鳴らす。
「飛び上がったときのように、魔力を放出してクッションにはできないのですか？」
ルディアからの当然の疑問に怜は首を横に振る。
「失敗したら痛そうだから嫌だ。それに飛び上がるのは怖くないが、飛び降りるのは怖い。」
「では私が受け止めますので。」
そう言ってルディアは腕を伸ばすが、それにも怜は首を横に振る。
「嫌だ。」
仁王立ちで拒否を繰り返されてしまい、些か途方に暮れて立ち竦む面々に、観戦者達がわらわらと集まってくる。
「十三部隊隊長と親衛隊隊長が一緒なんて珍しいなぁ。」
「寄って来るな！お前達は飲んだくれていればいいだろう！」
追い払おうとするフローディアを軽く抑えてルディアは彼らに答える。
「十三部隊はフィオールからいらした姫君の護衛を仰せつかったのですよ。」
「へぇ？！お、まさかあそこのお嬢さんがお姫さんなのか？」
「そうだ！こら、見るな！！！」
破れたドレスから覗く白い足に男が目尻を下げたのに気付き、フローディアは目くじらを立てて怒る。
「で、なんで親衛隊の隊長までいるんだ？」
「お前達はレイラ様の横にいらっしゃる方が見えんのか？！」
フローディアの絶叫に首を傾げながら怜の横に目をやった誰もが身体を強張らせた。

闇色の軍服に身を包んでいるとはいえ、何故今まで全く気付かなかったのか。闇の中ではっきりと浮かび上がるあの蘇芳色の目は、まさしく彼らの支配者のものではないか。
「皇帝・・・陛下・・・！」
各々酔いが一瞬で醒めて、膝から崩れ落ちる。存在を認識するまでは何も感じなかったのに、今はどうだ。身体中が恐怖で支配され、額には嫌な汗が滲む。母の胎内にいた時のように身体を丸めて平伏し、彼の気配に晒す面積を出来るだけ狭くする。そうでもしないと気を失いそうだった。
「よい、面を上げよ。」
カイルは怜をさっとマントで包むと、怜が拒絶の声を上げるより早く屋根から飛び降りた。絶叫しそうになったが、そんなに高さがある訳でもなかったため、声を上げる前に着地の衝撃が怜を襲った。
「ぐっ・・・！」
舌を僅かに噛んでしまい、血の味が口内に広がる。き、とカイルを睨み上げれば顎を掴まれ深く口付けられた。血を舐め取るカイルの舌の動きから逃れようと抵抗するが力で敵う筈もない。カイルの身体を打つため拳を振り上げてはみたものの腰を強く引き寄せられ身動きもとれない。
「ふ・・・ん・・・やめ・・・。」
呼吸の間に言葉を紡ぐも黙殺され、ならばと足を強く踏んでみたが鼻で笑われた。カイルの唾液と共に体内に流れ込んできた覇力が、糸のように張り巡らされて動けなくなる。ようやく唇が離されたのと同時に腕を突き出してカイルから離れる。衝撃でバランスを崩したところをフローディアに受け止められた。
「陛下、何をなさるのです！」
「マーキングしただけだ。これで多少血が滲もうと襲い掛かる吸血族はいないだろう。」
悠然とカイルは口元を吊り上げた。確かに怜からカイルの覇力の気配がする。魔族が本来もたない力だ。魔族から感じられる覇力はそ

れを植え付けた吸血族による所有権の主張に他ならない。自分より遥かに強い覇力を魔族から感じたら、その魔族に近づく者はいない。欲しいとも思わなくなる。どんなにその血が魅力的でも生存本能が吸血欲を奪うのだ。

「しかし・・・ですが・・・！」

「フローディア、薬・・・。」

フローディアははっとして、慌てて馬車へ駆け込み薬箱を持って戻ってくる。

「随分と用意がいいですね。」

感心したようなルディアを睨みつけながらフローディアは怜に薬を打ち込んだ。

「持ち歩くようにレイラ様から仰せ付かりましたので！」

怒気を含ませながら薬箱を乱暴に片付ける。

「レイラ様、本日はもう帰りましょう。休息が必要です。」

「嫌だ、服は、買って帰る。」

短い呼吸を繰り返し熱を逃しながら怜は頑固に言い張る。

「しかし・・・。」

「出来るだけ、脱ぎ、難そう、な服、選んで。あと、一緒に、寝て。」

息も絶え絶えという様子の怜をしっかりと支えながら、フローディアは真剣に頷いた。

「そういうことでございましたら、畏まりました。」

女性二人のやり取りにルディアもカイルも苦笑いを浮かべるしかない。

結局、頑なな怜を連れて貴族御用達という既に閉店していた店を無理やり開けさせて数枚の既製服を買った。この世界の女性の平均値に比べれば背丈が小さいが、一方でバストはしっかりと大人サイズの怜であるので、やはり調度良い服が見つからず、サイズを測らせて数枚をオーダーメイドで後日届けてもらうことにする。破いたド

レスを脱ぎ捨てて、飾りベルトで上から下までびっしりと締め付けられる乗馬服を試着室で身に着けながら、あれやこれやと話し合う。
「レイラ様、これならベルトが複雑に絡めてあるので、すぐに脱がされることはありません！」
「うん、良いね。着るのは手間だけど動きやすいし。」
薬の効果もあって、落ち着き始めた怜はカタログを広げながら取捨選択をし、実際に身に着けてみて着心地を確かめる。その様子を盗み見ながらルディアはカイルに耳打ちする。
「あの様子ではしばらく寝所に入れてもらえそうにありませんよ。」
「十代の餓鬼じゃあるまいに、余はそこまで飢えてはおらぬ。」
カイルは店に飾られていた真っ白な毛皮のマントを羽織り、内側に潜り込んだ長い襟足を？き出しながら答える。そこにはいつでも自分のものにできるという支配者であるが故の余裕があった。
「おや、それはどこぞの国の第五王子のことですか。」
白は似合いませんね、と柔らかなファーが内張りされている黒地に銀模様のマントを差出しながら問えば、意味ありげな笑みが返ってきた。
「陛下がそこまでご機嫌麗しいと、不気味ですねぇ。」
「楽しくなりそうなので、ついな。あぁ、これはいいな。店主、もらっていく。」
「は、はい！！」
平伏さんばかりの店主にルディアは金貨数十枚を渡す。
「これぐらいで足りますでしょうか。」
「こ、こんなに！滅相もございません、半分でも十分でございます。」
「いえ、あちらのお姫様の分も含まれておりますので。」
「必要ない。」
さっと振り向いた怜はつかつかと歩み寄り、首からさげていたネックレスに連なっている黒く透き通った宝珠を数個抜き取ると、地べたに座り込んで頭を下げている老店主に差し出す。

「私の分、2～3個で足りるだろうか。」
「こ、これは、フィオールの樹黒晶でございますか？！」
「うん。フィオールには貨幣がなくてね。代わりにこれを持っていくように、と母に言われた。途中で積荷を失ってしまってこれだけしかないのだが。足りないようであれば母にもっとよこせと連絡しよう。」
「・・・レイラディア様。樹黒晶はひと粒で家を建てられるほど高価なものですので、どうぞそれは胸元に締まっておいて下さい。」
苦笑するルディアに頷いてから、樹黒晶を炎に透かしてじっと見つめる。
「そんなに高価な物だったのか。フィオールでは良く目にしていたから知らなかった。フローディア、これ換金してもらえる？」
くるりと振り返りフローディアに樹黒晶を差し出す。
「大体５０００万トルテでしょうか。帝貨でしたら５０枚ですね。」
「この国の貨幣価値はわからないからまかせる。」
「帝貨が１００万トルテ、金貨が１０万トルテ、銀貨が１万トルテ、銅貨は１０００トルテです。一般的に使用されるのは銀貨、銅貨、１００トルテ紙幣、１０トルテ紙幣、１トルテ紙幣ですね。帝貨は銀行や貴族しか持ちません。金貨は商人でしたら持ち歩くこともありますが、普通は金庫の中です。」
「そう。じゃあ、金貨と銀貨にしてもらえる？」
「畏まりました。皇宮に戻りませんとご用意できませんので、今はラード少佐に立て替えて頂きましょう。」
怜は仕方なくこくりと頷く。
「では少佐申し訳ございませんが、後でお返ししますので。」
「いえ、これは私のお金ではなく国庫のお金ですので衣服ぐらい贈らせて下さい。積荷を失ってしまったのは我が国の落ち度でもありますし。」
落ち度と言われて一瞬不快げに眉を潜めたフローディアを押し留めて怜は口角を上げてゆったりと微笑む。ルディアはその表情が一度

見れば忘れられないフィオールの女王ルディベッラの毒々しい笑みと重なり、異界から来た娘なのではなく、本当に女王の娘なのではないか、と肝を冷やす。
「国庫のものなのであれば尚の事、ちゃんとお返ししなければ。フローディア、よろしくね。」
「お任せを。」
皇帝の臣下であるはずのフローディアであるが、どこからどうみても怜の忠臣だった。

「数日の間に有能な臣下をひとり取られましたねぇ。」
本人達には聴こえない様にナディルがそっと耳打ちすればカイルは面白そうに頬を緩める。
「お前の望む妃の器があればこそであろう？」
「えぇ、本当に。あまり悠長に構えている時間はございませんよ、陛下。フローディアに先を越されたらどうします。」
「フローディアのことはレーバルド公に抑えておいてもらわねばならんな。」
「あぁ・・・許婚でしたね。絡んでいるところは見たことがないのですが。」
「フローディアが避けているらしい。」
「おや、レーバルド公は多方面で苦労なされているのですねぇ。」
同情を滲ませて肩を竦める。ふと前を見れば訝しげなフローディアと目が合い、ルディアは好青年と名高いその笑顔を振りまいた。
「買い物は終わりましたか？」
「えぇ、終わりました。レイラ様、夜も更けましたから観光は明日にして、本日は皇宮に戻りましょう。」
「わかった。」
今度は素直に頷いてくれた怜に安堵しつつ、一同馬車に戻り、行きと同じ道を引き返す。皇帝の乗った馬車だと気付いたのだろう、既に出来上がっている都民達は酒に酔った真っ赤な顔をぴしりと引き

締め道をあけ、頭を下げる。

「庶民の雰囲気も街の雰囲気もゼフィーニアとは随分違うな。」

ぽつりと呟かれた声をフローディアが拾う。

「ゼフィーニアをご覧になったことがあるのですか。」

「魔鏡で母に見せてもらった。向こうはおっとり穏やかな雰囲気だったけど、こちらは活発だね。」

「ゼフィーニアは王族がかなり手厚く国民を保護しておりますからね。あれは守られることに慣れてしまっているが故の穏やかさです。平和ボケとでもいいましょうかね。」

どこか侮蔑を含んだ物言いでルディアは続ける。

「自由にしろ、安全にしろ、与えられて当然と思うようになった国民ほど性質の悪いものはない。欲はとどまることを知らず膨れ上がるばかりです。こういう国は一度崩れ始めれば崩壊まで早いですよ。いざと言う時戦い方を知っているのが軍人しかいないというのは致命的です。あぁ・・・向こうでは”騎士”でしたかね。」

「ゴルディアの在り方は違うようね。」

「ゴルディアでは自由も平和も、自ら掴み取るものだと幼少から教育されます。フェミニスト国家のゼフィーニアではまず在り得ないことですが女性や子供でも剣や魔術が操れて当然です。官吏が暴利を貪れば、陛下より先に国民が立ち上がりこれを排除します。善良な国民全員が警官だと思って頂ければ分かりやすいかもしれませんね。戦い慣れさせるために国境の結界もわざと弱くしています。略奪者には容赦ないですよ、うちの国民は。法で許可していますしね。」

「わざと治安が悪くなるようにしているってこと？」

「確かに、治安は悪いですね。賄賂に手を染めたり手形を不正に売買するような官吏も多い。しかしそれも自浄作用が働いていて減少傾向にあります。ゴルディアの国民は耐えることを知りません。自分達に不利益が被ると知れば血を流すことも厭わず剣を振りかざし

ます。私がガルドでしたらゴルディアよりもゼフィーニアに仕掛けますね。ゼフィーニアの官吏は勤勉実直で有能ですし、結界も強固ですから付け入る隙がほとんどありません。ですが、一度入り込むことに成功すれば、後はちょっと突けばいいだけです。王族や騎士がどんなに優れていても、その他大勢の国民がパニックに陥れば収集は難しい。逆にゴルディアは付け入る隙だらけですが、帝国民はいち早く危機を察知する感覚を身に着けていますし、自衛する訓練を常日頃より受けていますから、少し崩れてもたちどころに修復してしまう。崩壊まで持っていくのは至難の技です。しかし、ガルドは愚かにもゴルディアを先に標的と定めたようですね。貴族院の連中にも接触を試みているようです。」

「ガルドか・・・。それでもこの国は大丈夫なのね？」

”ガルド”という国名に嫌悪しか感じない。怜や愛を無理やりこの世界に引きずり落とした皇国。もしかしたら怜や愛以外にも同じように落とされて、今も奴隷のように扱われている人間がいるかもしれない。

「無論です。貴族の中にも腐っている連中は多いですが、レーバルド公を始めまともな貴族もおりますからね。」

レーバルド公の名が出た途端ぴくりと身体を震わせたフローディアを横目で確認してルディアは思わず溢れそうになった笑みを噛み殺す。

「特にレーバルド公は自浄作用の使い方を良く心得ておいでだから、既にどこの貴族がガルドと密約を交わしているとかの情報をそれとなく行商人に流したりしているようです。行商人はおしゃべりですからね、今や帝都中に知られていると言っても過言ではない。噂を聞いた庶民らは自ら監視団を作る等の対策を始めているようですよ。」

「そう・・・。では皇帝陛下は普段何をされているのですか。」

ちらりと怜がカイルを見れば、嫌がるリリーを膝に乗せようと真顔で奮闘している姿が目に入る。

「基本的に陛下は国民の自発的な行動に許可を与えるだけです。それ故に他国では冷酷だとか非情だとか言われているようですね。どんなに民が苦しんでいても”自分達で何とかしろ”というのが陛下の在り方です。しかし陛下の覇力は強大ですので、この国に御座して頂くだけでも他国への牽制になっている。国民は自分のことは自分で守るのが当然だと教育されていますので、陛下に感謝こそすれ、恨む者などごく少数ですよ。」

そう、と短く頷きつつ怜は内心安堵していた。ゼフィーニアは今のところ安全なのだ。ガルドの使者もゼフィーニアにはなかなか入れないといういう。愛の命はひとまず保障されているといっていいだろう。ただしガルドがゼフィーニアに牙を剥いたその時は、直ぐにでも助けに行かなければならないようだ。

―何かあった時のために、直ぐに連絡を取れる手段を用意しておきたいな。

石造りの堅牢な皇宮へと吸い込まれていく揺れる馬車の中で、怜は逡巡する。術式で繋がった魔鏡を持ち込むのは何処の国でも禁止されていると言われ、持って行くことが許されなかった。全く同じ特別な魔法陣を裏に刻めば、その魔鏡同士がリンクし、空間を越えて会話も出来るようになるらしいが、国境のある国同士が、一枚づつ持つ程度で、個人でそれを持つことは厳しく罰せられているらしい。元の世界で携帯電話を自由に持ち歩けたことが、懐かしく思い出される。

「レイラ様、着きました。」

フローディアの手をとりながら馬車から降りる。夜空を仰げば、紅い月が煌々と輝いていた。”あの不気味な月を愛も見ているのだろうか”と、何処となく不安で締め付けられる胸を軽く押さえながら、今はただ無事を祈ることしか出来ない自分を、怜は歯痒く思えてならなかった。

3. 貴族院

”ゴルディアに慣れるまでの数日間はのんびりと過ごすといい”と皇帝に言われた怜は、朝早くから起き出すと早速買って来たばかりの乗馬服を身に着けて城内の探索に乗り出した。同じ部屋で護衛を兼ねて寝泊りしていたフローディアと、常に怜の足元に纏わり付いているリリーがそれに付き添う。途中すれ違う重鎮達を紹介してもらいつつ、大よその間取りを頭に叩き込む。同時に襲撃を受けた際の逃走ルート、及び合流場所をフローディアと相談しつつ決めていく。

「迷路みたいだな。」

東西南北どの方角も同じような造りになっており、ぐるぐる廻っているうちに今自分がどこにいて、どちらの方角を向いているのかすら怪しくなってくる。太陽の位置を何度確認したかわからない。

「すぐに慣れるかと。」

「リリーの方が私よりもよほど賢いな。」

来た道を戻る途中で早速方向感覚を失った怜を導くかのように、リリーはトテトテと先を歩く。その足取りには迷いなど一切なく、時折、怜達がちゃんと付いてきているか振り返って確認しては嬉しそうに翼のような耳を羽ばたかせた。

「リリーは本当にレイラ様に良くなついておりますね。」

「最初からフレンドリーだったんだけど、他の人には違うの？」

「陛下のことは特に嫌っているようです。覇力が恐ろしいのかと。」

穏やかに微笑みながら怜より数歩前を歩いていたフローディアの顔が一瞬硬直し、そうして歩調に若干の乱れが生じる。不思議に思いつつ前を見ると、赤茶色の髪を右肩から緩やかに垂らした貴族風の男がゆったりと近づいてくる。男の目はフローディアと怜を交互に捉え、そうしてゆったりと口角を上げた。

「レーバルド公・・・。」

「やぁ、フローディア、久しいね。」
どこかぎこちなくフローディアは頷いて一歩引くと怜の方を向いて、先ほど紹介してきた重鎮達と同じように彼のことも紹介する。
「レイラ様、こちらは十一貴族のシヴァン・ド・レーバルド公爵です。」
怜は軽く会釈する。
「お話はお伺いしたことがあります。十一貴族筆頭レーバルド公は随分若く、けれども陛下の信は厚いとか。私はフィオール第一王女レイラディアと申します。しばらく貴国に滞在させて頂きます故、ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いいたします。」
ニコリとも微笑まない無表情なままの怜にレーバルド公は頬を緩める。
「気性の荒い国民性ですが、気の良い者達ばかりです。どうぞ愉しんでください。それはそうと、フローディア。」
突如名を呼ばれて控えていたフローディアはビクリと肩を震わせた。常らしからぬ反応だった。頑なにレーバルド公の方を見ようとしない彼女の顎をいささか乱暴に掴んで上向かせる。
「フィアンセに対してあまりにもそっけないのでは？」
「公・・・。そのお話は、」
「むかしはシヴァンと呼んでくれていたのにね？」
噛み付くように口付けてフローディアの呼吸を奪う。その場に崩れ落ちそうになるフローディアを見て、怜は慌てて駆け寄った。
「フローディア！」
レーバルド公から奪う様に彼らを引き剥がせば、フローディアの目が金色に輝き、吸血欲を噛み殺すかのように歯を食いしばっている。
「フローディア・・・？」
レーバルド公に与えられた唾液が彼女に彼の血の味を思い出させる。
「フローディア、僕の血が欲しくなったら、またいつでもおいで。最近は随分つれないが、待っているからね。」
レーバルド公は怜に対してゆったりと腰を折ると、そのまま去って

いく。
「フローディア、大丈夫？」
「・・・えぇ、お見苦しいものをお見せしてしまって、申し訳ございません。」
一度硬く目を閉じて、次に目を開けたときにはフローディアの目は彼女の髪と同じ亜麻色に戻っていた。
「驚いた。フローディアに婚約者がいたなんて。」
「ずっと、お断りしているのですけれど、親が決めたことですから私にはどうすることも・・・。」
「フローディアは彼のことが嫌いなの？」
「そういう訳ではないのですが・・・。」
そう言いながら両手を胸の前でそわそわと組み替えて、頬を赤く染める様子はどう見ても恋する乙女のもので、怜は首をひねる。
「好きならいいんじゃないの？」
「いえ、そういう訳でも・・・。それに家柄が随分違いますし、公は血の質も良いので私ではもったいないですし、ただ幼馴染だったというだけですし・・・。」
最後の方は聞き取れないほど声が小さくなっていく。どうやら自信がないだけのようだと安心して彼女を立たせる。
「まぁ、フローディアがいいなら、いいんだけど。それにしてもちょっと城内を廻っただけでほとんどの十一貴族にあったんじゃないかな。彼らは宮内務めなの？」
「あ、いいえ、今日は貴族会議があるため、皆様来城されております。そうですね、あとお会いしていないのは、ディーゼクト公とミドランド公だけかと。」
「貴族会議？」
「はい。2ヶ月に一度、丸一日かけて行われます。貴族院の方々と陛下との意見交換会のようなものです。レイラ様には本日の昼食を皆様と共に召し上がって頂く予定でございます。」
少し先を行き過ぎて怜達が付いてきていないと知るや慌てて戻って

きたリリーを拾い上げながら、怜はしぶしぶ頷いた。
「わかった。じゃぁ一旦部屋に戻ろうか。城内の見取り図がもらえると嬉しいんだけど。」
「簡易なものならご用意できます。」
フローディアは気を取り直して微笑むと女性軍人らしいしっかりとした足取りで怜を先導した。

部屋に戻って一刻ほど経った頃、皇帝カイルが怜を迎えに来たため、怜は仕方なく彼と共に議場に向かった。開かれた扉から、一度退席していた皇帝が女性を伴って戻ってきたことで、議場にはどよめきが起こる。
「昼食の前に紹介しよう。フィオールの第一王女だ。」
「レイラディアと申します。1年ほど留学させて頂くこととなりました。以後お見知りおきを。」
朝方、彼女とすれ違った者達も、まさか議場に彼女が顔を出すとは夢にも思っていなかった。—それも、乗馬服のままで。
「髪が少し乱れているな。」
カイルが怜の髪を梳きながらそう耳打つと、彼女はうんざりしたような顔で答える。
「ドレスを着せられそうになって抵抗いたしましたから、そのせいでしょう。私は命を狙われている身。いつでも逃走できるよう、服も軽装でいたいのです。昼食をご一緒する必要はございませんでしょう。挨拶が済みましたから私は失礼いたします。」
お互いの耳元で囁き合っている姿は実に仲睦まじく、皇帝には吸血族の花嫁をと思っていた貴族達は眉をしかめる。踵を返そうとする怜の腰に手を廻し、カイルは彼女の動きを封じる。
「貴族共の反応が面白い。昼食ぐらい付き合え。」
「私は楽しくないのですが。」

不機嫌を露にした様子にカイルは喉奥でくつくつと笑う。
「余が楽しければそれで良い。」
上機嫌に自分の隣に怜を座らせると、頃合を見計らっていた侍女達が一斉に給仕を開始する。次々と運ばれる料理を尻目にせっかくの機会だからと、怜は議場を見渡した。皇帝に近い上座に座る十一人は間違いなく十一貴族だろう。中でもレーバルド公はやはり特異なようだ。若さの面もそうであるが、何よりこの議場において魔族は彼と怜の二人しかいない。吸血族の統べる国であるから当然といえば当然だが、唯一の魔族が筆頭貴族として皇帝から指定されているというのは、皇帝カイルによる魔族蔑視からの方向転換の意思表示に他ならず、吸血族こそが至上とする保守派からすれば大変に面白くないだろう。
「私に突き刺さる視線が痛いのですが。」
「余の相手が魔族というのは面白くないのだろう。」
「いつ私が陛下のお相手になったのでしょう。私は単なる留学生のはずです。」
「余が覇力を送り込んだのはそなたが初めてだからな。そなたから余の気配がすればやつらも思うところはあるだろう。」
面白そうに細められた目を怜は鋭く睨みつける。
「これ以上私の敵を増やさないで頂きたいのですが。」
怜の冷え冷えとした視線を心地よく受け止めながら、カイルは彼女の首筋をゆったりとなぞる。議場全体がとまどったような雰囲気に包まれるのに構うことなく、そのまま彼女を引き寄せるとそっと囁いた。
「敵は見えぬより見えた方が良かろう？あぶり出しているだけのこと。異界の娘を欲してやまぬガルドの犬がこの中にも紛れている。お前ならどれがそうかわかるかもしれぬな。吸血族の気配には魔族の方が鋭い。」
カイルはすっと身を引くと料理にざっくりとフォークを突き刺した。

―ガルドと繋がっている者がいるのか。

怜は神経を尖らせ、再び場内を見渡す。瞬間的に広がった怜の魔力に誰もが息をとめるが、それは一瞬で怜の中へと収束される。魔力は彼女自身だった。触手のようにそれを広げれば、手に取るようにいろいろなことが分かる。

「じろじろ見られるのは嫌いですの。私のことは気にせず、食事を愉しまれてくださいね。」

ただの威嚇だったかのふりをして、少し声を張り上げてそういうと、多くの貴族が”生意気な”と口を歪ませた。けれども怜は何事もなかったかのように、料理に手を伸ばし、ゆっくりとそれを口に運ぶ。笑みが零れ落ちそうになるのを耐えた。

―二人、私を襲ってきたガルドの使者の気配が混じっている者がいる。喰ったか。

十一貴族の中には流石に足が残るような真似をする者はいないようだ。吸血族同士で血を啜ることもあると聞く。魔族の血を取り込む時の快楽に比べれば雲泥の差ではあるものの、僅かながらの心地よさがあるらしい。ガルドの使者の中には女もいたから、そういうことなのだろう。近場にいる貴族の男達と当たり障りない談笑をしながら最後のデザートまでペロリと平らげ、お皿もすべて回収されたのを確認してから、長居は無用と怜は立ち上がる。

「送ろう。」

怜に付き添って議場を後にしたカイルは人気がなくなるとすかさず”どれだ？”と問うた。

「緑のベストを来た白いお髭が素敵な脂ぎったおじ様と、その斜め向かいにいた成金趣味キラキラの指輪を全ての指につけていた恰幅の良い方。」

「ハイラルド男爵とベズラー男爵だな。ルディア。」

「は。」
呼ばれて柱の影からルディアが姿を現す。全く気配が読めていなかった怜は悔しさから顔をわずかに歪ませる。
「調べておけ。」
「御意。」
影に溶け込むようにルディアの姿と気配が完全に消えると、怜は腰に当てられていたカイルの手を振りほどき彼に向き直る。
「貴族院に派閥はあるのでしょうか。」
「ある。二人ともディーゼクト率いる派閥に属している。どちらかといえば右派だか、実態は単なる拝金主義の巣窟だ。」
「ディーゼクト公は何処にお住まいなのでしょう？地方の方ですか？」
「いや、帝都だが、・・・行くつもりか？」
眉をしかめたカイルに対し、怜の口元はゆるやかな弧を描く。
「本日は丸一日お留守のようですから。」
ガルドが関わる者は、愛の敵でもあるのだ。怜としては放っておくことなど出来ない。ただし危ない橋を渡るつもりもなく、周辺の様子を見てみる程度にするつもりでいた。捕らえるかのごとく伸ばされたカイルの手につかまらないように身を引きながら、怜は悠然と言い放つ。
「ここまでで結構です。お送り頂きまして有難うございました。どうぞ、議場にお戻り下さい。」
「余の許可なく城内を出ることはまかりならぬ。」
「フローディア達についてきてもらいますから、ご心配なく。」
自室に向かうべくカイルに背を向けると後ろから再び腕が伸びてきて抱きすくめられる。無理やり上向かされて降りてきた唇から逃れることができない。
「ーんっ！」
抵抗しようにも羽交い絞めにされていては不可能だった。カイルの覇力が大量に体内に注ぎ込まれ心臓が割れそうな程激しく脈打つ。

全ての神経に覇力が絡みつき自由が奪われていく。ようやく身体が離されると怜は乱暴に口を拭った。
「何をする！」
「ふむ。その方がそなたらしいな。余に対してかしこまる必要はあるまい。」
「何をした！」
身体中に何かが纏わりついたような不快さがある。怜は野生獣のように牙を剥く勢いでカイルになじり寄る。
「多めに覇力を注いだだけだ。これである程度そなたの行動が見えるようになる。ただし帝都からは出るなよ。」
怜は握り締めた拳を震わせながら再びカイルに背を向ける。これ以上の言葉は無意味と言わんばかりに黙したまま去る彼女を見届けながらカイルは軽く肩をすくった。
「随分じゃじゃ馬な方ですな。」
「ジークか。追え。あまり無茶はさせるな。」
「は。」
天井から聞こえてきた諜報部隊の声に短く命じると、カイルはマントを翻して議場へと戻っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9847r/

異界の魔女

2011年6月19日17時41分発行